

井 戸 地 遺 跡

— 三重県 上野市 土橋 —

高 寺 遺 跡

六 地 蔵 B 遺 跡

— 三重県 名賀郡青山町伊勢路 —

1995・3

三重県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は以下の発掘調査報告書である。

井戸地遺跡	上野市土橋字井戸地
高寺遺跡	名賀郡青山町伊勢路字高寺
六地藏 B 遺跡	名賀郡青山町伊勢路字六地藏
- 2 本書は平成6年度県営は場整備事業にかかる埋蔵文化財報告書である。
- 3 調査に掛かる費用は、その一部を国庫補助を得て県教育委員会が、他は県農林水産部が負担した。
- 4 調査体性は以下のとおりである。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
調査協力	三重県農林水産部農村振興課、上野農林事務所 上野市教育委員会、青山町教育委員会、地元各位
- 5 調査面積、期間、担当者は以下のとおりである。

井戸地遺跡	1,200 m ²	平成6年	10月26日	主事 筒井正明	研修員 田中伸之
			～ 12月27日		
高寺遺跡	1,350 m ²	平成6年	9月1日	技師 野口美幸	技師 竹内英昭
			～ 10月27日		
六地藏 B 遺跡	1,340 m ²	平成6年	11月7日	主事 越賀弘幸	主事 竹田憲治
		～平成7年	1月30日		
- 6 本書作成のための整理作業および、遺構・遺物の実測、トレースは調査担当者の他に管理指導課が行い、写真撮影、執筆は担当者が行った。
- 7 本書の執筆分担は目次および文末に示した。
- 8 図面における方位は真北を用いた。なお当地域の磁針方位は西偏 6° 20' (平成2年)である。
- 9 本書で使用した事業計画図面は農林水産部の提供による。
- 10 本書で用いた遺構表示略記号は以下とおりである。

SA	= 柵	SB	= 掘立柱建物	SH	= 竪穴住居	SK	= 土坑	SD	= 溝	SZ	= 不明遺構
----	-----	----	---------	----	--------	----	------	----	-----	----	--------
- 11 本書で報告した各遺跡の記録類および出土遺物については三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I. 前言	(筒井正明) …	1
II. 井戸地遺跡	(筒井正明) …	1
1. 位置と歴史的環境		1
2. 遺構		4
3. 遺物		11
4. まとめ		
III. 高寺遺跡・六地藏B遺跡	(竹田憲治・西村美幸・竹内英昭・泉雄二・穂積裕昌) …	23
1. 位置と歴史的環境		23
2. 高寺遺跡		25
3. 六地藏B遺跡		39
4. 調査のまとめ		57

図版目次

II. 井戸地遺跡		
第II-1図 遺跡位置図		2
第II-2図 遺跡地形図		3
第II-3図 調査区位置図		4
第II-4図 遺構平面図		6
第II-5図 土層断面図		7
第II-6図 SB21・22・23遺構実測図		8
第II-7図 SK3遺構実測図		9
第II-8図 SD9実測図(下流部分)		10
第II-9図 SD9実測図(上流部分)		10
第II-10図 出土遺物実測図1		11
第II-11図 出土遺物実測図2		14
第II-12図 出土遺物実測図3		15
第II-13図 出土遺物実測図4		16
第II-14図 出土遺物実測図5		17
第II-15図 出土遺物実測図6		19
PL II-1 調査区遠景、SB群		21
PL II-2 SD6・9、SK3		22

Ⅲ. 高寺遺跡・六地藏B遺跡

1 高寺遺跡

第Ⅲ-1 図	遺構位置図	24
第Ⅲ-2 図	調査区位置図	26
第Ⅲ-3 図	遺構配置図	26
第Ⅲ-4 図	遺構平面図	27
第Ⅲ-5 図	B地区主要遺構、A地区土層断面、SH24・22実測図	28
第Ⅲ-6 図	SB25・26、SB16、SB29実測図	30
第Ⅲ-7 図	SB27・28実測図	31
第Ⅲ-8 図	SZ2・7実測図	32
第Ⅲ-9 図	出土遺物実測図1	34
第Ⅲ-10 図	出土遺物実測図2	35
第Ⅲ-11 図	出土遺物実測図3	36

2 六地藏B遺跡

第Ⅲ-13 図	調査区位置図	39
第Ⅲ-14 図	北側調査区遺構平面図	40
第Ⅲ-15 図	南側調査区遺構平面図	41
第Ⅲ-16 図	SB43・44、49遺構平面図	43
第Ⅲ-17 図	調査区東南部SB45～48	44
第Ⅲ-18 図	SK1遺構平面	46
第Ⅲ-19 図	SK6、SX30遺構平面	48
第Ⅲ-20 図	SZ42遺構平面図	49
第Ⅲ-21 図	SD28遺構平面図	49
第Ⅲ-22 図	出土遺物(1)	51
第Ⅲ-23 図	出土遺物(2)	52
第Ⅲ-24 図	出土遺物(3)	53
第Ⅲ-25 図	出土遺物(4)	54
第Ⅲ-26 図	出土遺物(5)	56
PLⅢ-1	高寺遺跡調査区全景(東から)、SB26・27(北から)	59
PLⅢ-2	高寺遺跡 SH22(南西から)、SH24(南西から)	60
PLⅢ-3	六地藏B遺跡 調査区全景(北から)、調査区南側(東側中央で南西から)	61
PLⅢ-4	六地藏B遺跡 SK1(東から)、SK6(北から)	62
PLⅢ-5	六地藏B遺跡 SX30(北から)、同(西から)	63
PLⅢ-6	六地藏B遺跡 SD26・28(東から)、SD28(北東から)	64

表 目 次

Ⅲ. 高寺遺跡・六地藏B遺跡

2 六地藏B遺跡

第Ⅲ-1 表	時期別遺構一覧表	42
--------	----------	----

I. 前 言

三重県教育委員会では、国及び県にかかる各種公共事業に関して各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めている。

こうした中で、三重県農林水産部農村整備課から、県営ほ場整備事業(上野北部地区)及び同(上津地区)の回答を受け、三重県埋蔵文化財センターが分布調査を実施した。その結果、上野北部地区の事業予定地は井戸地遺跡の範囲内にあることが判明した。このため三重県埋蔵文化財センターでは遺跡の実態を把握するため、平成5年11月～12月にかけて試掘調査を実施し、井戸地遺跡の事業地内での範囲を確定した。

また、上津地区についても同様に分布調査によって事業予定地内には高寺遺跡、六地藏B遺跡の範囲内であることが判明したため、平成6年2月に試掘調査を実施し、該当する2遺跡の事業地内での範囲を確定した。

これら遺跡の取り扱いについては、その保護に努めるよう県農林水産部農村整備課・上野農林事務所と、県教育委員会文化芸術課・三重県埋蔵文化財センター間で協議を重ねたが、現状保存が困難なため、やむなく発掘調査を実施して記録保存をすることとした。

調査は県農林水産部農村整備課の執行委任を受け、井戸地遺跡は平成6年10月26日～12月27日に、高寺遺跡は平成6年9月1日～10月27日に、六地藏B遺跡は平成6年11月7日～1月30日に、それぞれ実施した。

なお調査にあたっては県農林水産部農村整備課、上野農林事務所、上野市教育委員会、青山町教育委員会にご協力をいただいた。

また、地元の方々には発掘作業に従事していただくなど様々なご協力をいただいた。

改めて感謝の意を表したい。

II. 上野市土橋 井戸地遺跡

1. 位置と歴史的環境

井戸地遺跡(1)は上野市北部を西流する柘植川北岸の丘陵上に位置し、行政上はそれぞれ上野市土橋字井戸地である。当遺跡付近では西出遺跡(2)の他、古墳時代から中世にかけての遺跡が多数分布し、平成5年度にも新たに久保遺跡(3)、北出遺跡(4)、火山遺跡(5)の古墳時代～室町時代にかけてのものと思われる遺跡が確認されている。

上野市は畿内と東国を結ぶ旧伊賀国に属す。この伊賀国内では畿内と東国を結ぶ東西の経路が、それぞれ伊賀南部と伊賀北部に通過し、さらにこの二つ経路を伊賀国内で結ぶ南北の経路が一貫して存在したと考えられている。¹

このうち伊賀国の北部を通過する畿内と東国を

結ぶ主要路には、県下最大の御墓山古墳(6)や、外山古墳群(7)、石打・奥ヶ谷古墳群(8)、新堂山古墳群(9)、鷲棚古墳群(10)など多数の古墳が分布する。東山古墳(11)出土の四獣鏡は兵庫県和田山城の山古墳や岡山県用水1号墳から同形のものと考えられていることや、山神寄建神社古墳(12)から三角縁三神二獣鏡が確認されていることなどから、畿内政権との交渉は頻繁であったであろう。その際にはこの主要路が重要な役割を果たしたのであろう。また、木津川水系の支流である柘植川を介在して畿内勢力と交渉を持った可能性もあろう。

藤原京の時代までは畿内から伊賀国名張郡へ出て北上し、伊賀駅・伊賀の中山・阿閑・積殖の山口・

大山・鈴鹿の、いわゆる壬申の乱の際に大海人皇子が美濃国をめざし、さらに大海人軍が倭古都をめざして行軍した経路で、畿内と東国を結ぶための、当時の主要陸路と思われる、伊賀国内の南北経路に沿って白鳳寺院跡である才良廃寺、伊賀評（郡）家跡と推定される下郡遺跡、飛鳥～奈良時代の地方豪族クラスの屋敷跡と推定される掘立柱建物が多数確認された森脇遺跡などの遺跡が位置する。

平城京遷都後、畿内から東国への経路は京北へ出て東へ向かい、和同4（711）年に新設された山背国相

楽郡岡田の駅、伊賀国阿閉郡新家駅から伊賀国府を経て鈴鹿関へぬける道が主流となった一方で、霊亀元（715）年に開かれた、平城京から大和高原上の都祁村から名張盆地へ出て参宮の道に合流する「都祁山の道」は、平城京から伊勢神宮への最短経路であると同時に、伊賀南部から北へ分岐し、伊賀国府へ向かう道であり、途中伊賀国分僧寺跡や同尼寺跡と推定される長楽山廃寺が位置する。平城京から伊賀南部を経て伊賀国分寺を経由し、伊賀国府の南正面へ近接することができる道であることから、平城京に



地図中 ● は主な古墳 ■ は主な古墳群 ■ は主な中世城館

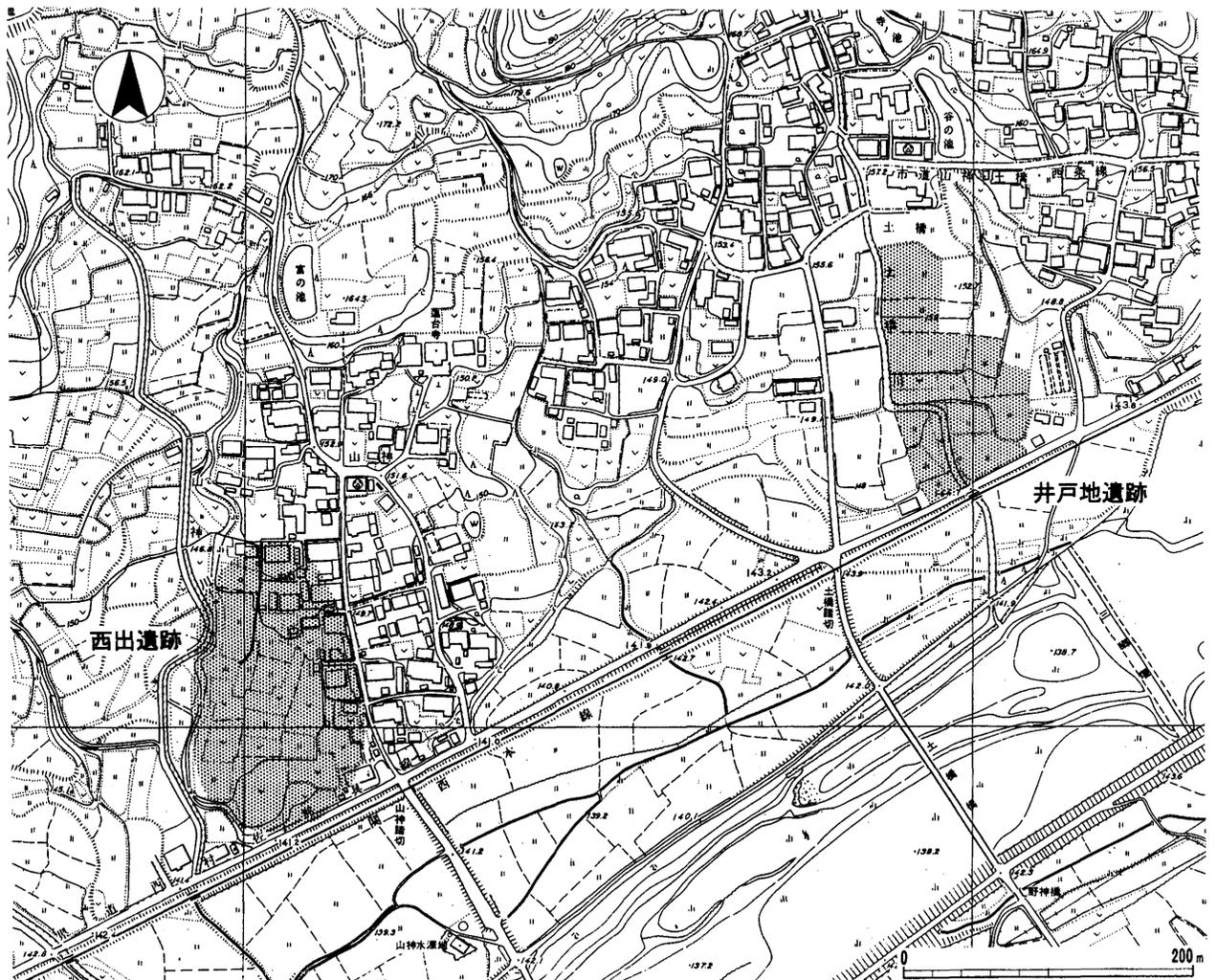
第Ⅱ-1図 遺跡位置図（1：50,000）【国土地理院 鳥ヶ原、上野 1：25,000 から】

おける南からの東海道の迂回路と認められ、同時に伊賀国内では南北の中心地域を結ぶ主要道として機能したと思われる。

伊賀国府(13)は近年の調査で柘植川北部の国町地区を中心とする地域であることがほぼ確定されたことから、² 新家駅の推定地である官舎遺跡(14)の位置や奈良～平安時代の掘立柱建物が多数確認された北門遺跡(15)、確認された遺構や遺物から国府に関連性があると思われる外山大坪遺跡(16)の存在などから、奈良時代の東海道は国府西方では柘植川の北岸、をたどったものと考えられ、さらに黒色土器が出土する古屋敷遺跡(17)、平安時代中期末～末期にかけての掘立柱建物が検出された西沖遺跡(18)、³ 平安末期の掘立柱建物が検出された的場遺跡⁴の位置から、国府東方でも柘植川沿岸を進み、大山(加太峠)を越えたものと思われる。国府周辺では飛鳥～奈良時代の掘立柱建物が検出された大多田遺跡(19)や平

安時代～鎌倉時代の掘立柱建物が検出された三反田遺跡と東の堂垣内遺跡(20)が位置することから、柘植川南岸にこの時代の中心的な集落があったと考えられ、伊賀国府は中心集落を南面に見下ろす位置に設置されたといえる。また、白鳳寺院跡である三田廃寺(21)の位置を勘案すれば、伊賀南部から伊賀国府を結ぶ南北の道は現在の三田～佐那具間の条里にあった南北の道に沿って柘植川の北岸に渡河したものであると思われる。このように井戸地遺跡は伊賀北部の中心地域に位置するとともに、新家駅、三田廃寺、伊賀国府を結ぶ東西の主要道に、伊賀を南北に結ぶ主要道が合流する地域に位置したと考えられる。

中世後期の伊賀地方は多くの機会て説明されているように、藤原氏・東大寺・興福寺等古代後半～中世前期に勢力を持った荘園領主が衰退した後在地勢力が台頭し、伊賀一国を支配する守護大名や戦国大名の出現を許すことはなかった。確かに概ね北伊賀



第Ⅱ-2図 遺跡地形図(1:5,000)

る。遺跡の現況は水田で標高が最も高い地点で153.31m、最も低い地点で145.86mで遺跡範囲内の標高差が7.45mある。今回の調査区は東に向きをかえた土橋川が再度南へ方向を転換する地点の東部に当たり、調査区西部の標高は147.14m、東部は148.28m、現況は水田である。

調査区西部の基本層序は東1/2は第1層：耕作土、第2層：灰茶色土、第3層：灰黄色土、第4層：暗灰褐色土、第5層：黄色粘質土（地山）である。西1/2は第4層までは同一で以下第5層：暗灰褐色土に5～40cm大の礫が混入する層（包含層）、第6層：灰黄色砂質土に5～20cm大の礫が混入する層で、西1/2の部分は土橋川の氾濫原と思われる。

調査区東部の基本層序は第1層：耕作土、第2層：灰黄色土、第3層：暗灰黄色土、第4層：黄色粘質土（地山）である。

(2) 遺構

調査の結果、調査区西部では奈良時代を中心とした遺構を、東部では中世の遺構をそれぞれ確認した。

調査区西部の遺構

掘立柱建物

SB21 M6～M7グリッド付近を中心に検出した。3間×2間の南北棟で、主軸はN4°Eである。桁行は6.0mで柱間は2.0m、梁行4.6mで柱間は2.3mであるが、西面の柱間は北から2.3m、1.7m、2.0mと不揃いである。柱掘形はおおむね隅丸方形を呈し、径は0.25～0.60mであるがほとんどは0.25～0.30mで、深さは0.30～0.50mである。

SB22 L6～M8グリッドを中心に検出した。3間×2間の東西棟の身舎に南面庇がつくが、庇部分の柱穴は南西隅部分のものを検出できなかった。主軸はE8°Sである。桁行6.3mで柱間は2.1m、梁行4.6mで柱間は2.3m、庇部分は南へ1間分で1.8mである。柱掘形はおおむね隅丸方形を呈し、径は0.50～0.90cm、深さは0.40～0.60mである。庇部分の柱穴は、いずれの箇所も2つの柱穴が重複していることから、庇部分のみを建て替えた可能性がある。

SB23 K5～L6グリッドを中心に、北面を3間分、東面を2間分のみを検出した。検出された部

分の北面は6.3mで柱間は2.1m、東面は4.2mで柱間は2.1mである。SB21・22の規模から推定すれば、SB23は3間×2間の東西棟と思われる。主軸はE10°Sである。柱掘形は円形、楕円形、隅丸長方形と一定せず、径は0.30～0.60mで、深さは0.30～0.70mである。墨書のある須恵器杯片が出土した。

上記3棟の掘立柱建物は、いずれも古墳時代～奈良時代にかけての土師器片、須恵器片等が出土した。このことより3棟の掘立柱建物は奈良時代のものと判断した。ただし切り合い関係は不明。

溝

SD17 G3～H8グリッドにかけて約23.4m分を検出した南北溝である。方向はN6°Wで、幅約1.2～1.7m、深さは約0.35mである。古墳時代の土師器甕・高杯等の遺物が出土するが、中世の遺物を含む包含層を切ることから、中世以降のものと考えられる。土橋川の旧流路の可能性もある。

調査区東部の遺構

柱列

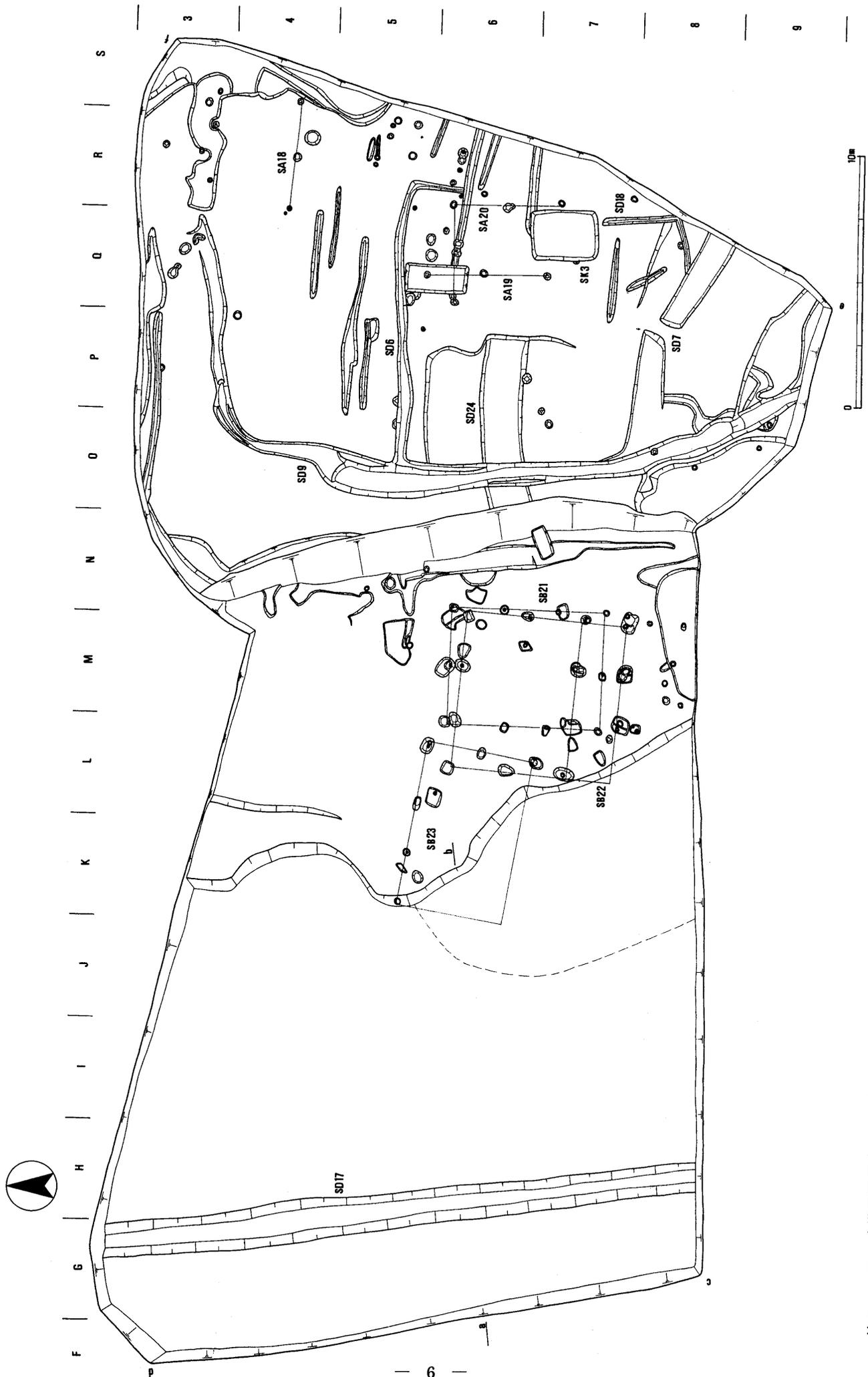
SA18 R4グリッドを中心に東西2間分約4.4mを検出した。方向はN7°Sである。柱間は約2.2m、柱掘形は円形で、径0.2～0.3m、深さ0.16～0.18mである。土師器皿片、瓦器椀片等と共に、近江系黒色土器椀と思われる遺物が出土した。

SA19 Q6グリッドを中心に南北2間分約4.0mを検出した。方向はN1°Eである。柱間は約2.0m、柱掘形は円形で、径0.22～0.25m、深さ0.16～0.33mである。方向からSK3と関連する可能性がある。土師器片、須恵器片、瓦器椀片等が出土した。

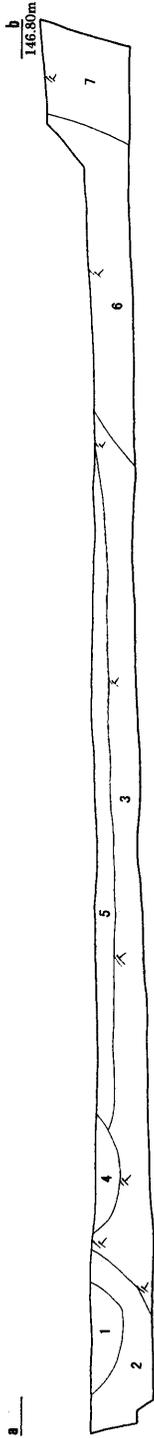
SA20 Q6グリッドを中心に東西2間分約4.0m、南北2間分約4.0mを検出した。方向はN1°Eである。柱間は東西・南北共に約2.0m、柱掘形は円形で、径0.21～0.30m、深さ0.05～0.25mである。方向からSK3と関連する可能性がある。

土坑

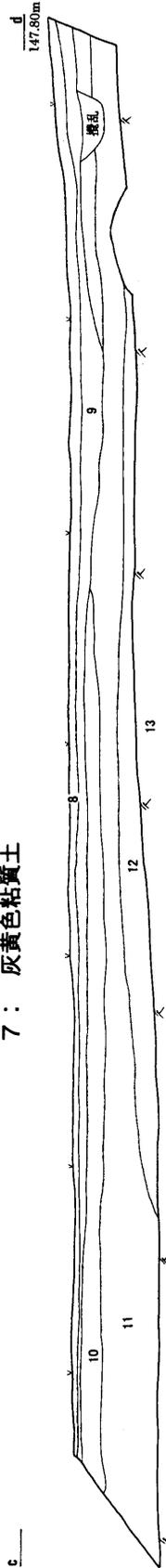
SK3 Q7グリッドを中心に検出した。東西3.3m、南北2.4mの長方形を呈し、深さは0.25～0.35mで、主軸はN1°Wである。埋土は3層で、第1層：暗灰色粘質土、第2層：暗灰褐色土に茶色土が粒子状に混じる埋土に焼土と5～50cm大の礫が大量に混入



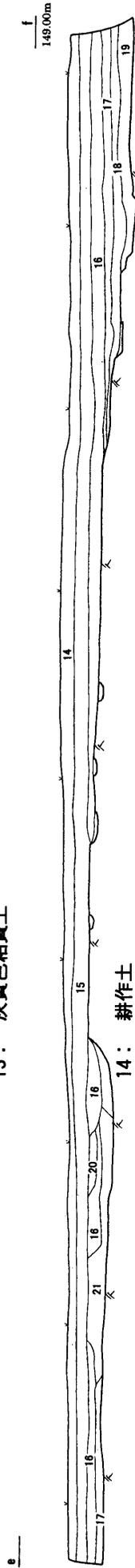
第II-4図 遺構平面図(1:200)



- 1: 暗褐色土に5~10cmの礫が混入
- 2: 灰黄色粘質土
- 3: 灰黄色砂質土に5~20cmの礫が混入
- 4: 黒褐色土に5~10cmの礫が混入
- 5: 暗灰褐色土に5~10cmの礫が混入
- 6: 灰褐色砂質土に5~40cmの礫が混入
- 7: 灰黄色粘質土

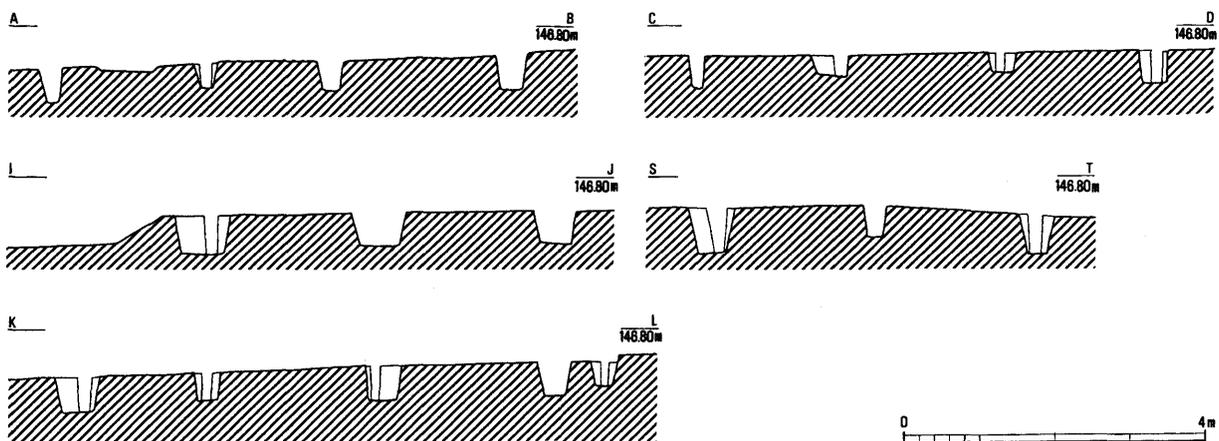
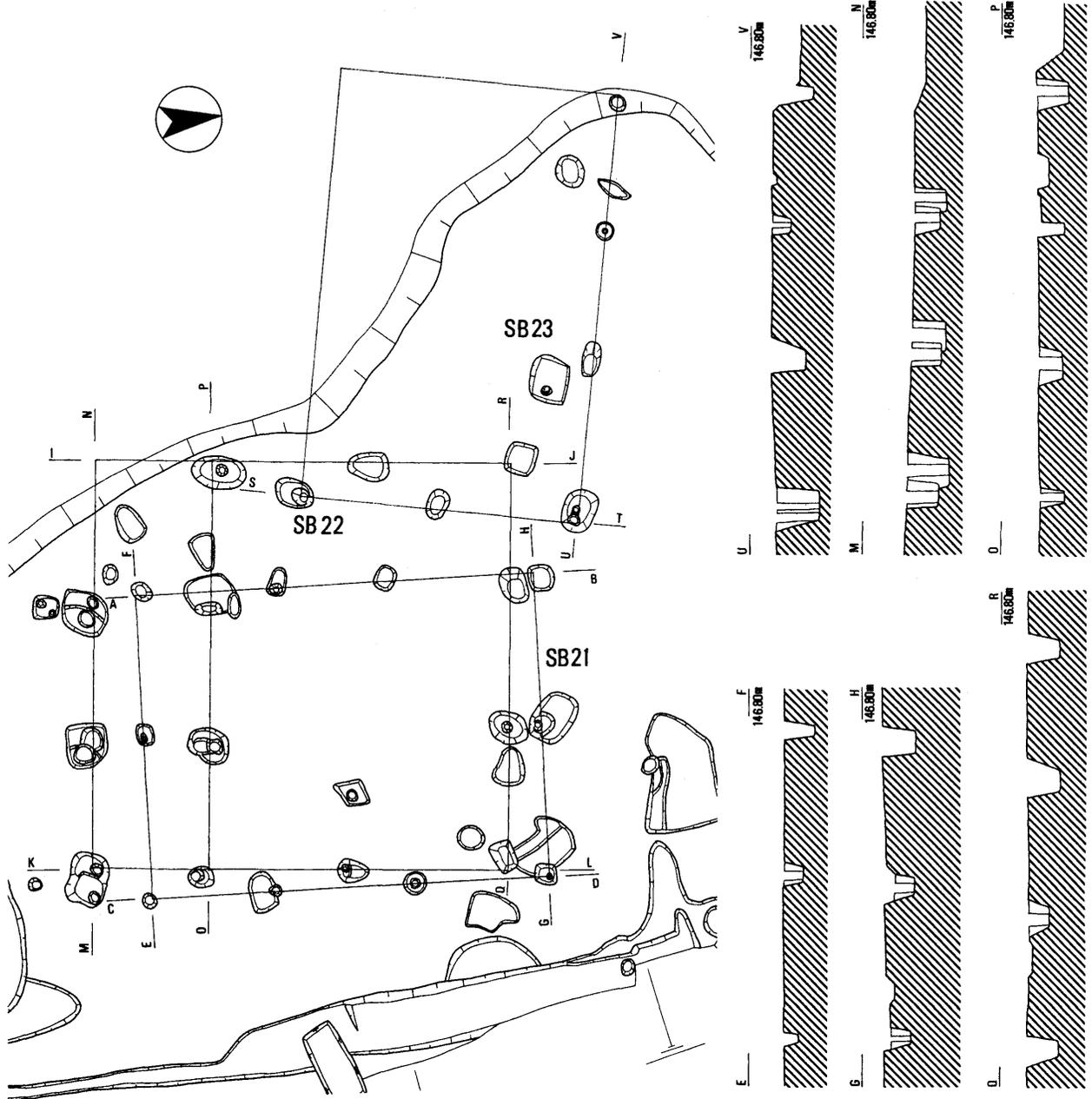


- 8: 表土
- 9: 灰茶色土
- 10: 灰黄色土
- 11: 暗灰褐色土
- 12: 暗灰褐色土に10~40cmの礫が多量に混入
- 13: 灰黄色粘質土

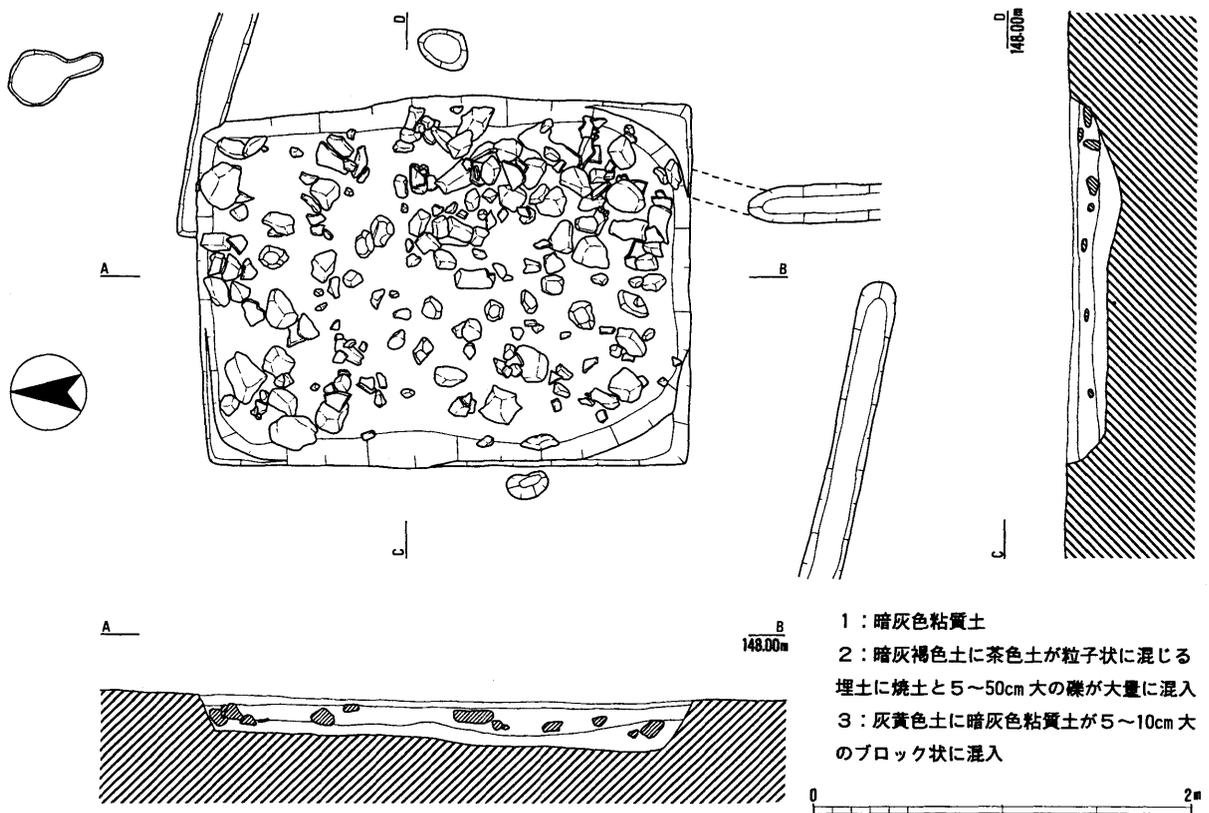


- 14: 耕作土
- 15: 灰黄色土(床土)
- 16: 暗灰黄色土
- 17: 暗灰褐色土
- 19: 灰褐色土
- 20: 暗灰黄褐色土に暗褐色土がブロック状に混入
- 21: 暗灰黄褐色土に10cm前後の礫が混入





第II-6図 SB21・22・23遺構実測図(1:100)



第Ⅱ-7図 SK3遺構実測図(1:40)

する層、第3層:灰黄色土に暗灰色粘質土が5~10cm大のブロック状に混入する層である。第2層の礫の中には火を受けた痕跡があるものが若干あるが、土坑の底部や壁面には火を受けた跡は確認できなかった。信楽焼甕が7個体以上、土師器皿が10個体以上の他、瓦器碗片、瓦器皿片、陶器片等の遺物がコンテナバット12箱分出土した。これらの遺物のほとんどは第2層から出土しており、各遺物の時期は14~16世紀と時期幅が大きい。おそらく最終的にこの土坑は、廃棄土坑として利用され、いずれかの場所で生じた焼土と、大量の礫や土器を一括投棄したものである。また、SD8と暗渠でつながるが、その位置はSK3の底部分より高く、第3層上面のレベルとほぼ同じである。

溝

SD6 O5~R5グリッドにかけて東西約11m、R5~R6グリッドにかけて南北約2m部分を検出した溝で、幅約0.3~0.6m、深さ0.05~0.15mで、東西部分の方向はW1°Sである。東西部分には約8cm~40cm大の礫を大量に含み、土師器皿、平碗、信楽焼甕・水差等が出土した。南北部分は残存が悪く、

攪乱溝に切られた後、その続きは確認できなかった。その方向や出土遺物から、SK3に伴う区画溝の可能性はある。東西部分はO5グリッドでSD9と合流する。

SD7 O7~Q8グリッドにかけて約8mを検出した東西溝で、幅約0.5m、深さ約0.10~0.04mである。おそらくP8グリッド付近が分水嶺となり、東流と西流に別れるものと思われる。東部にSD8が合流する。西部はO7グリッド部分の残存が悪いため、SD9との切り合い関係は不明。SD8と同時期のものと思われる。

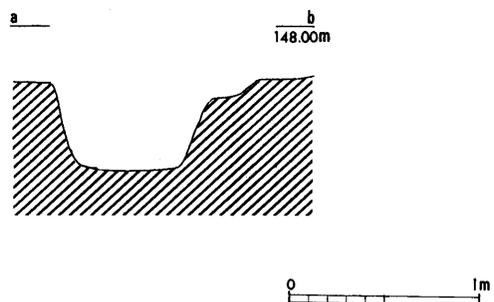
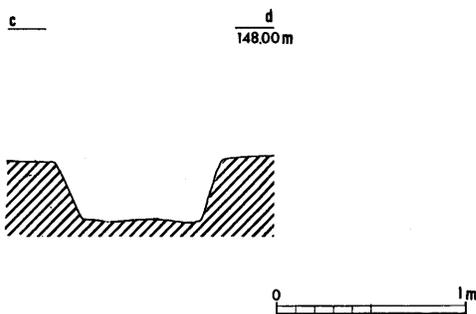
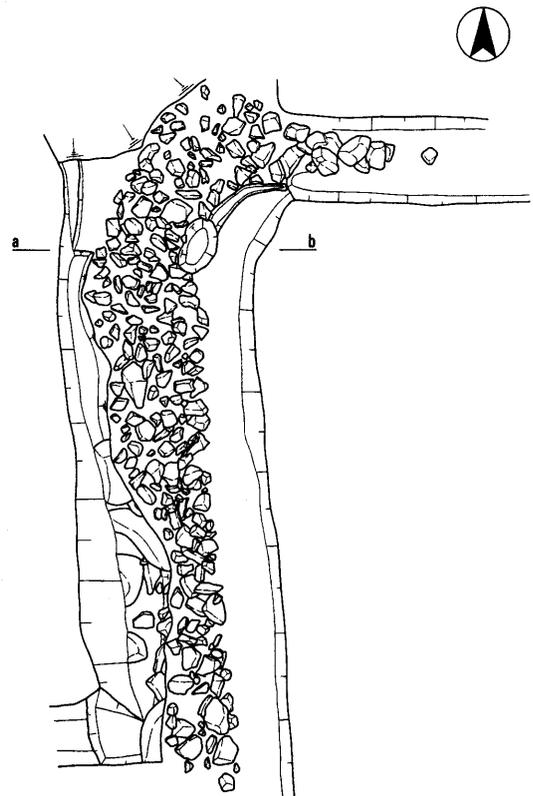
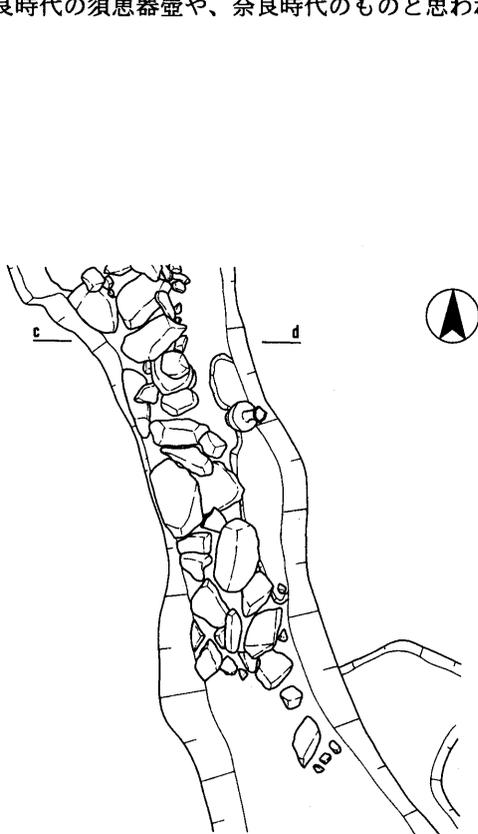
SD8 Q7グリッド付近で、南北約3.0m、東西約1.6mを検出した溝で、幅約0.3~0.4m、深さ約0.15~0.05mである。Q7グリッドでSK3の南西隅と暗渠でつながり、Q8グリッドでSD7と合流する。SK3に伴うものと思われる。

SD9 S3~O3グリッドにかけて東西約14.0m、O3~P9グリッドにかけて南北約23.0m部分を検出した溝で、幅約0.8~1.5m、深さ約0.2~1.0mである。南北部分は、北部約4.0mの深さは概ね0.2m程度であったのが、O5グリッド付近から約

0.5mとなり、その地点から約2.0m南でSD6と合流する。東西部分の西半分と南北部分の北約4.0m部分の埋土は、灰黄色土に茶褐色土が粒子状に混入する層である。南北部分の、深さ0.5m以上の部分は、基本的に灰黄色土に20~50cmの埋土であるが、SD6と合流後約3.2mの間は上層に暗灰褐色土に5~10cmの礫が混入する層が堆積する。土師器皿・鉢・羽釜、信楽焼甕等の中世遺物と共に、ほぼ完形の奈良時代の須恵器壺や、奈良時代のものと思われる

る平瓦が出土した。

SD24 O6~P6グリッドにかけて東西約6.5m検出した溝で、幅約1.6m、深さ約0.05~0.09mである。O6~P7グリッド付近は、周囲より約0.1m程度窪んでおり、そこにたまった堆積土を除去した後に、SD24を確認した。残存も悪く、遺物も出土しなかったが、中世の溝SD9に切られる。SD24は中世以前の溝である。



第II-8図 SD9実測図(1:40) 下流部分

第II-9図 SD9実測図(1:40) 上流部分

3. 遺物

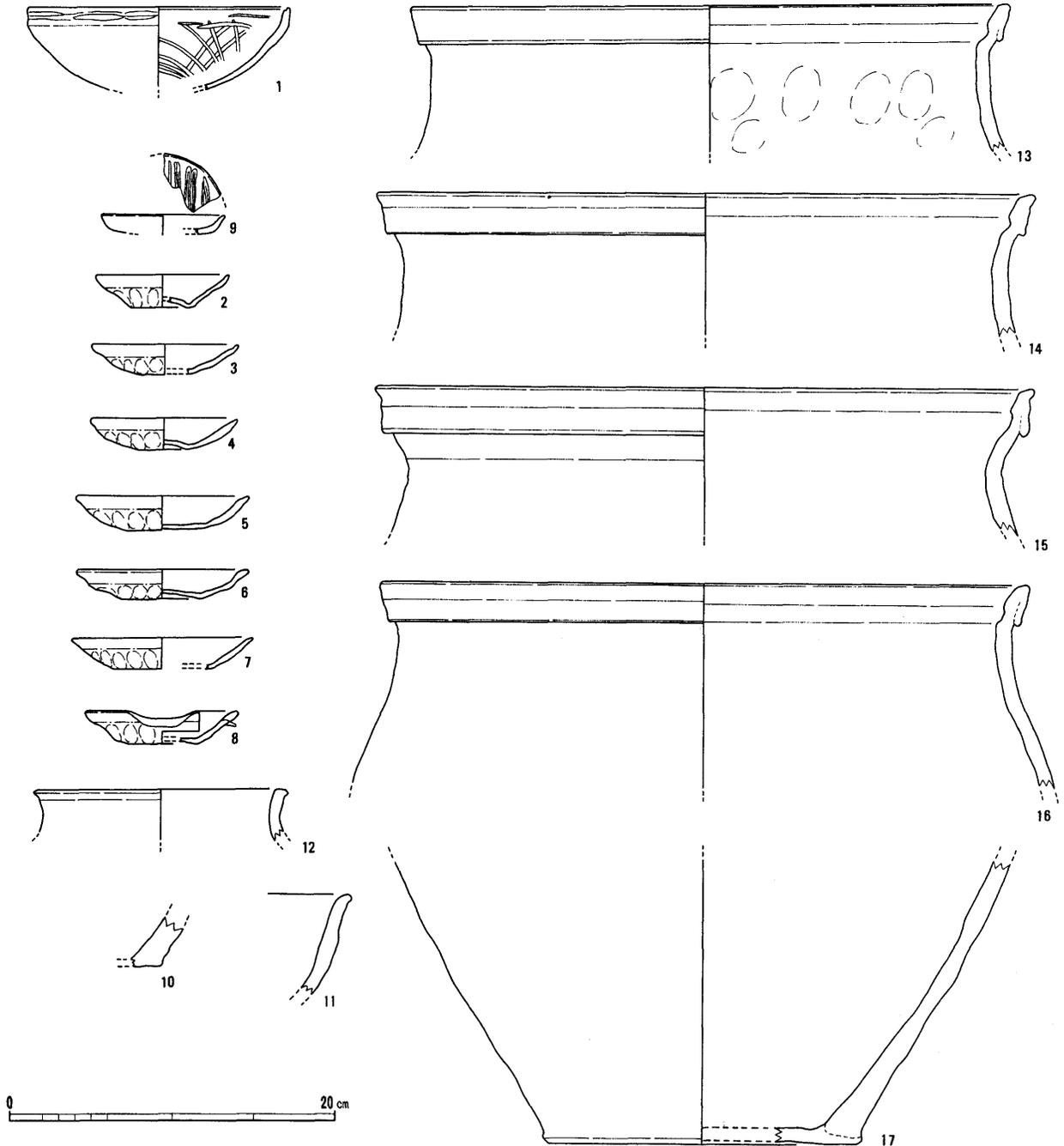
(3) 遺物

遺構から出土した遺物は、中世の土師器、陶器等が中心である。また、調査区西地区のK地区以西にある包含層からは古墳時代前期から奈良時代にかけての土師器、須恵器等の遺物が多く出土した。しかし、同包含層からは少数ではあるが中世の土師器片、

瓦器片、陶器片等も出土することから、おそらく土橋川の氾濫により中世以降に形成されたものと判断した。

SA18 出土遺物

黒色土器碗 (1) 内黒の黒色土器A類碗で、口縁部が出土した。推定口径が15.7cm、厚手で緩やかに内弯し、口縁端部は上方に立ち上がる。口縁端部は



第II-10図 出土遺物実測図1 (1:4) SA18・SK3出土遺物

ヨコナデを施し、内面に1条の沈線が認められる。口縁部内面に、上方向へ放射状のミガキを右方向と左方向に交差させて施すが、口縁部外面はオサエで、ミガキは確認できない。また、口縁端部には内外面共に横方向のミガキが、不明瞭ながら認められる。

「近江産黒色土器」の可能性が考えられ、森隆氏の近江産黒色土器編年のⅡ-4段階に相当すると思われる。¹

SK3出土遺物

土師器皿 (2~8) いずれも内面ナデ、外面オサエ、口縁端部にヨコナデを施す。2・4は底部中央部の外面から内面へ向かって窪みがあり、また2は、内面の口縁部と底部の境に窪みが見られ、口縁部は中央からやや外方向に伸びながら内弯する。3・4・7は口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、5・6はやや内弯する。また強いヨコナデによって、口縁端部をつまみ出すもの(7)や、口縁端部が外反するもの(5・6)がある。2・3・4の小皿と5・6・7の大皿とに分類でき、胎土は概ね精良であるが、成形の粗雑化が目立つ。8は口縁端部の一部を外側下方へ注口状につまみ出し、また他と比べ胎土が粗悪である。

瓦器皿 (9) 器壁は厚く、推定口径が7.6cm、器高1.2cmと小形のものである。口縁部は短く、底部から屈曲してほぼ直線的に外傾する。内外面共にヨコナデを施し、内面にはジグザグ状のミガキが認められる。

陶器 信楽焼鉢 (10~11) 10は底部の破片で、体部内外面共にロクロナデが施され、底部外面は平坦でナデは施されない。内面に4本の播目が残存する単位と1本の播り目が残存する単位の、2単位の播り目が確認でき、また播り目の単位は重ならない。このことから10は、1単位4本以上の播目を持つ播鉢と思われる。残存部分が少ないため底部径の復元はできなかった。11は口縁部のみで内外面共に回転ナデを施し、内弯ぎみに立ち上がり、口縁端部は施される強い回転ナデにより、やや外反する。また、内面に播目は見られない。残存部分が少ないため、口径の復元はできなかった。

陶器 信楽焼壺 (12) 口縁部のみで、内外面とも回転ナデを施し、口縁端部を外側につまみ出し、口

縁端部上面は平坦な面を持つ。

陶器 信楽焼壺 (13~17) 13~16はいずれも口径が約40cm前後で、体部は内外面ともに回転ナデを施し、13の内面には回転ナデ以前のオサエが、16の内面には頸部と体部の接合痕が認められる。口縁部は、端部を外側に折り返した後、縁帯を形成し回転ナデを施す。口縁部内面には端部から約2cm下部に、強い回転ナデによる幅約1cm前後の窪みが巡る。いずれも頸部で屈曲するが、15は他と比べてその屈曲が大きい。17は体部と底部を接合し、接合部分の内外面に回転ナデを、体部は内面に回転ナデを、外面にはタテナデを、底部内面はナデを施す。13~16は松澤氏による信楽焼編年の第V型式に相当すると考えられ、17も同時期のものと思われる。²

SD6出土遺物

土師器皿 (18) 口縁が中央部で屈曲し、上半分を外反させ、口縁端部を上方へつまみ出す。内面の底部と口縁部の境に工具による窪みが認められる。

陶器 瀬戸平椀 (19) 体部が直線的にのび、口縁端部が若干外反する。削り出し高台は、高台脇の削り込みは明瞭であるが、高台内の削り込みは浅く不明瞭である。内面に重ね焼きの痕が認められる。藤澤良祐氏による古瀬戸後期様式編年の後Ⅱ期~後Ⅲ期に相当すると思われる。³

陶器 信楽焼水指 (20) 内外面共回転ナデを施し、口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は平坦な面を持つ。

陶器 信楽焼壺 (21・22) いずれも内外面共回転ナデを施す。21は口縁端部を外側に折り返し、厚い縁帯を形成する。口縁部内面には端部から約2cm下部に、強い回転ナデによる幅約1cm前後の窪みが巡る。頸部の屈曲は明瞭である。松澤氏による信楽焼編年の第V型式に相当すると考えられる。⁴ 22は体部と底部を接合し、接合部分の内外面に回転ナデを施す。底部外面には板圧痕が認められる。

SD9出土遺物

土師器皿 (23~27) 内面ナデ、外面オサエを施すが、ヨコナデの範囲が口縁部内面のほぼ全面に及ぶもの(25~27)と口縁端部のみのも(23・24)がある。また、いずれも口縁部はほぼ直線的に外傾する。26は底部外面に板圧痕が認められる。23は底部

外面から内面へ向かって窪みがあり、胎土が他と比べてかなり粗悪で砂粒が多く含まれる。

土師器羽釜(28) 口縁部は短く内側にほぼ直線的に立ち上がり、残存部に突穴が1カ所認められ、口縁端部は外側に折り返す。体部には横方向のハケ目が残存する。

瓦質土器鍋(29・30) 29は器壁が厚く、体部はやや丸味を帯び、口縁部は外方に屈曲しほぼ直線的に伸びる。口縁部外面には、工具によると思われるヨコナデが認められる。30は器壁が薄く、口縁端部を内側に折り返す。

陶器 信楽焼壺(31) 口縁端部を外側に折り返し、厚い縁帯を成形する。口縁内面には端部上面から約2cm下方に、強いヨコナデによる沈線が巡る。頸部内面に接合痕が認められる。松澤氏による信楽焼編年の第V型式に相当すると思われる。⁵

須恵器壺(32) 貼り付け高台を有する長頸壺である。口縁部の2/3程度を欠く他はほぼ完形で出土した。口頸部内外面及び肩部に自然釉が付着する。平城Iに相当すると思われる。

瓦(33) 上面にハケ目、下面に格子タタキ目が認められる平瓦である。奈良時代のものと思われる。

その他の出土遺物

古墳時代前期の出土遺物

土師器椀(34・35) 34は内外面ともナデを施し、体部はほぼ直線的に外方に伸び、口縁部がゆるやかに上方へ屈曲する。底部外面に粘土ひもを貼り付け、輪台をつくる。35の底部は平坦で、底部内外面ともナデ、口縁外面はヨコナデ、口縁内面に横方向のハケメを施す。

土師器高杯(36~48) 36~40は杯部で、36は内弯する深めのもの、37は内弯する浅めのもので、いずれも口縁端部はつまみだし、面を持たない。38はほぼ直線的に伸び、端部がやや外反する。39は口縁中央部で屈曲し、外方するもので、口縁端部は玉縁状に処理されている。40~48は脚部で、40は直線的に大きく広がるもの、42は内弯ぎみに大きく広がるものである。41は杯部を貼りつけた後ヘラケズリを施し、脚部がほぼ直線的に伸びた後、裾部分で外方へ屈曲し、端部は下方へつまみ出す。43~46はいずれも3方向にスカシを有するもので、43・44はほぼ直

線的に広がるもの、45は外反し、大きく裾が広がるものである。46は柱状の脚部が裾部分で屈曲し、大きく外方へ広がるもの、47はやや内弯しながら広がる脚部が、裾部分で緩やかに外方へ広がるものである。

土師器器台(48) やや内弯気味に上外方へ伸びる杯部に、やはり直線的に下外方にゆるやかに伸びる脚部がつくもので、杯部・脚部の外面にケズリを施す。

土師器鉢(49) 径約5.5cm前後の平底の中央部に、長さ約1.6cm、幅約1.3cmの楕円形の孔を穿つ有孔鉢である。内面に斜め方向の、外面に縦方向のハケ目が不明瞭ではあるが確認でき、また底部外面には黒斑が認められる。

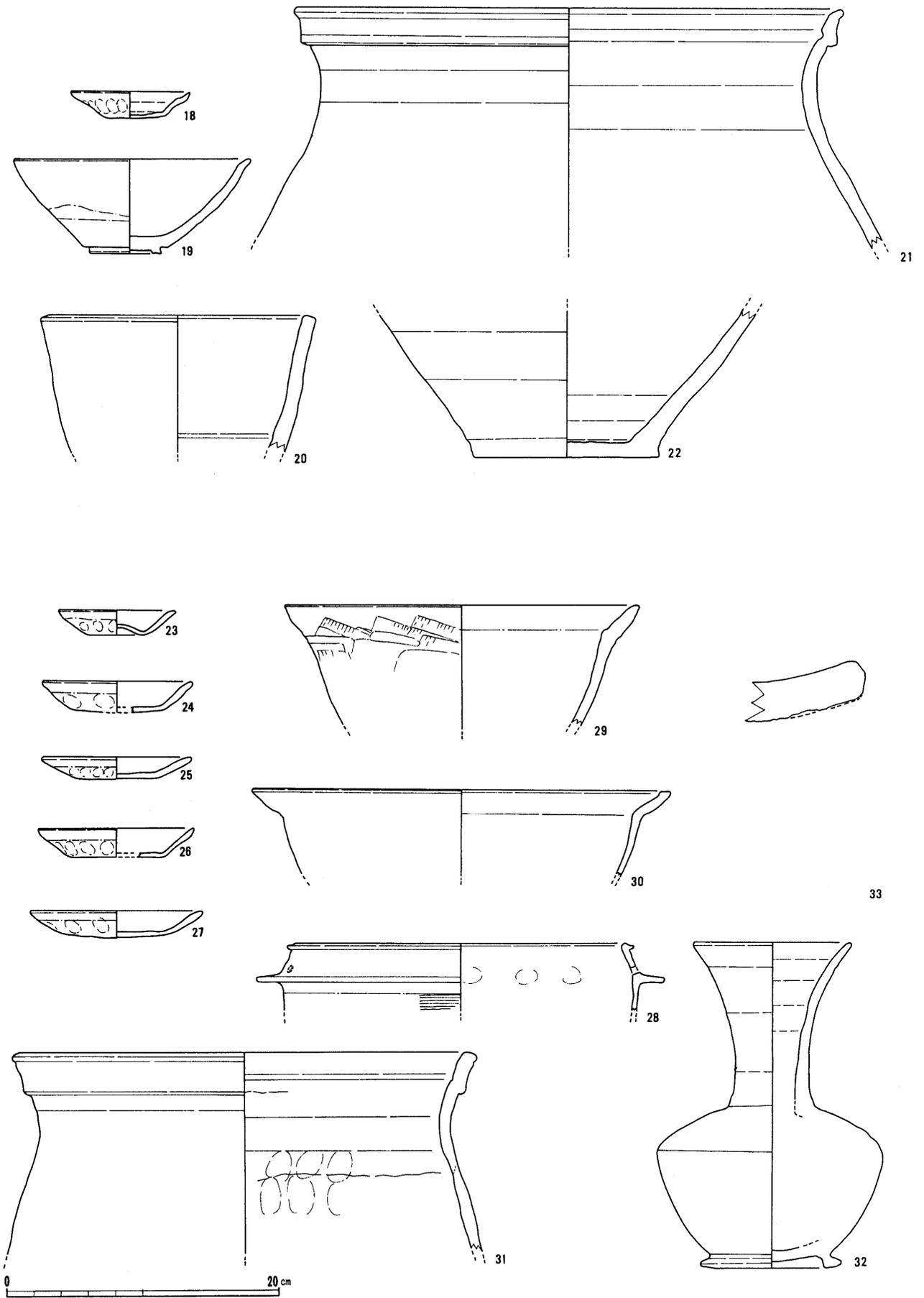
土師器壺(50~59) 広口壺(50~54)は口縁部が頸部から大きく外反するものである。50~54の口縁端部は上下につまみ上げ、縁帯を形成し、50・51は頸部にキザミのある凸帯を有す。53・54の口縁端部は外側に面を持ち、54の口縁端部にはキザミが認められる。55~58は二重口縁壺の口縁部で、頸部から外方に伸びる口縁部の途中で段を持ち、さらに外方に伸びるものである。56・57の口縁端部は外側に面を持ち、また55の口縁端部は上方につまみ出すが、あるいはこの先にさらに口縁をつけるものである可能性がある。58は短い口縁部がやや内弯気味に上外方に伸びるもので、頸部には接合痕が認められ、体部の最大径は中央やや下部にあるプローションで、底部は平底である。口縁部、体部共に内面は横方向の、外面は縦方向のヘラナデが施される。

土師器小形丸底壺(59) 頸部が細く、口縁部は直線的に開き、内外面ともにヘラケズリは施されない。体部外面下部に黒斑が認められる。

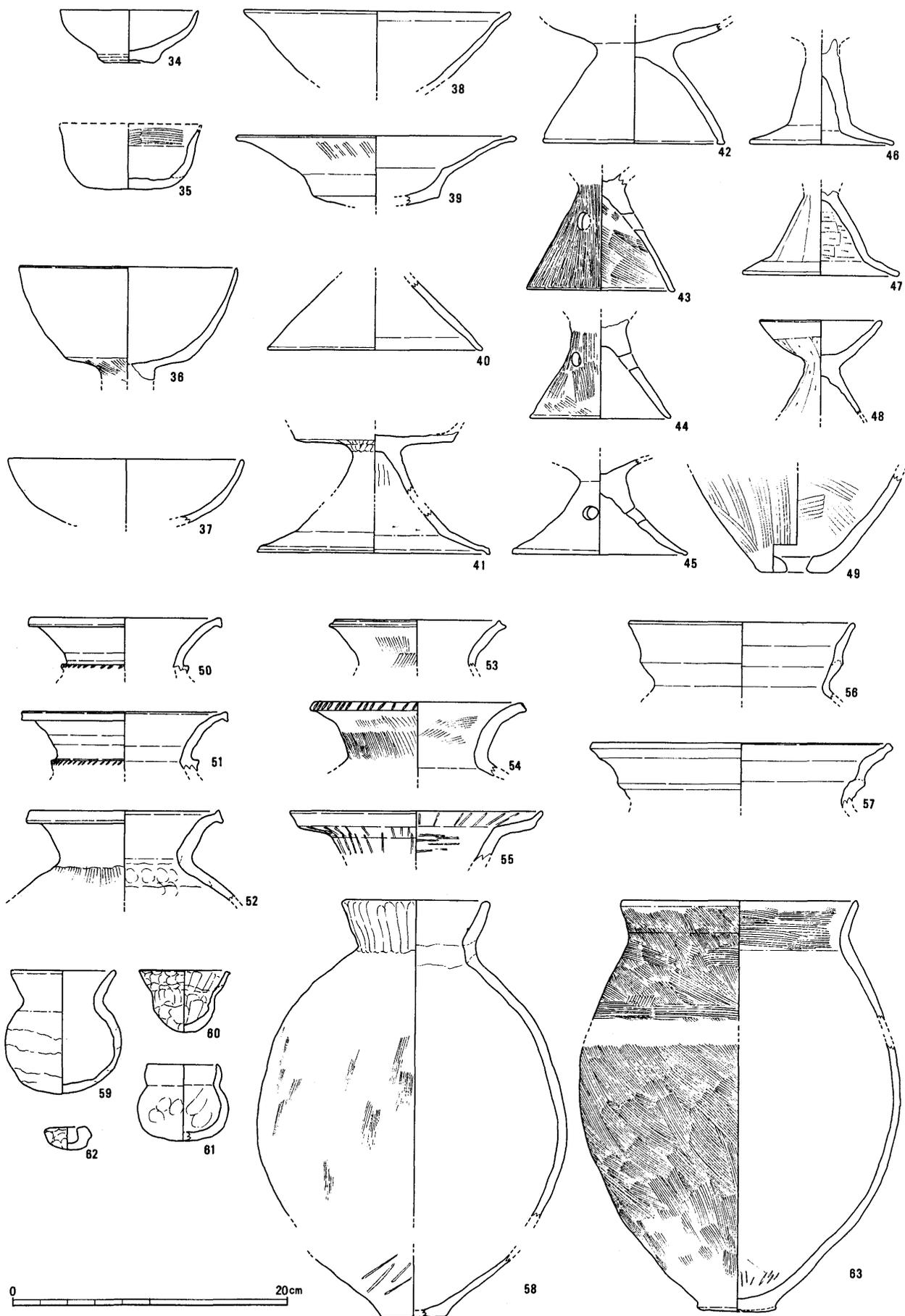
土師器ミニチュア壺(60・61) 60は口縁部が大きく開き、体部の最大径より口縁部の最大径が大きく、頸部には接合痕が認められる。61は体部の最大径が口縁部の最大径よりも大きく、口縁部が中央で緩やかに内向する。

手捏ね土器(62) 粘土塊に斜め上から指で窪みをつけたもの。杯を意識したものか。

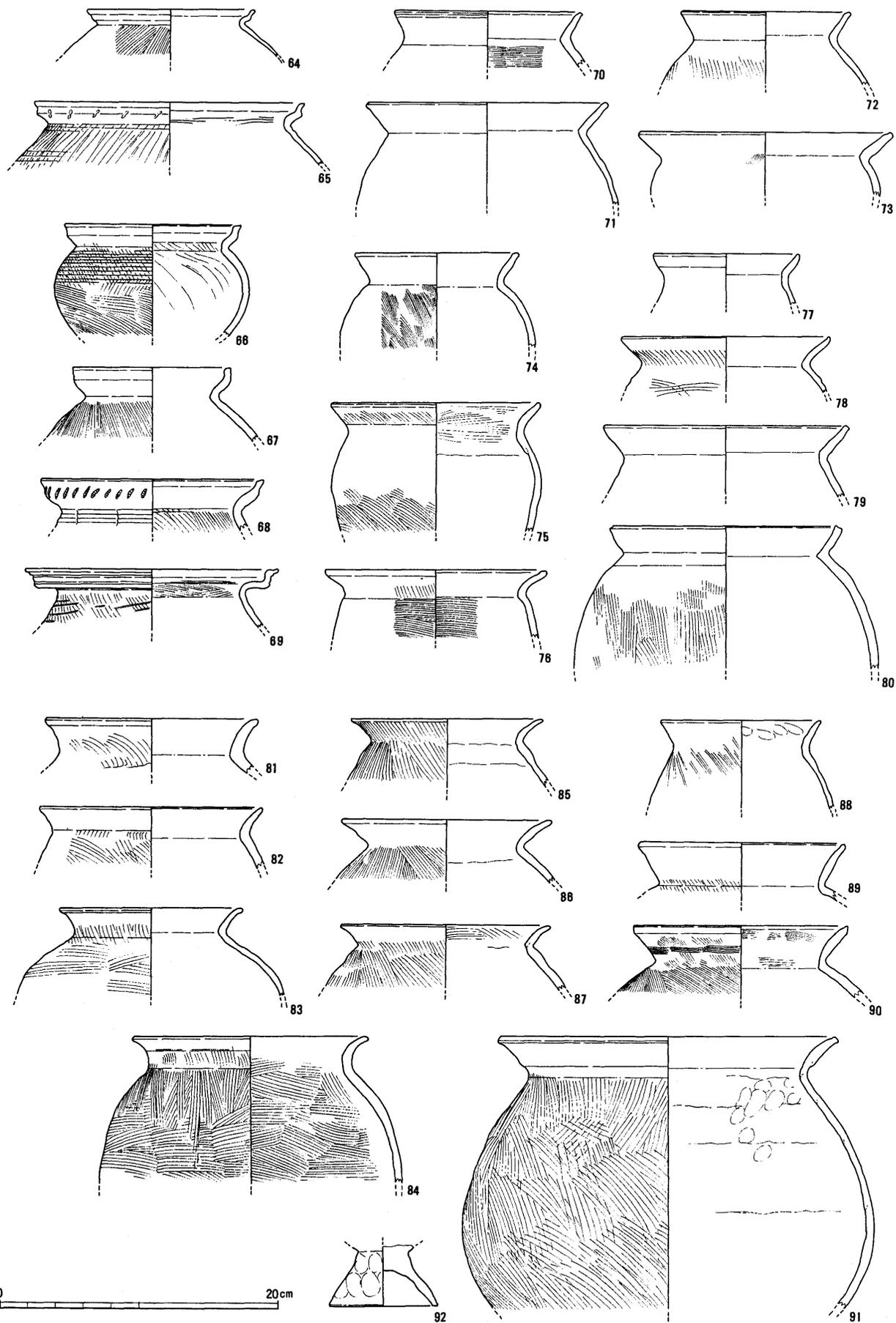
土師器甕(64~92) 64・65はS字状口縁台付甕で、65は赤塚次郎氏による分類のA類に、64は同C類に



第II-11 図 出土遺物実測図2 (1:4) SD6・9出土遺物



第II-12图 出土遺物実測図3 (1:4) 包含層出土遺物



第II-13图 出土遗物实测图4 (1:4) 包含层出土遗物

相当すると思われる。⁶ 66~69 は受け口状の甕で、68 の口縁部外面にはキザミが施される。その他のものについては、口縁部がほぼ直線的に伸びるもの (63・70~73)、口縁部が内弯するもの (74~80)、口縁部が外反するもの (81~91) に大別でき、口縁端部に面を持つもの (79・89・91)、口縁端部外側に面を持つもの (90)、口縁端部を丸くおさめるもの (その他) の違いが認められる。また、70・76・84 には体部内面に、75・87・90 には口縁部内面に、ハケ目が認められる。63 は口縁部が短くやや立ち気味で、底部に粘土紐による輪台がつく。75 の口縁端部にはキザミが施される。92 は台付甕の台部で、端部に内側への折り返しは認められない。

古墳時代中・後期の遺物

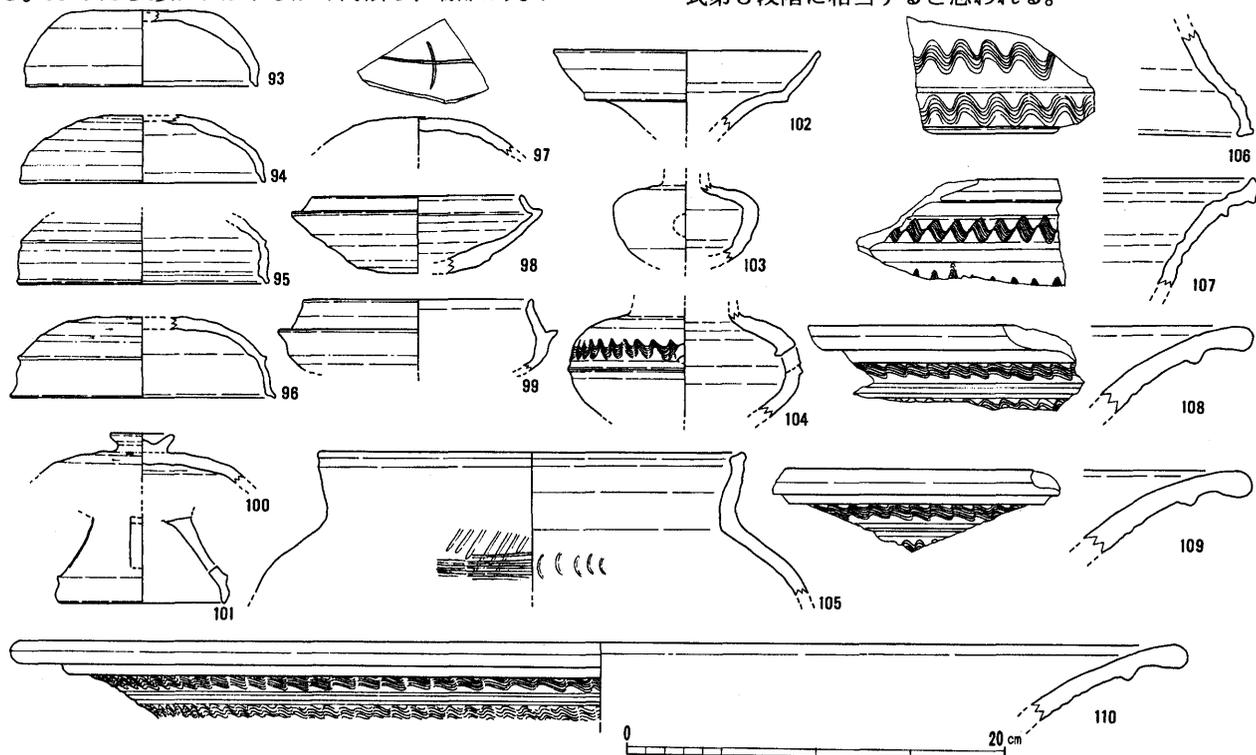
須恵器杯 (93~99) 蓋では、95・96 は天井部が丸みを帯び、天井部と口縁部を界する稜が巡るが形骸化したものである。96 の天井部には 2/3 程度の回転ケズリを施すが、95 の残存部分には回転ケズリは認められない。94 は天井部から口縁端部にかけてなだらかなカーブをなす形で、天井部の 1/2 程度に回転ケズリを施す。93 の天井部は平らになっており、回転ケズリは施されない。杯身では、99 のたちあがり は内傾し、たちあがり と受け部の端部は丸く仕上げる。98 のたちあがり はみじかく内傾し、端部は丸く

仕上げる。95・96・99 は中村浩氏による須恵器編年の II 型式第 1 段階~第 2 段階に、93・94・98 は II 型式第 5 段階~第 6 段階に相当すると思われる。⁷ なお蓋 97 の天井部には「十」状のヘラ記号が認められる。**須恵器高杯 (100~101)** 100 は有蓋高杯の蓋で、天井部に扁平なつまみが貼り付けられる。101 は脚部で長方形のスカシ窓が認められ、四方向のものであろう。共に中村浩氏による須恵器編年の I 型式第 5 段階に相当すると思われる。⁸

須恵器甕 (102~104) 104 は体部で、その最大径がほぼ中央部にあり、体部外面に波状文からなる文様帯があり、文様帯上に円形の孔が穿たれる。103 は体部で、その最大径が上 1/3 にある。102 は口頸部で、上半分が大きくラッパ状に開く。104 は中村浩氏による須恵器編年の I 型式第 3 段階~第 4 段階に、102・103 は II 型式第 5 段階~第 6 段階に相当すると思われる。⁹

須恵器壺 (105) 口縁部が中央部で内弯しながら外斜し、口縁端部には面を持つ。7 世紀初頭のものと思われる。

須恵器台付長頸壺 (106) 台付長頸壺の脚部と思われるもので、遺存部の外面に、波状文からなる文様帯 2 カ所がある。中村浩氏による須恵器編年の II 型式第 3 段階に相当すると思われる。¹⁰



第 II - 14 図 出土遺物実測図 5 (1 : 4) 包含層出土遺物

須恵器壺 (107~110) いずれも口縁部のみが遺存し、外面には波状文からなる文様帯2カ所がある。107は器壁は薄く、口縁端部が上方に立ち上がり、外面の口縁部端部下部に凸線が1条巡る。108~110の器壁は厚く、口縁端部は玉縁状に仕上げ、外面の口縁部端部下部に凸線が1条巡り、2つの文帯の間に2条の沈線が巡る。108~110は同一個体の可能性もある。いずれも中村浩氏による須恵器編年のⅡ型式第5段階~第6段階に相当すると思われる。¹¹

飛鳥・奈良時代の出土遺物

土師器椀 (111) 体部は丸味を帯びた形の粗製の椀で、口縁端部を上方につまみあげ、口縁端部外に面を持つ。

土師器皿

114は精製の胎土で、底部内面に螺旋状の暗文と、口縁内面に1段の斜行状の暗文が施され、113にも口縁内面に1段の斜行状の暗文が施される。いずれも口縁端部にヨコナデ、底部外面にヘラケズリを施す。113、114は平城Ⅱ~Ⅲ期に相当すると思われる。¹² 112は外面オサエ、内面ナデ、口縁端部にヨコナデを施す。

土師器壺 (115~116) いずれも体部外面に縦方向のハケ目を施し、115は口縁部から体部の内面に横方向のハケ目を、116は口縁部内面上部に横方向のハケ目が施される。

須恵器壺蓋 (117) 天井部外面はヘラケズリを、天井部内面と口縁部は回転ナデを施す。

須恵器杯 (118~136) 杯蓋のうち118~122はいずれも宝珠つまみを有するもので、内面にかえりを有するもの(118~120)と有しないもの(121・122)とがある。また129は内外面とも回転ナデを、130は天井部外面は未調整で他は回転ナデを施す。杯部は高台を有するもの(123~128)と有しないもの(131~136)がある。また、128の底部外面には「田□」の2文字の墨書が、136には底部外面に「サ」状の墨書が1字認められる。

須恵器皿 (137) 全体に丸味を帯び、口縁端部上面に面を持つ。

須恵器高杯 (138~139) いずれも脚部のみで、ラッパ状に外反し、端部を下方へ屈曲させ段をなすものである。

須恵器壺 (140~147) 140は扁平な体部に、口縁部が外傾する短頸壺である。141は高台を有する小形の壺で、遺存部分内面の大部分に漆状のものが付着する。142は壺の口縁部で、口縁端部を外方へ屈曲させ段をなす。143は平瓶で、口縁端部に段を持つ。144~147は壺の底部で、いずれもハの字状の高台を有し、高台内端面で設置するもの(144・145)と、高台端部全面で設置するもの(146・147)とがある。

須恵器不明土製品 (148・149) 外面に罅を有す土管状のものと思われるが、あるいは甕の可能性もある。外面には縦方向あるいは格子状のタタキ目が、内面に当て具の痕が認められる。

平安時代の遺物

土師器椀 (150~152) 150、151は丸味を帯びた体部で、150は体部下半分にヘラケズリを施し、口縁端部外面に沈線が1条巡る。152の体部はやや外弯気味に外傾し、内面に横方向のハケ目を施す。

黒色土器椀 (153) 内黒の黒色土器A類で、口縁部の上方部がやや立ち上がり、口縁端部内面に沈線が1条巡る。

黒色土器鉢 (154) A類で、内弯する口縁部のみが出土した。

土師器壺 (155) 内外面共にナデで調整され、ハケ目は認められない。

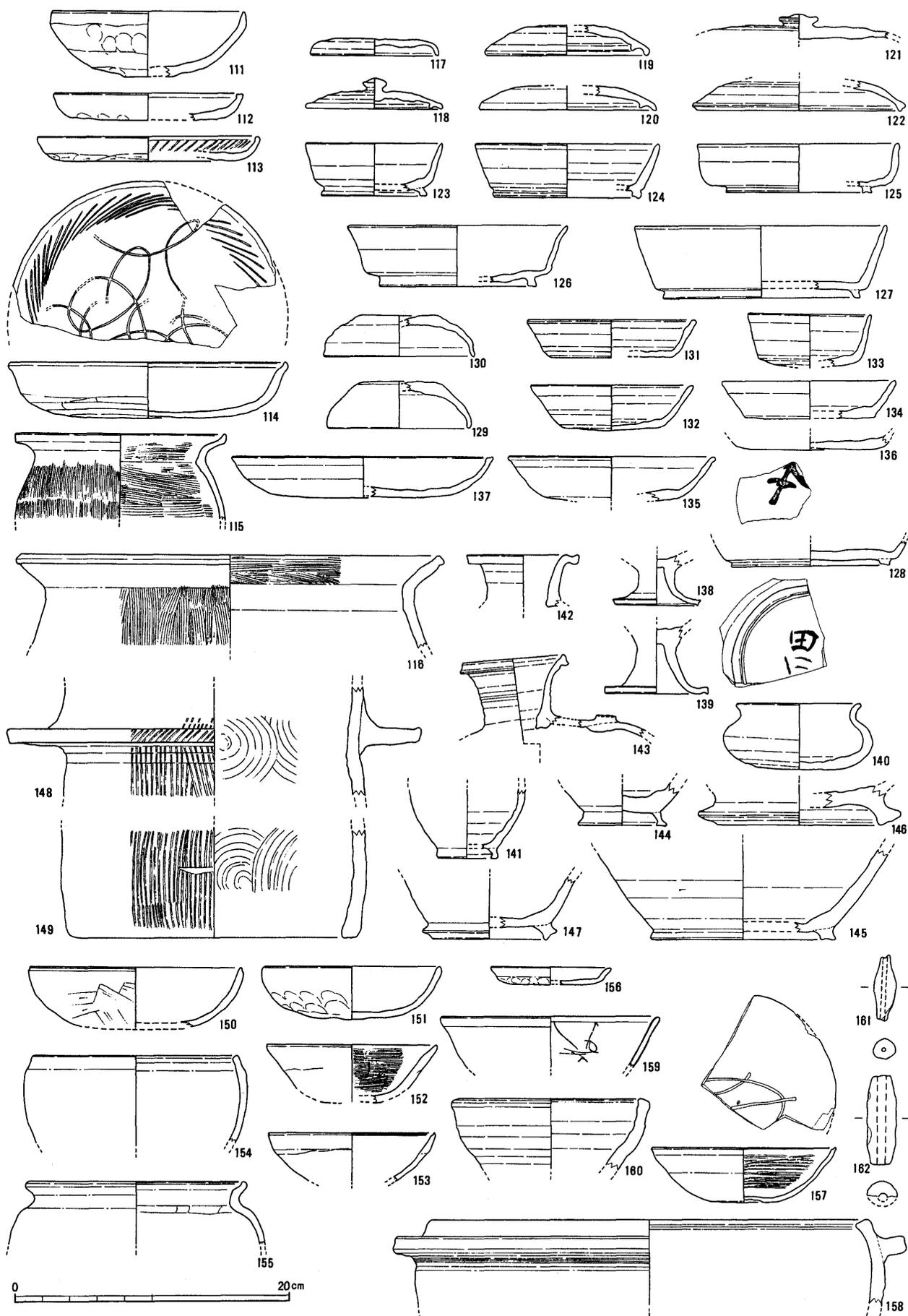
中世の遺物

土師器小皿 (156) 口縁部が短く、底部内面はナデ、底部外面はオサエ、口縁部は内外面共にヨコナデを施す。

瓦器椀 (157) 口縁端部上端に沈線が1条巡り、貼り付け高台はほとんど形骸化した状態で、口縁部内面のミガキは粗く、底部内面のミガキも螺旋状を意識したものが粗く施されるだけで、口縁部外面にはミガキは認められない。山田猛氏の伊賀の瓦器編年のⅢ段階2型式に相当すると思われる。¹³

土師器羽釜 (158) 器壁が厚く、口縁部は短く内弯し、罅は肩部につき、内外面ともナデが施される。菅原正明氏の土釜の形態分類ではE型に相当するものと考えられる。¹⁴

青磁椀 (159) 口縁部上部の破片が出土した。内面に花草文を有す。



第II-15図 出土遺物実測図6 (1:4) 包含層出土遺物

陶器 信楽焼香炉(160) 口縁部のみが出土したもので、器壁は厚く、口縁部上部がほぼ上方へ屈曲し、端部上面に面をもつ。施釉は外面のみであることから香炉と判断したが、花器やその他の器種の可能性もある。

[註]

- 1 森 隆 「滋賀県における古代末・中世土器」 『中世土器の基礎研究・』 日本中世土器研究会 1986
- 2 松澤 修 「信楽焼の編年について」 『中世の信楽—その実像と編年を探る』 滋賀県立近江風土記の丘資料館 1989
- 3 藤澤良祐 「古瀬戸後期様式の編年」 『研究紀要X』 瀬戸市歴史民族資料館 1991
- 4 註2に同じ
- 5 註2に同じ

- 6 赤塚次郎 「『S字甕』覚書' 85」 『年報』昭和60年度愛知県埋蔵文化財センター 1986
- 7 中村 浩 「和泉陶器出土遺物の時期編年」 『陶器・』 大阪府教育委員会 1978
- 8 註7に同じ
- 9 註7に同じ
- 10 註7に同じ
- 11 註7に同じ
- 12 『古代の土器1 都城の土器集成』 古代の土器研究会 1992
- 13 山田 猛 「伊賀の瓦器に関する若干の考察」 『中世土器の基礎研究I』 日本中世土器研究会 1986
- 14 菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」 『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所 1983

4. まとめ

今回調査で検出された遺構のうち掘建柱建物は奈良時代のもと考えられ、三田廃寺や伊賀国府間の街道沿いにあったものと考えられることから、あるいは官立的な建物であった可能性も想定できる。

中世の土坑SK3がいわゆる南東隅土坑の可能性が考えられるなら、SA19・20がその土坑に関連する中世の掘建柱建物の痕跡の可能性もある。

その他、SD9からは中世の遺物とともに奈良時代の須恵器台付壺が出土する。このことは中世に

茶の湯が流行した際、古墳時代などの須恵器が道具として重宝されたこととの関連性が考えられる。

また包含層から出土する遺物は古墳時代前期～中世に及ぶ幅広い時期のものが大量に出土することは、当遺跡の周辺が多数の古墳、古代の公的施設、無数の中世城館など幅広い時期の遺跡が分布する地域であることを改めて認識できるものとなった。

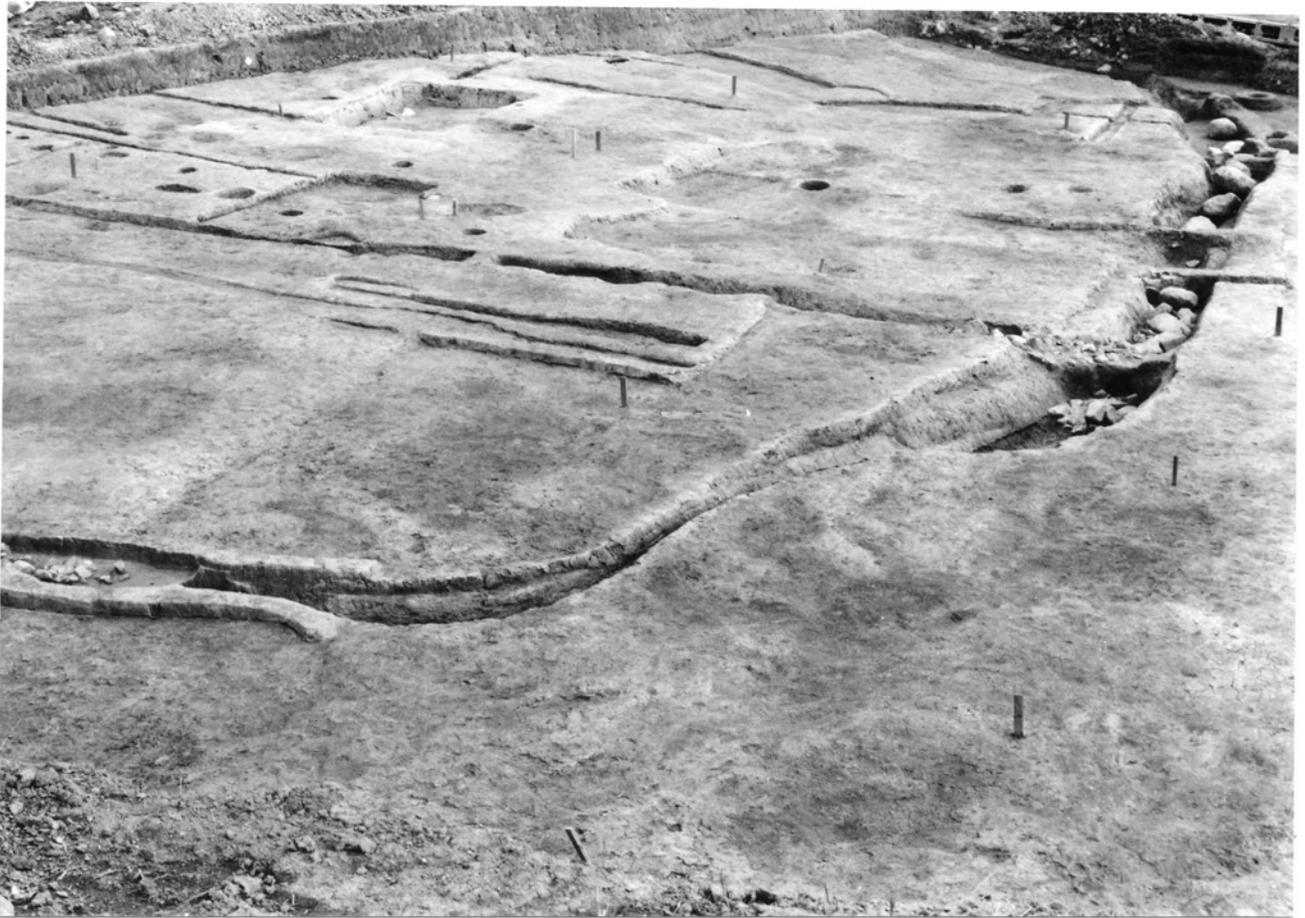
(筒井)



調査区遠景 東から



SB群 北西から



SD6・9 北西から



SK3 東から

Ⅲ. 高寺遺跡・六地蔵B遺跡

1. 位置と歴史的環境

伊賀・伊勢国境付近に源を発する木津川は、中小の河川と合流しながら伊賀国内を縦断し、宇治川・桂川と合流して淀川となる。高寺遺跡(1)・六地蔵B遺跡(2)は、木津川と青山川との合流点をのぞむ河岸段丘上に立地し、行政的には三重県名賀郡青山町伊勢路字高寺・六地蔵に位置する¹。

付近では旧石器時代の遺跡はまだ発見されていないが、縄文時代の遺跡²としては有舌尖頭器や早期の土器が出土した大字種生の八王子遺跡、早期末の土坑が検出され、同時代の土器、石鏃等が出土した勝地大坪遺跡³(3)、早期の土器が出土した滑石遺跡(4)、中期末の深鉢が出土した大字羽根の中島遺跡(5)、後期の土器が出土した岡田向遺跡(6)等がある。

弥生時代になると、大字阿保を含む小盆地を中心として遺跡が多く分布するようになり、生活域も拡大したと考えられる。また、大字柏尾の柏尾遺跡(7)では銅鐸が出土している⁴。

古墳時代の前期に属する古墳は本遺跡の周辺には確認されていないが、古墳時代の後期になると横穴式石室を持つ古墳が多く作られるようになる。大字伊勢路内には、六地蔵B遺跡と隣接し、横穴式石室を持つ六地蔵1号墳を含む六地蔵古墳群(8)の他、赤井谷古墳群(9)、谷ノ奥古墳群(10)がある。また、木津川上流の勝地大坪遺跡では水田下から横穴式石室を持つ3基の古墳が検出され、副葬品等が出土している⁵。

飛鳥・奈良時代になると、この地域が持つ畿内と伊勢を結ぶ交通の要衝という性格が重視されてくる。

聖武天皇は天平12(740)年、藤原広嗣の乱に際して伊賀・伊勢・美濃・近江・山背に行幸するが、この時に「安保頓宮」に宿をとり、翌日には「老志郡河口頓宮」に到着している⁶。ここにみえる「安保」とは青山町の「阿保」と考えられている。この

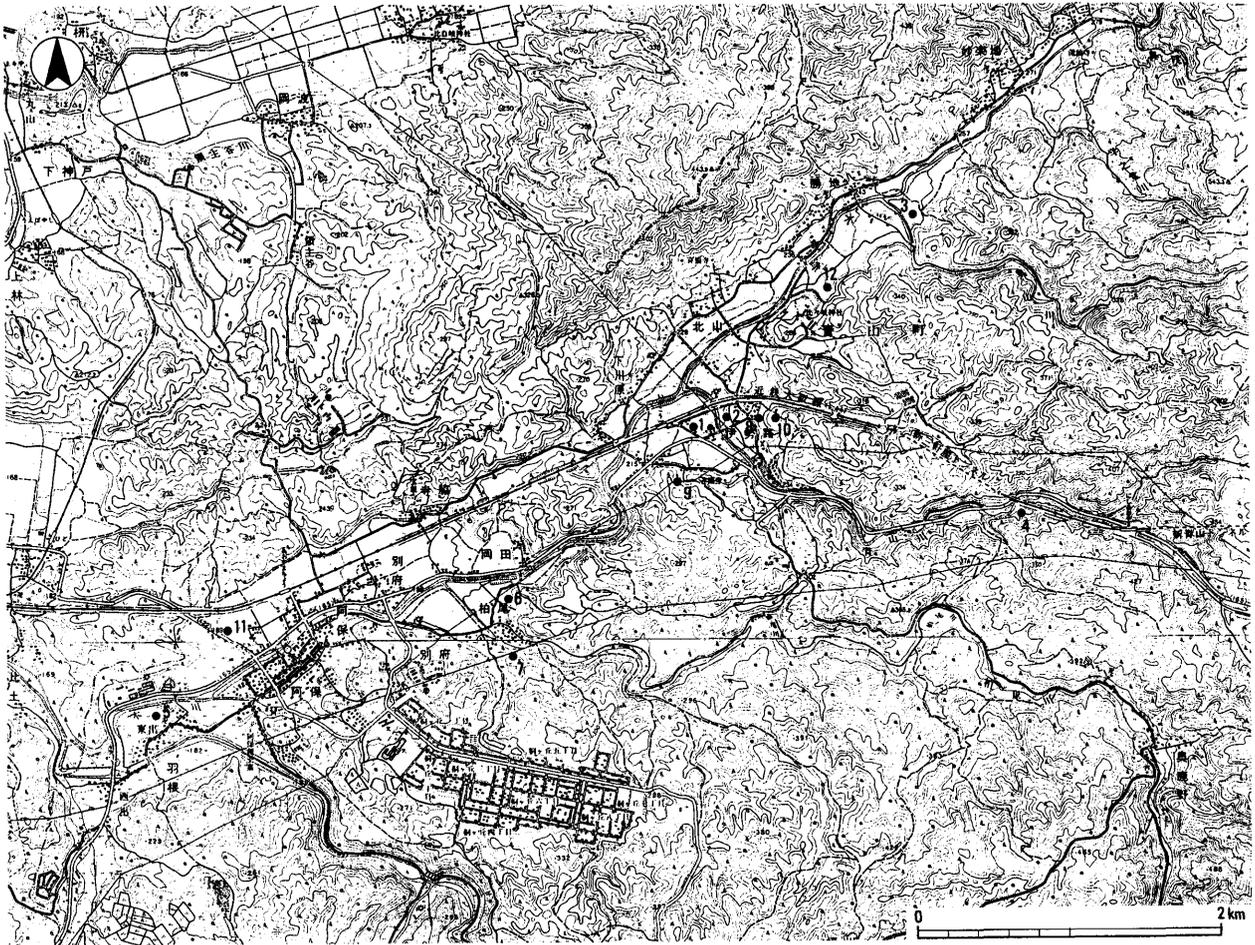
頓宮にともなう遺構は確認されていないが、同時代の遺跡としては、奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物が検出され、墨書のある土師器や、須恵器の円面碗等が出土した沢代遺跡⁷(11)、奈良時代の竪穴住居2棟が検出された川南A遺跡⁸(12)などがある。

平安時代になると都は山城に遷り、大和に都がおかれていた時代に比べ、畿内と東国との交通の要衝という伊賀国の性格はやや薄らぐ。しかし、大同4(809)年、葉子の乱に際した平城上皇が、阿保～川口を通ると考えられる「河口道」を使って東国に脱出を試みたり⁹、斎内親王の退下の際に川口～阿保の交通路が使われたりしている¹⁰。

平安時代中頃、天喜4(1056)年2月23日の「散位藤原實遠所領讓状案」には、伊賀国全域にわたる實遠の所領が記されている¹¹が、彼が所領を持っていた「上津阿保村」は、現在の大字伊勢路から岡田の地域であったと考えられている¹²。遺跡の位置する地域も、おそらくは實遠の所領であろう。

鎌倉時代～室町時代の集落は、あまり明らかになっていないが、町内の各地でこの時代の土器が出土しており、現集落と重なるような形で、この時代の集落が営まれていたと考えられる。この時代には多くの城館が築かれるようになる。城館は大字伊勢路内だけでも、3か所が知られている¹³。

この時代になると、多くの金石文等によって、村の発展を知ることができる¹⁴。大字寺脇の宝蔵寺の境内には観応元(1350)年のものを最古とする多くの石造五輪塔や石仏群がある。また、大字勝地の勝福寺には文明12(1480)年の銘のある石造阿弥陀如来像があり、大字伊勢路の善福寺には元龜4(1573)年の銘のある石造地藏菩薩像がある。大字北山の比々岐神社には元龜4(1573)年の銘のある旧北山八幡宮の棟札がある。おそらく、この時代になって、多くの寺院や神社がつくられ信仰や村の自治の中心になっ



第Ⅲ-1図 遺跡位置図 (1/50,000)

ていったのであろう。また、宝厳寺に隣接する安田中世墓(13)では、室町時代を主とした中世墓が検出され、常滑産・瀬戸産・信楽産の蔵骨器等が出土している¹⁵。

なお、今回調査を行った字「高寺」・字「六地藏」の付近には、明治に整理される以前の旧小字名として「東善寺」・「地藏本」・「小寺」があり、現存していない寺院の存在を想起させる。

江戸時代になると伊勢地は安濃津藩領となり、初瀬街道の宿場町として大いに栄えた¹⁶。現在も近畿日本鉄道大阪線や国道165号線が通り、交通の要衝としての面影を残している。(竹田 憲治)

【参考文献】

- ・『青山町史』(青山町史編纂委員会 1979年)
- ・和田忠臣「名賀郡」(『三重県の地名』平凡社、1983年)

【註】

- 1 現在、大字伊勢路は「伊勢路」と表記されているが、これは昭和30年の町村合併後の表記であり、それ以前は「伊勢地」と表記されていた。
- 2 縄文時代の遺跡については、『三重県の縄文時代』(三重県埋蔵文化財センター、1992年)による。

- 3 吉澤良「名賀郡青山町 勝地大坪遺跡、勝地大坪古墳群」(『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊』三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター 1992年)
- 4 『青山町史』(青山町史編纂委員会 1979年)
- 5 前掲3
- 6 『続日本紀』天平十二年十一月甲申朔条、同乙酉条(新訂増補 国史体系本による)
- 7 「沢代遺跡発掘調査現地説明会資料」青山町遺跡調査会 1994年
- 8 吉澤良「川南A遺跡」(『伊賀国府跡・箕升氏館跡ほか』三重県埋蔵文化財センター、1993年)
- 9 『日本後紀』大同4年4月丁丑〔2日〕条(新訂増補 国史体系本による)
- 10 『江家次第』斎王帰京次第条(新訂増補 故実叢書本による)
- 11 竹内理三『平安遺文』古文書編 第3巻 763
- 12 和田忠臣「名賀郡」(『三重県の地名』平凡社、1983年)
- 13 『三重の中世城館』三重県教育委員会1977年
- 14 前掲4
- 15 『安田中世墓発掘調査報告』青山町教育委員会1988年
- 16 松本仁志「伊勢路から阿保」(『初瀬街道 伊勢本道 和歌山街道』改訂版 三重県教育委員会 1985年)

2. 名賀郡青山町 高寺遺跡

(1) 調査区と層序

高寺遺跡は、木津川と青山川の合流点に臨む低位丘陵上に位置する遺跡である。調査箇所は、段差のある何筆かの水田からなっていた。調査区は、三角形のA地区と、排水路部分であるB地区の2箇所である。

基本層序は、両地区ともに上から耕土、床土、暗褐色系の包含層、地山となっている。A地区は表土から20~40cmで地山となる。包含層は20cm程度であり、遺物の出土量は比較的希薄である。B地区は、南に行くにしたがって地山の標高が下がるため、厚く客土されている。包含層の厚さは約40~60cmと割合平均している。

(2) 遺構

A地区では、竪穴住居2棟、掘立柱建物6棟、配石遺構2基、および多数の溝や土坑を検出した。またB地区では竪穴住居1棟、溝1条、土坑7基を検出した。時代は飛鳥時代から奈良時代にかけてのもの、平安時代末期のものに大きく2分される。

A 飛鳥時代から奈良時代の遺構

竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟等がある。

a 竪穴住居

S H 22 (第Ⅲ-5図) A地区の中央で検出した、竈をもつ住居である。1辺が約4mで、面積は約16㎡である。床の検出面には礫が多く、主柱穴は2本しか確認できなかった。このうち南東の柱穴には黄色粘土が入っていた。竈は、北側壁中央部で検出した。袖部は検出できなかったが、高さ約20~30cmの石2点が、面を前部に向けて立てられており、焚口石と考えられる。これらの石の下から、竈構築に関連すると考えられる土坑が検出された。この土坑からは、焼土が出土している。

遺物は、竈周辺から土師器の甕が、竪穴住居全体から土師器の杯が出土している。

S H 24 (第Ⅲ-5図) S H 22の西約3mの位置で検出した竈をもつ住居である。1辺約6.6mで、面積は約43㎡である。4本の主柱穴を確認した。

竈は、北壁中央やや東寄りで見出した。袖部は黄白色粘土で築かれている。竈内面の床は、厚さ8cmにも及んでよく焼けていた。東側袖部の残りは良好で、ほぼ原位置に倒れた状態で高さ約30cmの焚口石を検出した。西側袖部は先端のみ原位置に残っていた。西袖部の焚口石は確認できなかったが、少し離れた位置に倒れていた高さ約35cmの石が焚口石であると考えられる。また、南壁中央付近で、上面が平らで中央に墨跡のついた石(遺物20)を検出した。火切石の可能性もある。**S H 109** (第Ⅲ-3図) B地区中央部で検出した。断面のみで確認され、平面では検出できなかった。長さ約4.9m、検出面からの深さは約20cmである。土が橙色に焼けている部分があり、竈と考えられる。この場所から土師器甕が出土した。

b 掘立柱建物

S B 16 (第Ⅲ-6図) A地区の南東部で検出した。南北3間、東西2間の総柱建物である。検出面が砂地であったため、東壁南から2番目の柱穴は検出できなかった。N-5°-Eの南北棟で桁行4.35m、梁行3.6mで、1尺を30cmとすると、桁行14.5尺、梁行12尺となる。柱堀方は方形で一辺約70cmで、径30cmの柱痕跡がほとんどの柱穴から検出された。土師器甕、須恵器杯身が出土した。

c 溝

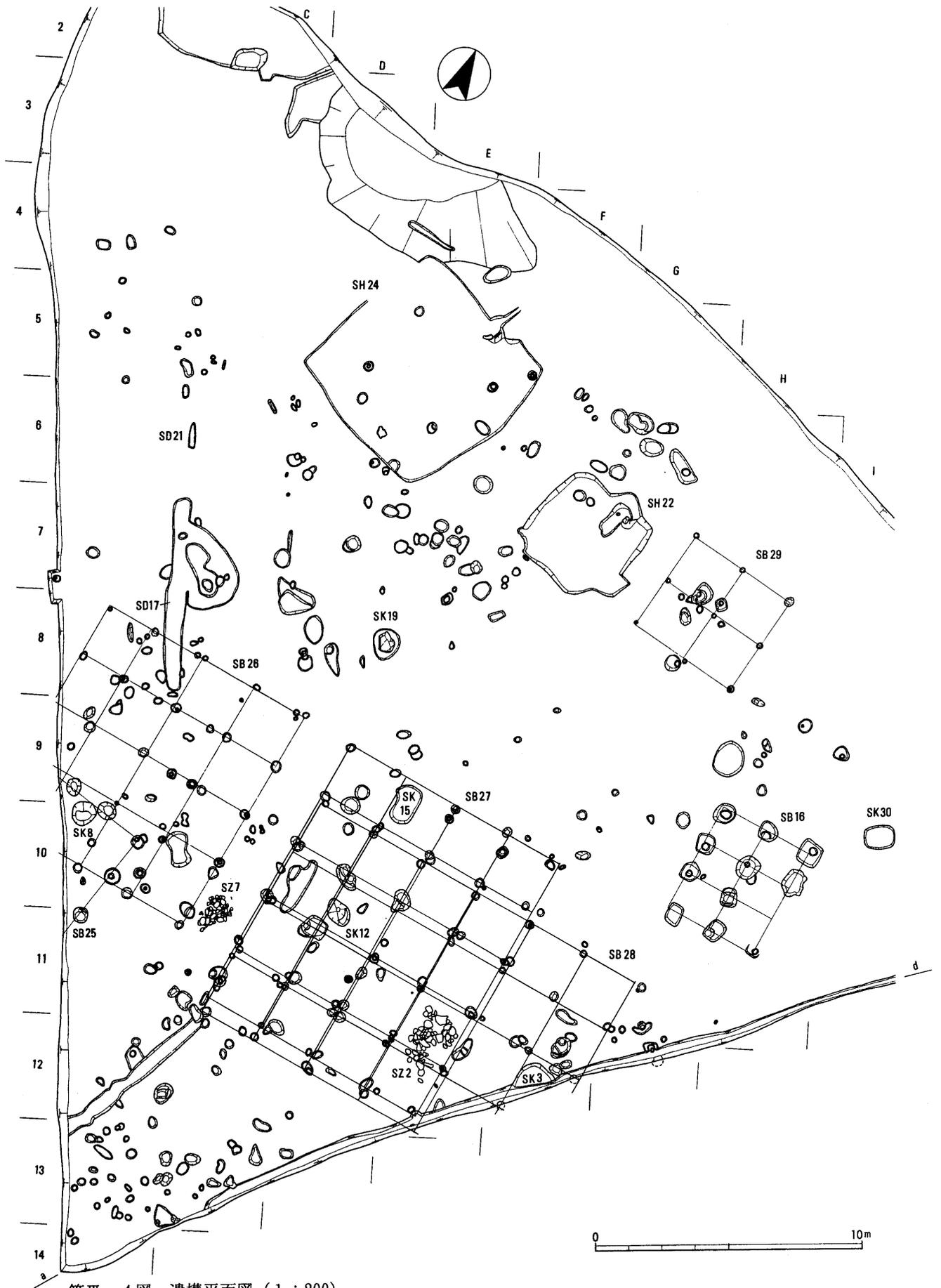
S D 107 (第Ⅲ-5図) B地区北部で検出した。幅1.1m、検出面からの深さ10cmの溝で方位はE-45°-S、両端が調査区外に伸びる。底部に鉄分が吸着していた。土師器甕の細片が出土した。

d 土坑

S K 101 (第Ⅲ-5図) B地区中央で検出した。南北1.7m、検出面からの深さ15cmの楕円形土坑で、東半が調査区外に伸びる。底部から奈良時代前期の完形の土師器杯と須恵器杯が出土した。

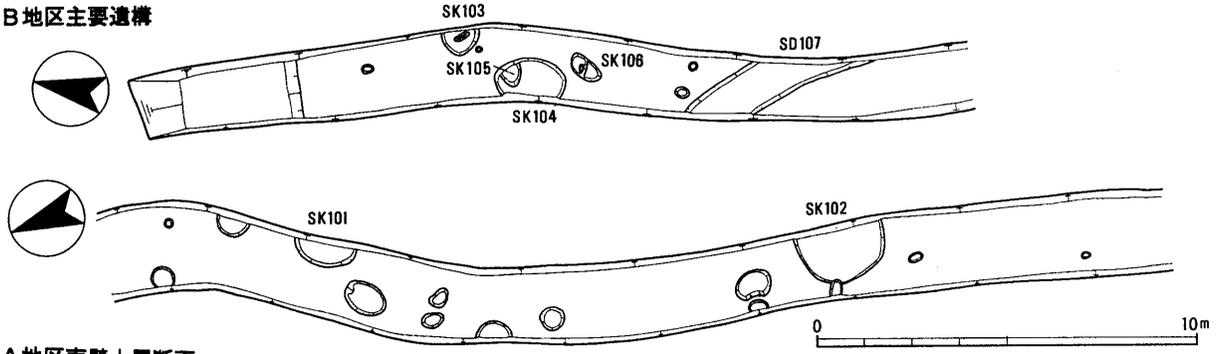
S K 102 (第Ⅲ-5図) B地区中央で検出した。南北2.4m、深さ数cmの楕円形土坑で、東半が調査区外に伸びる。土師器の小片が出土した。

S K 103 (第Ⅲ-5図) B地区北部で検出した。

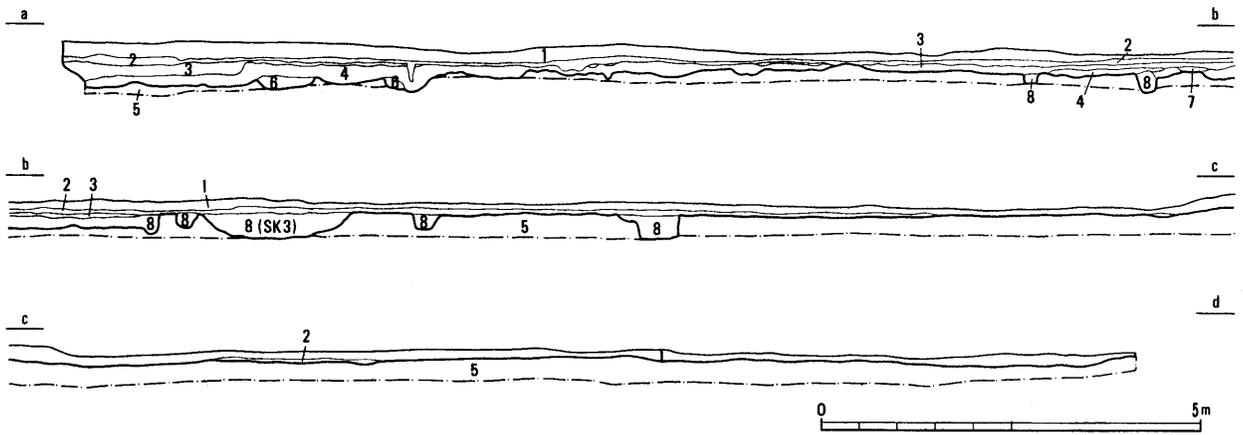


第三-4図 遺構平面図 (1:200)

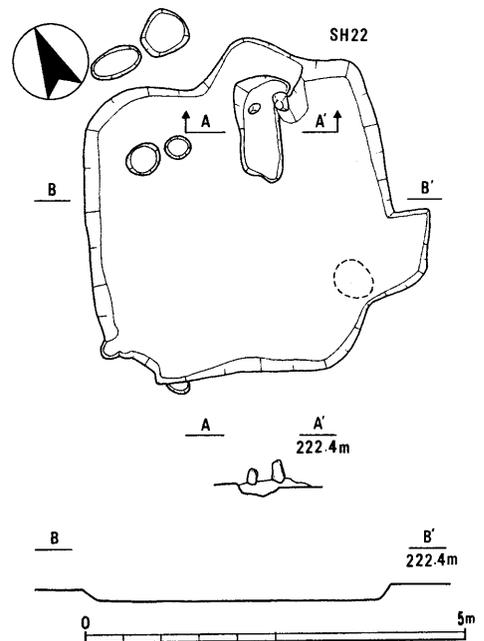
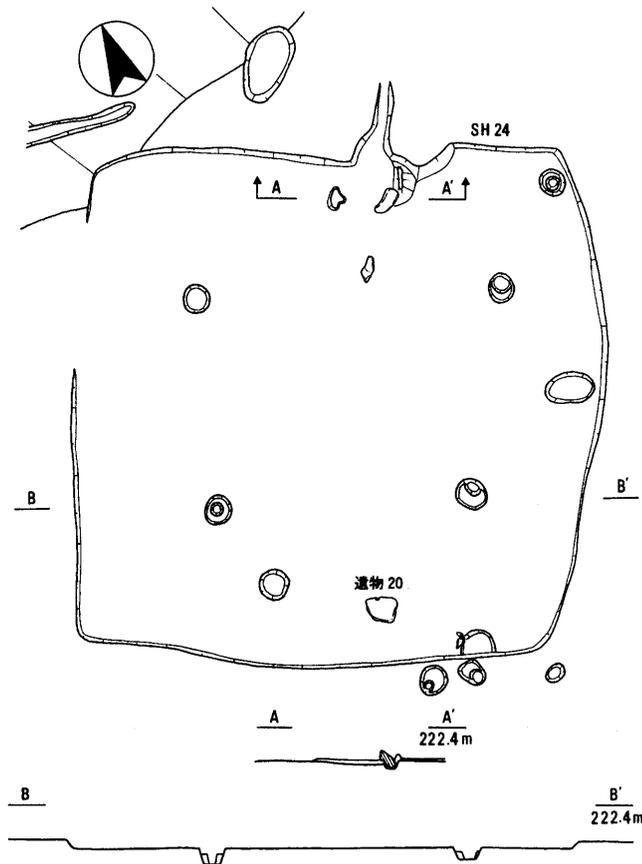
B地区主要遺構



A地区南壁土層断面



- 1 耕作土
- 2 炭灰茶色砂質土 (床土)
- 3 茶褐色砂質土
- 4 暗灰茶色砂質土 (物包含層)
- 5 明灰黄色砂質土 (遺構検出面)
- 6 暗灰茶色土混じり暗黄灰色砂質土
- 7 暗茶褐色砂質土と暗灰黄色砂質土の混層
- 8 暗灰黄色土混じり明茶褐色砂質土 (遺構埋土)



第三-5図 B地区主要遺構 (1:200)、A地区土層断面、SH24・22実測図 (1:100)

南北 1.0 m、深さ 30 cm の楕円形土坑で、東半が調査区に伸びる。土師器甕・杯、須恵器瓶と共に、混入品と思われる瓦器の小片が出土した。

S K 104・105 (第Ⅲ-5 図) B 地区北部で検出した。南北 1.4 m、深さ 25 cm の楕円形土坑で、西半が調査区外に伸びる。北東部に、落ち込みがあり、平面部分を S K 104、落ち込み部分を S K 105 とした。遺物は、S K 104 から、土師器小片と共に、土錘 1 点が出土した。S K 105 からは、土師器の小片が出土している。

S K 106 (第Ⅲ-5 図) B 地区北部で検出した。南北 1.0 m、東西 0.5 m、深さ 30 cm の楕円形土坑である。土師器甕・小皿、須恵器瓶の口縁部が出土した。

S K 108 (第Ⅲ-3 図) B 地区南部で検出した。東西 0.8 m、深さ 10 cm の楕円形土坑で、北半が調査区外に伸びる。遺物は出土していない。

B 平安時代末期の遺構

掘立柱建物 4 棟、配石遺構 2 基等がある。

a 掘立柱建物

S B 25 (第Ⅲ-6 図) A 地区西端で検出した側柱建物である。西半分が調査区外に伸びる。N-14°-E の南北棟で、桁行 2 間以上 (3.6m 以上)、梁行 2 間以上 (3.0m 以上)、柱掘方は円形で径 60 cm、柱痕跡は径 20 cm である。瓦器碗、土師器小皿・羽釜と共に、混入品と考えられる土師器甕、須恵器瓶類の口縁部が出土した。

S B 26 (第Ⅲ-6 図) S B 25 と重複して検出した総柱建物である。南西隅が調査区外に伸びる。N-6.5°-E の南北棟で、桁行 4 間 (9.0m)、梁行 4 間 (8.4m)、柱掘方は円形で径 30 cm、柱痕跡は径 10 cm である。南端東から 2 間目には、棟方向と同一で桁行きにのる柱穴が 2 個あり、部屋を区切る何らかの施設とも考えられる。北側の柱方向を西に 2.1m 延長したところにも柱穴があり、もう 1 棟並んで建っていた可能性がある。瓦器碗・皿、土師器小皿・羽釜等が出土した。

S B 27 (第Ⅲ-7 図) S B 26 の東 2.1m の場所に、S B 26 と北側柱列を揃えて検出した総柱建物である。N-6°-E の南北棟である。桁行 5 間 (10.5 m)、梁行 4 間 (9.0m)、柱掘方は円形で径 30 cm、

柱痕跡は径 10 cm である。瓦器碗・皿、土師器小皿・羽釜、渥美産甕等が出土した。

S B 28 (第Ⅲ-7 図) S B 27 と一部重複して検出した総柱建物である。南東隅を調査区に切られる。E°-S の東西棟で、桁行 6 間 (13.6m)、梁行 4 間 (9.0m)、柱掘方は円形で径 30 cm、柱痕跡は径 10 cm である。南東隅の S K 3 からは瓦器皿が出土しており、南東隅土坑の可能性もある。瓦器碗・皿、土師器小皿・羽釜等が出土した。

S B 29 (第Ⅲ-6 図) A 地区中央で検出した。E-11°-S 東西棟の総柱建物で、桁行 2 間 (4.3m)、梁間 2 間 (4.0m)、柱掘方は円形で径 20 cm、柱痕跡は検出できなかった。遺物の出土はなかったが、柱の並び方から中世の遺構と考えられる。

b 溝

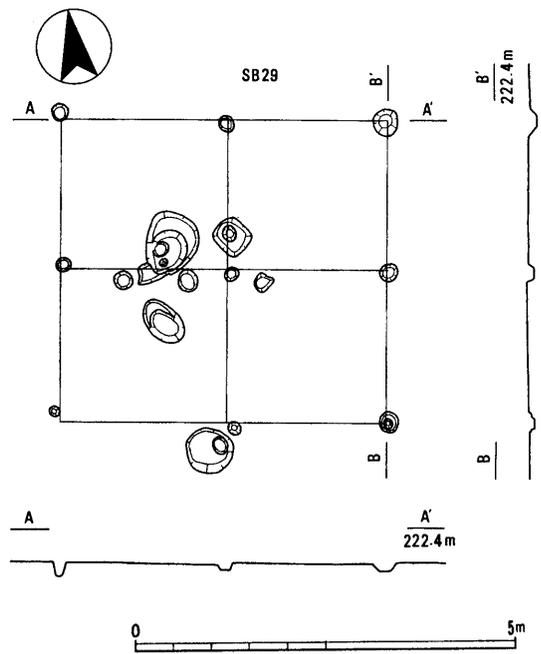
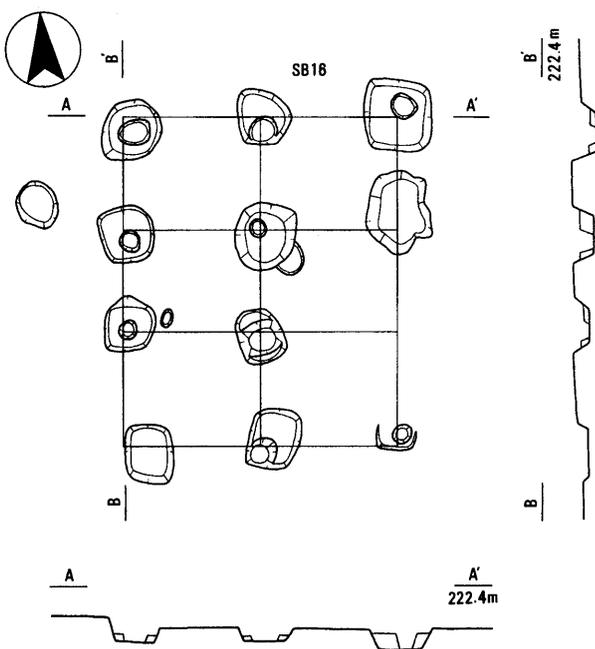
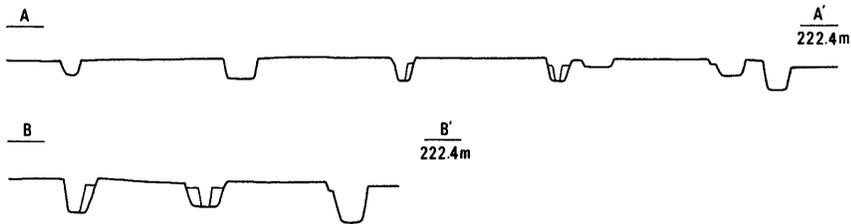
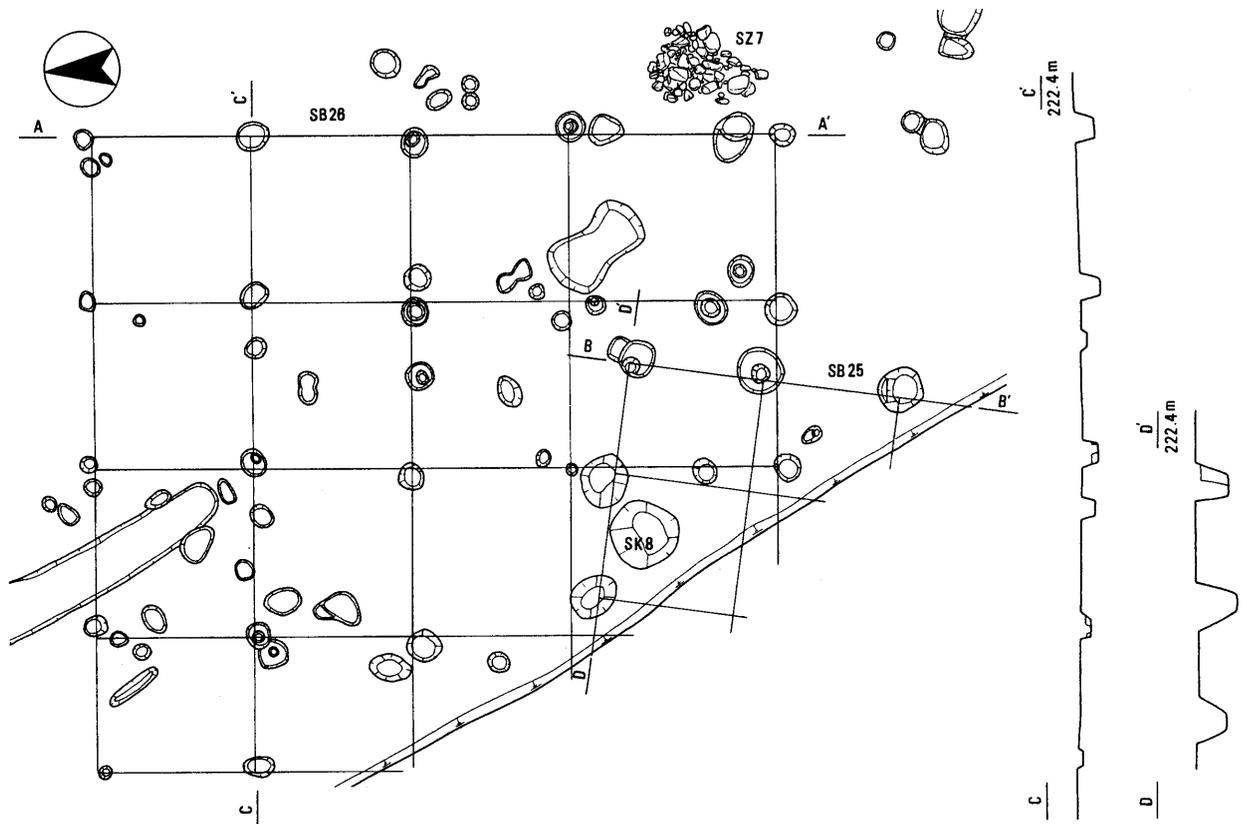
S D 17 (第Ⅲ-4 図) A 地区の東部で検出した。S B 26 にかかるが、遺構の重複関係がないため、前後関係は不明である。N-20.5°-W の方角で、幅 70 cm、遺構面からの深さ 10 cm、長さ 7.3m である。瓦器碗・皿を少量出土した。

S D 21 (第Ⅲ-4 図) A 地区の東部、S D 17 北延長部分で検出した。方向も N-20.5°-W と S D 17 と同じで、元は同じ溝であった可能性がある。幅 20 cm、遺構面からの深さ 10 cm、長さ 0.9m である。瓦器碗の小片、土師器小皿と共に、混入品と考えられる須恵器の杯蓋が出土した。

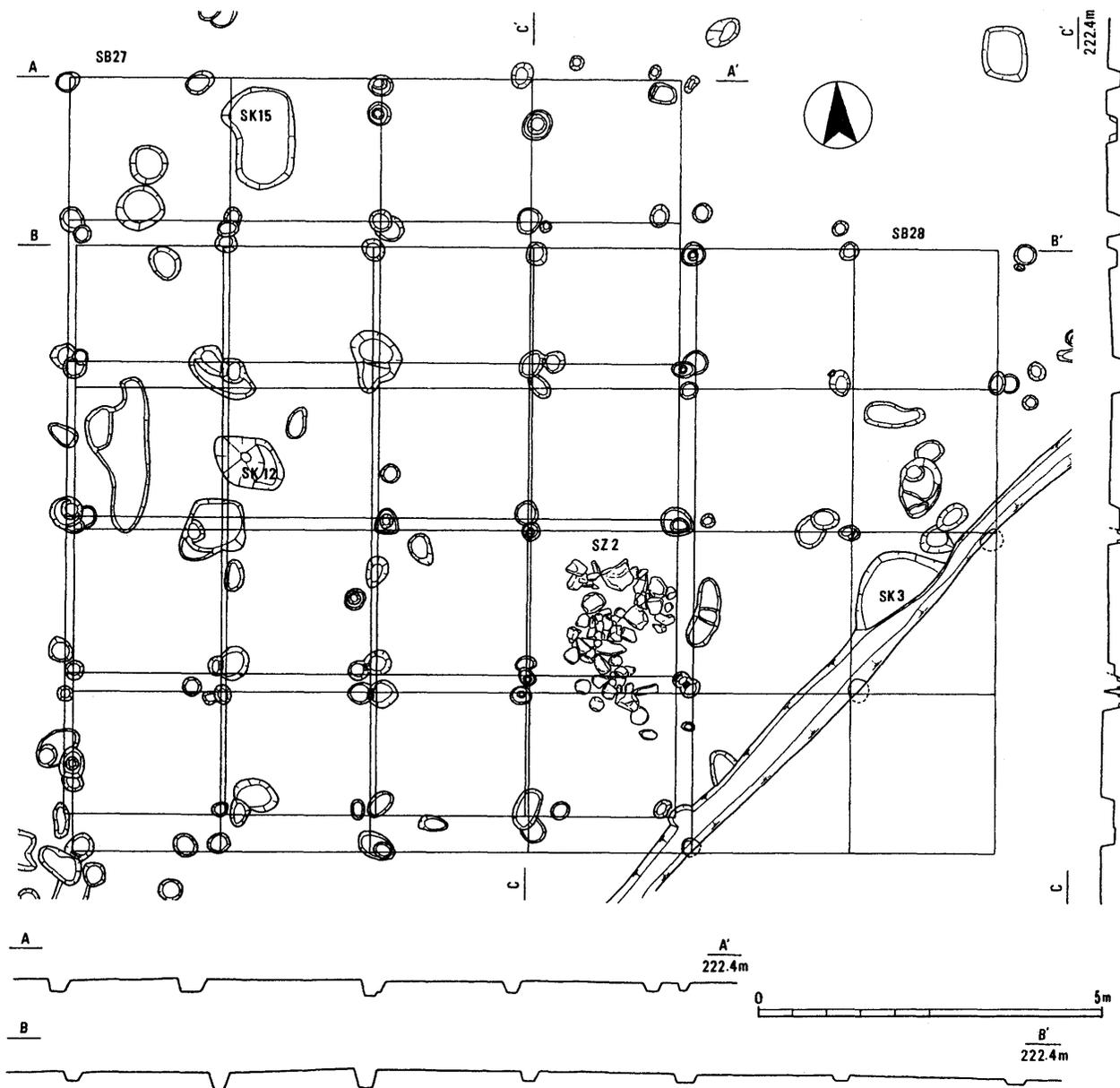
c 配石遺構

S Z 2 (第Ⅲ-8 図) A 地区の南部、S B 27 と S B 28 の重複している部分で検出した。人頭大の石が 40 個程かたまって配置されていた。揃えた面を持たず、規則性は薄い。北端とそこから直行する東側の石に規則性が見られる場所があり、この部分のみ現位置を保ち、他は崩壊した可能性もある。瓦器碗、土師器小皿が出土した。瓦器碗の中には赤化したものもある。

S Z 7 (第Ⅲ-8 図) A 地区の南部、S B 26 と S B 27 の間で検出した。径 20 cm 程度の石が 50 個程かたまって配置されていた。揃えた面を持たず規則性は薄い。遺物は、周辺を含めて多量に出土している。瓦器碗・皿、土師器小皿・羽釜、渥美産大甕がある。瓦器の中には赤化したものもあり、



第三-6图 SB25·26、SB16、SB29実測図 (1:100)



第Ⅲ-7図 SB27・28実測図(1:100)

周囲では炭、焼土も確認された。

d 土坑

SK3 (第Ⅲ-7図) A地区の南辺中央、SB28の中で検出した。底部付近で完形の瓦器皿が出土した。検出面からの深さは18cmである。SB28の南東隅土坑である可能性がある。

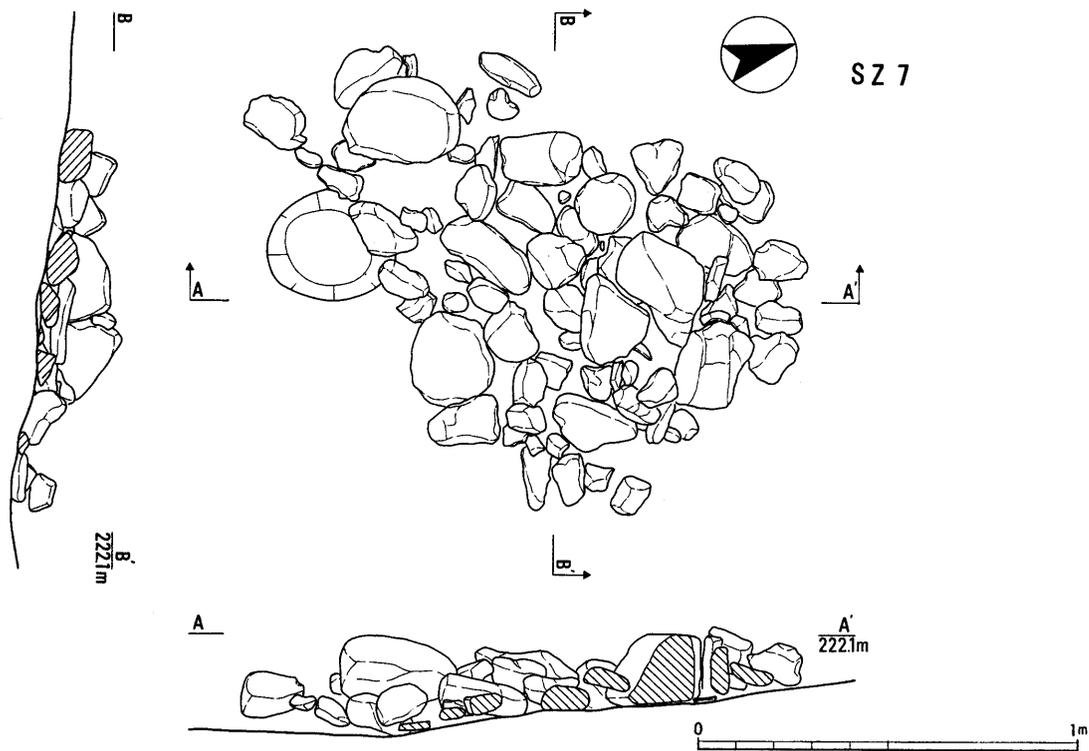
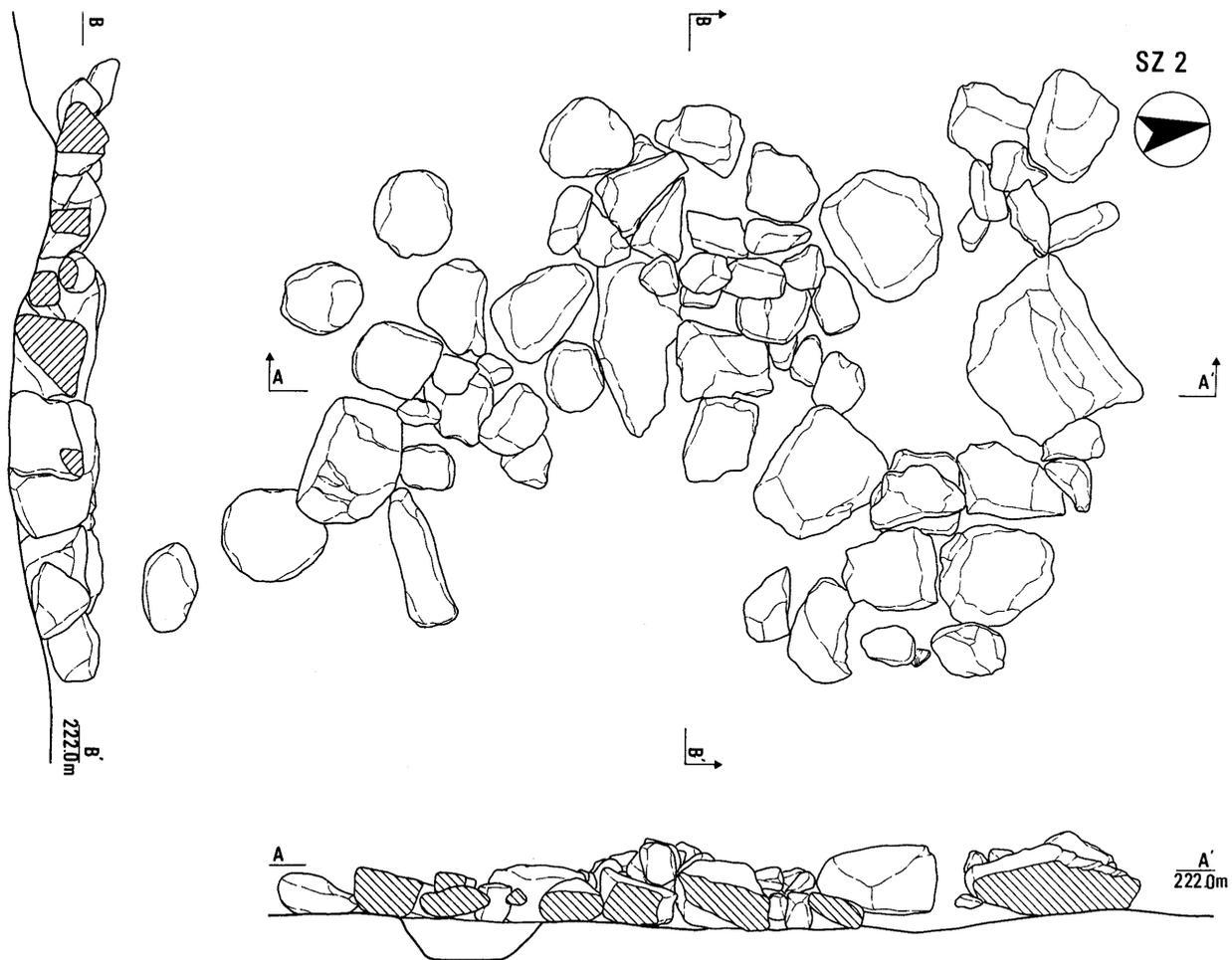
SK8 (第Ⅲ-6図) A地区の東部、SB25の中で検出した。径90cm、検出面からの深さ30cmの円形土坑である。土師器羽釜、瓦器椀と共に混入品と考えられる飛鳥時代頃の土師器甕が出土した。瓦器椀には赤化したものもある。

SK12 (第Ⅲ-7図) A地区の南部、SB27の中

で検出した。一辺80cm、検出面からの深さ30cmの平行四辺形土坑である。土師器小皿、瓦器椀、白磁皿片が出土した。

SK15 (第Ⅲ-7図) A地区の南部、SB27の中で検出した。幅90cm、長さ150cm、検出面からの深さ15cmの不定楕円形土坑である。土師器小皿・羽釜、瓦器椀・皿が出土した。瓦器椀の中には赤化したものもある。

SK19 (第Ⅲ-4図) A地区中央で検出した。幅1m、長さ1.2m、深さ30cmの楕円形土坑である。中央に幅60cm、長さ80cmの石が入っている。石は、土坑の底より深く埋まっていた。もとあつ



第Ⅲ-8図 SZ 2・7実測図(1:20)

た土坑の周りを掘り下げたというよりも、土坑を掘って石を放り込んだ可能性が高い。土師器羽釜、瓦器椀・皿の細片が出土した。瓦器皿には赤化したものもあった。

S K 30 (第三-4 図) A地区東部で検出した。幅 90 cm、長さ 1.2 m、深さ 10 cmの円形土坑である。焼土・炭の小片と共に瓦器椀の小片が出土した。瓦器椀には赤化したものもある。骨片は検出できなかったが、中世墓の可能性はある。

(3) 遺物

遺物は、整理箱で約20箱分出土した。大別すると縄文時代中期、飛鳥から奈良時代、平安時代末期の3期に分けられる。

A S H 22出土遺物 (1~10)

飛鳥時代の遺物が出土している。後述の S H 24より若干古い様相を示す。

土師器椀 (1~4) は、器高が低いもの (1~3) と器高が高いもの (4) に分けられる。いずれもオサエ成形で、2・4の外面には粘土接合痕跡を残す。土師器鉢 (5) は、器壁が薄く、外面にはハケ調整の跡を残す。土師器甕 (6~9) は、小形で、口縁部径と体部最大径がほぼ同じぐらいになる6~8と、口縁がほぼ垂直に立ち上がり、体部が大きく外反し、長胴形となる可能性もある9がある。須恵器甕 (10) は、竈跡直上で出土した。体部最大径は口縁部径とほぼ同じぐらいである。焼成は甘く外面には煤が付着しており、出土位置からも煮沸用具として用いられた可能性がある。同様の須恵器が御墓山窯跡からも出土している。

B S H 24出土遺物 (11~20)

飛鳥藤原宮編年¹の飛鳥Ⅲ~Ⅳに相当する遺物が出土している。

須恵器杯蓋 (11) は、天井部外面に「x」字状のヘラ記号をもつ。陶邑編年²の T K 209に相当する物で、杯身の可能性もあるが、天井部の丸みと、内面のナデが粗雑なことから蓋であると考えた。須恵器杯身 (12~14) のうち、12・13は、いずれも高台をもたないもの。13は、竈穴内のピット直上からの出土であり、このピットの遺物である可能性もある。14は、高台をも

つもので、高台の形や傾きから飛鳥Ⅳ頃のものと考えられる。平瓶 (15) は、竈付近から出土した。口縁部のみ残存している。頸部は3段接合である。土師器甕 (16~19) のうち、16は頸部の屈曲が小さい小形の甕である。17~19はいずれも口縁部が「く」の字状に強く屈曲し、口縁端部が面取りされる。石 (20) は、竈の対角線上の壁際に据えられていた。平らな面を上に向け、中央には煤が付着している。

C S D 21出土遺物 (21)

須恵器杯蓋 (21) は、宝珠つまみを有する。

D S K 101 出土遺物 (22・23)

須恵器杯身 (22) は、あまり外傾しない高台を持つ。土師器杯 (23) は、内面に斜放射状1段及び連結輪状文の暗文を持つ。外面にはミガキも残っており、平城宮編年Ⅱの時期のものと考えられる。

E S K 105 出土遺物 (24)

土錘 (24) は、土師質で、中央に穴を持つ。所属年代は不明である。

F S B 25出土遺物 (25)

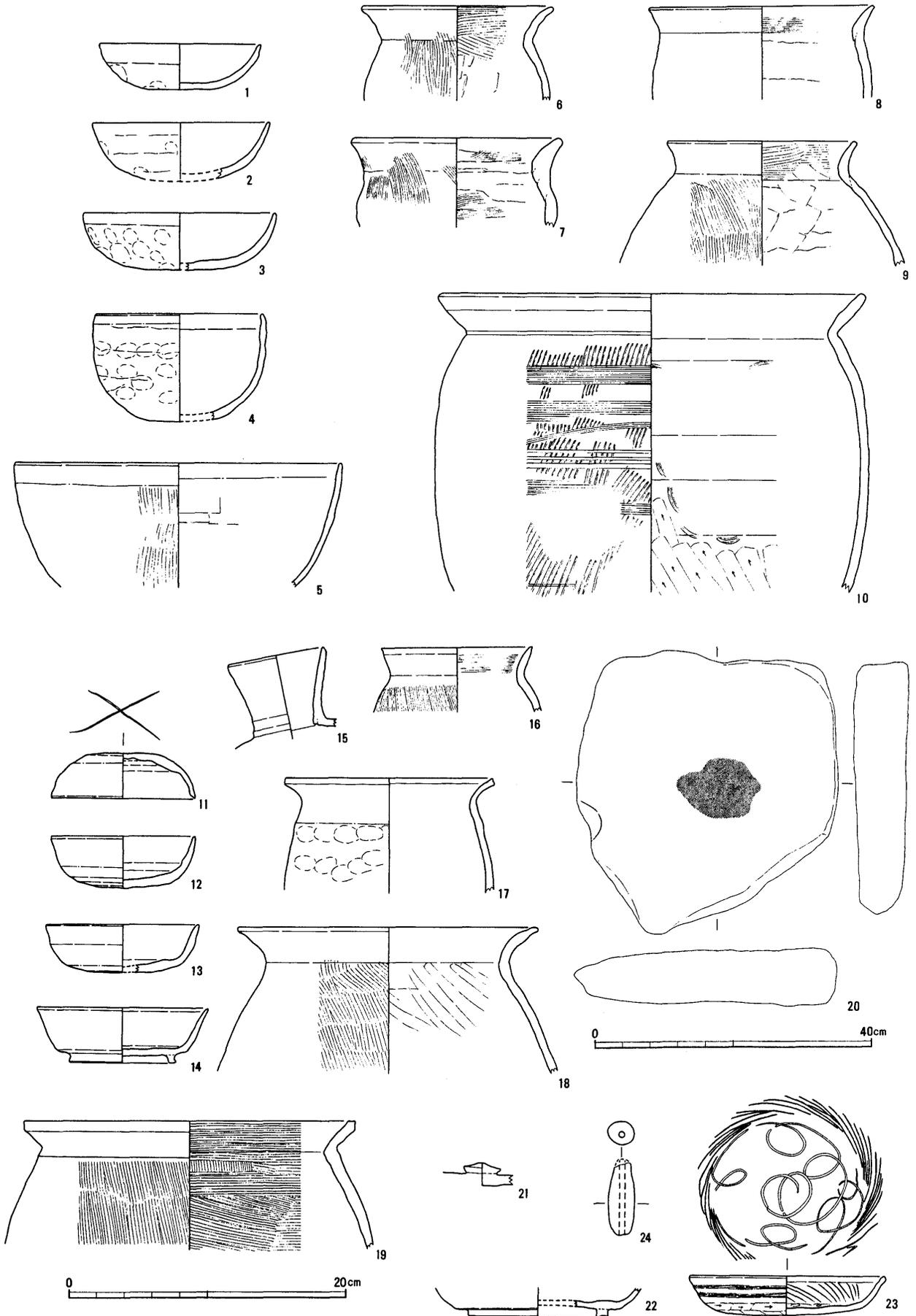
瓦器椀 (25) は、体部内面には密な磨きが施され、体部外面には粗雑なミガキが施されている。内外面共に赤変している。

G S B 26出土遺物 (26~29)

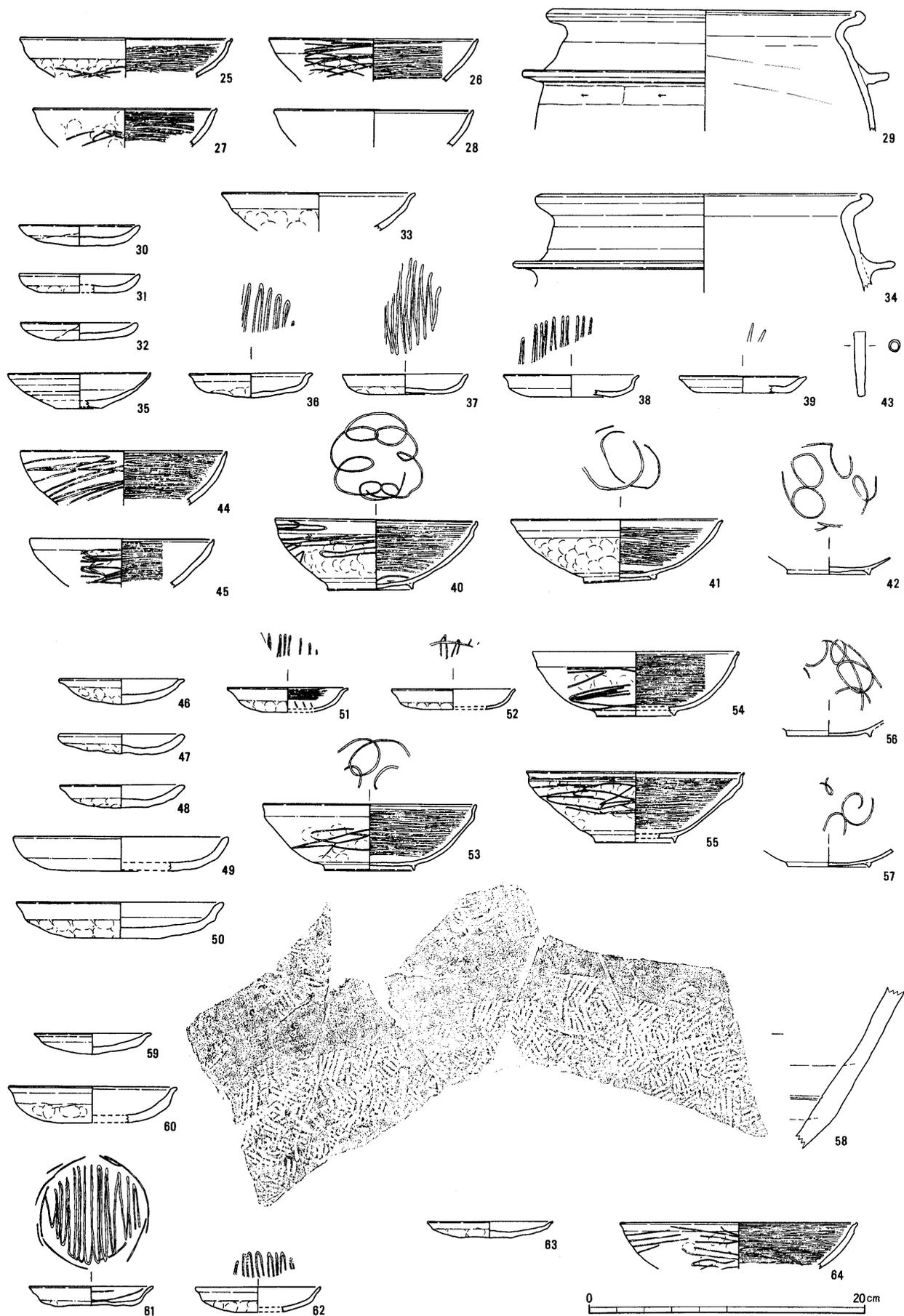
瓦器椀 (26~28) のうち、26~27の内面には密なミガキが施されている。26の外面には、口縁に及ぶ割合密な磨きが施され、27の外面のミガキは、粗く、口縁部には達していない。重ね焼きの痕跡も残る。28は、口縁端部内面に沈線が施され、瓦器椀と考えられるが、全面に赤く焼け、器壁も荒れているので断定できず、土師器である可能性もある。羽釜 (29) は、口縁部が「く」字状に屈曲するもので大和型³に似るが、口縁部が屈曲する。

H S B 27出土遺物 (30~36、39~43)

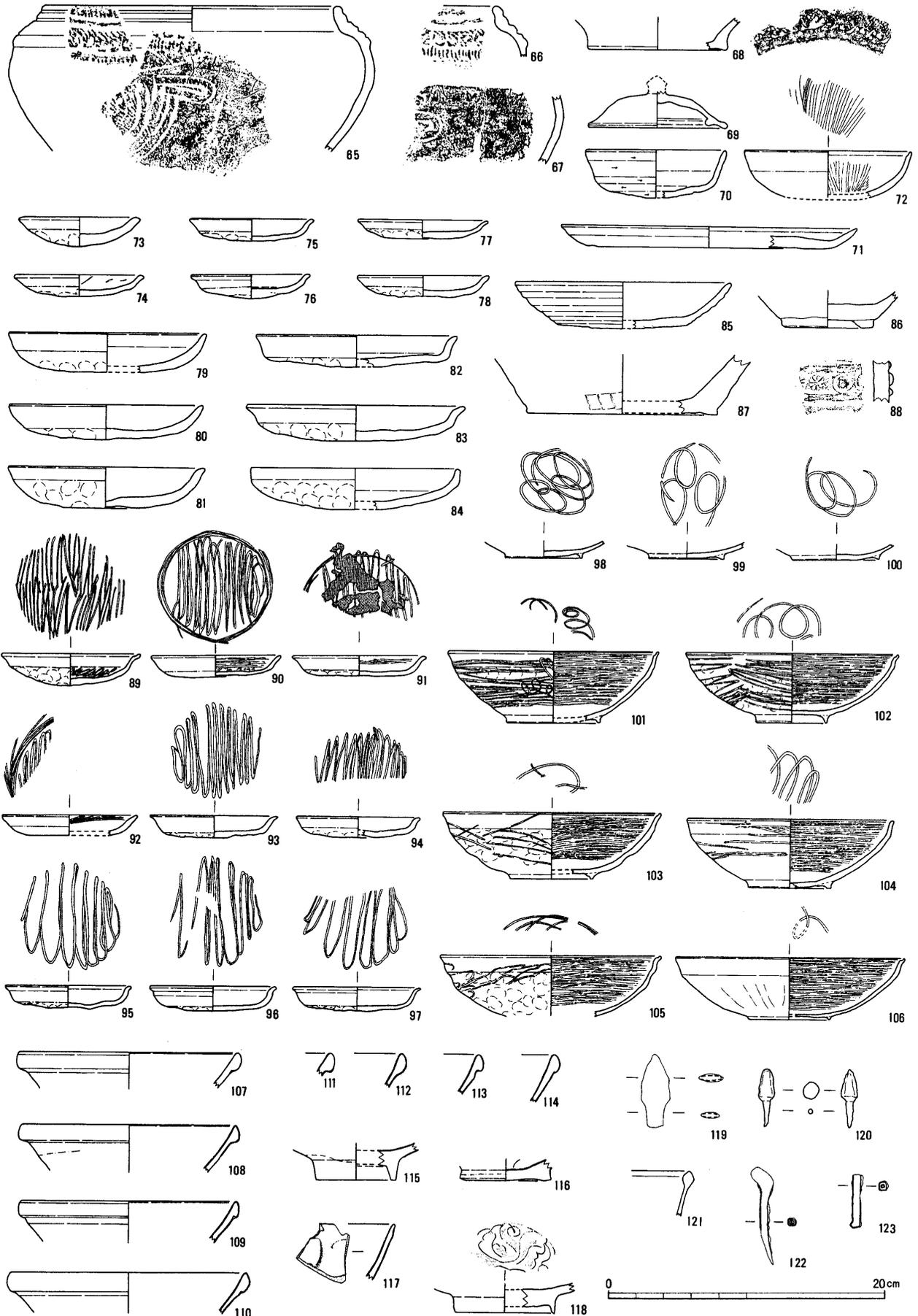
土師器小皿 (30~32) は、口径 9 cm弱、器高は 1.5 cm弱で外部に粘土接合痕跡を残す。土師器椀 (33) は、口縁部内面の沈線はないが、径や調整の方法が瓦器と類似しており、瓦器を指向して作られたものとも言える。羽釜 (34) は、



第Ⅲ-9図 出土遺物実測図1 (1:4 ただし20は1:8)



第三-10 图 出土遺物実測図2 (1:4)



第Ⅲ-11 图 出土遺物実測図3 (1:4)

29と似た器形や調整をもつ。白磁皿(35)は、糸切り高台から斜め上方に口縁部が延び、端部がやや内湾する。瓦器皿(36・39)は、いずれも口径9cm強、器高1.5cm前後のもので、内面見込み部にジグザグ文をもつ。体部内面のミガキは施されていない。39は器壁が厚く、屈曲が直線的である。瓦器椀(40~42)は、いずれも柱掘形から出土した。42は、35と同じピットから出土した。内面見込み部には連結輪状文が施されている。鉄製不明品(43)は、42と同一箇所から出土した。他の金属製品とは錆の出方が異なる。木質に金属質がしみ込んで残ったものとも考えられ、鉄の中茎付近の木質等である可能性がある。

I SB28出土遺物(44・45)

瓦器椀(44・45)は、両者共に内面には密なミガキが施される。44の体部は丸みを帯び、口縁端部に達するミガキを施す。45は直線的に伸びる口縁に、外面には口縁部に達しないミガキが施されている。

J SZ7出土遺物(46~58)

SZ7の周辺からは瓦器椀・皿、土師器皿・羽釜、無釉陶器などの多量の遺物が出土した。石組みの間や下からも遺物が確認されている。

土師器小皿(46~48)は、口径9cm前後、器高1.5cm前後のもの。46は口縁をつまみ出し、薄くつくるが、47・48は丸くなでている。いずれも外部に粘土接合跡を残す。土師器皿(49・50)は、口径15cm前後、器高2.5cm前後のもの。瓦器皿(51・52)は、51の体部内面には密なミガキが施される。瓦器椀(53~57)のうち、53~55は、いずれも体部内面には密なミガキが、外面には粗いミガキが施されている。56・57は底部のみの出土であるが、いずれも見込み部に連結輪状文が施されている。無釉陶器甕(58)は、胎土の特徴から渥美産のものと考えられる。外面底部にはスタンプ文の刻まれた器具によるタタキが施されている。内面底部には煤の付着が見られる。

K SK3出土遺物(59~62)

土師器小皿(59)は、口径8.4cm、器高1.8

cm、皿(60)は、口径12.1cm、器高2.5cmと、共にSZ7のものより若干小さい。瓦器皿(61)は、床面直上でほぼ完形で出土した。内面体部に12往復のジグザグ文の暗文が施される。

L SK12出土遺物(63)

土師器小皿(63)は、口径9.1cm、器高1.2cmと器高指数が低く、厚さも薄い。口縁端部をつまみだした形をとる。

M SK15出土遺物(64)

瓦器椀(64)が出土している。内面には密なミガキが、外面には口縁部にいたるやや粗いミガキが施されている。

N pit出土遺物(37・38)

いずれも口径9cm強、器高1.5cm前後の瓦器皿で、内面見込み部にジグザグ文をもつ。体部内面のミガキは施されていない。(野口)

O 包含層出土遺物(65~123)

包含層からは、主として縄文時代、飛鳥時代、平安時代末期から鎌倉時代にかけての遺物が出土している。

a 縄文時代の遺物(65~68)

深鉢形土器(65~67)は、いずれも同一個体である可能性が高い。体部上半が内湾し、体部下半は筒状にのびるものと思われる。口頸部は短くやや内傾して立ちあがる。口縁端部は隆帯状に肥厚して丸くおさめる。頸部近くで最大径をもつと思われる。口縁端部から頸部にかけて文様帯があり、口縁上端から密なC字爪形文、二条の沈線間に無文帯を挟み、蓮華状文、隆帯上に密なC字爪形文を施す。全貌は不明ながらも体部上半にも渦巻き状の文様があり、渦巻きの末端が鉤の手状に曲がる。口縁部の文様帯のうち、蓮華状文は、弁先が下方に向く「倒立蓮華状文」と呼ばれるもので、弁先中央に逆三角形の刺突が施される。文様部分以外は、ナデ調整されているが、蓮華状文と渦巻き文の一部に無節縄文がみられ、地文として無節縄文が施されていたとみられる。底部(68)は、平底の底部片で、単節縄文が体部外面に施されている。

これらの遺物は、在地では初見のもので、外来影響下の土器と思われる。口縁部に蓮華状文

をもつ点をはじめ、隆帯上の密なC字爪形文、口縁部文様帯中の横位無文帯の存在など、北陸地方中期前葉の新保・新崎式系統の特徴と考えられる。これらの特徴のうち、C字爪形文や渦巻き状文などは、南関東の五領ヶ台式にも類似するが、もともと両様式の関係は密接な繋がりであることからくると思われる。(竹内)

b 飛鳥から奈良時代の遺物 (61~71)

須恵器杯蓋 (69) は、かえりを持つもので、宝珠つまみをもつと考えられる。飛鳥藤原宮編年飛鳥Ⅱ~Ⅲに該当する。須恵器杯身 (70) は、高台を持たない。須恵器皿 (71) は、扁平で、器壁が厚い。土師器杯 (72) は、いわゆる杯Cタイプのもの。胎土は精良で、内面に放射状1段の暗文を施す。飛鳥藤原宮編年飛鳥Ⅲ~Ⅳに該当する。

c 平安時代末期以降の遺物 (72~118)

土師器小皿 (73~78) は、口径8.8~9.6 cm、器高1.4~2.2 cmのもの。丸底、厚い器壁で口縁部を丸く納めるもの (73) と、平底のやや薄い器壁で口縁部内面に強いナデを施すもの (74~78) とがある。土師器皿 (79~84) は、口径14~16cm、器高2.5~3.0 cmのもの。平らな底部からゆるやかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさまるもの (79~81・84) と口縁部に強いヨコナデが施されるもの (82・83) がある。土師器皿 (85) は、回転台で作成されたもので、細かいロクロケズリ跡を残す。底部は回転ヘラ切り未調整である。山茶碗 (86) は、青山町では初見である。厚めの底部にややつぶれた高台が付く。渥美産のⅢ期⁴のものと考えられる。

陶器捏鉢 (87) は、内面に工具によるナデ痕跡を持つ。瓦質土器 (88) は、火舎の一部と考えられる。外面に菊花文及び円文のスタンプが施される。内面の燻しは不良である。瓦器皿 (89~97) のうち、89は内面見込み部に2段に分けたミガキを施すもので類例を見ない。2段に分けたミガキの下に、ジグザグ文のミガキを持つ可能性もあるが、明瞭ではない。内外面共に赤変する。90~92は見込み部に12往復程度のジグザグ文、体部に密なミガキを施す。92のミガキ

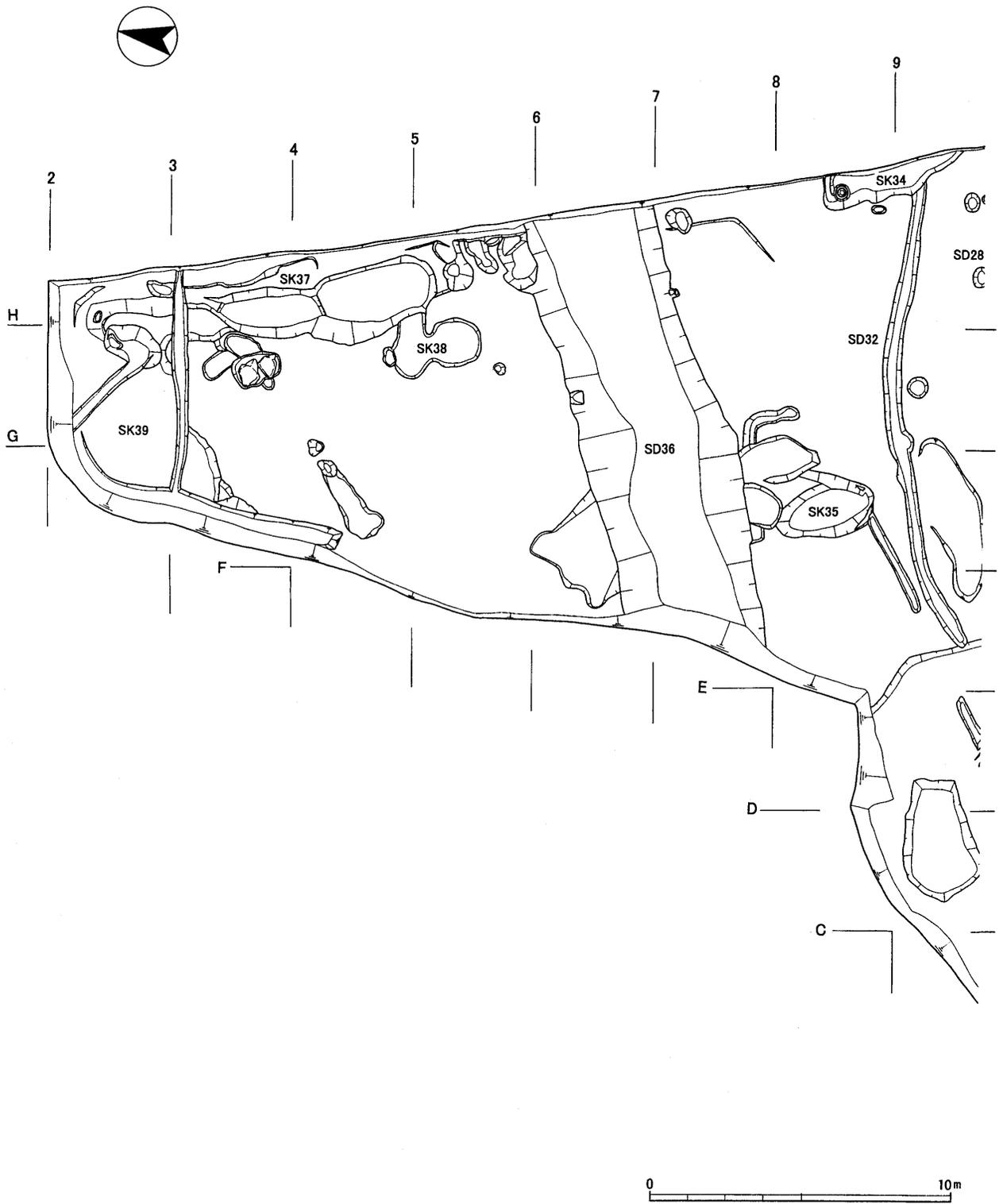
には特徴がある。93~97は体部にミガキを施さないもので、内面見込み部に、93・94は11~12往復の、95~97は7~8往復の暗文を施す。瓦器碗 (98~106) のうち、98~100は底部のみの出土である。98・99には内面見込み部に連結輪状文を、100には「ㇿ」を2個繋げたものが施されている。101~105は内面には密な、外面には粗いミガキが施され、見込み部には連結輪状文の変形したものが施されている。103は、成形の時の指オサエの痕跡が明瞭に残る。106の外面にはミガキが施されておらず、底部から口縁部にかけてナデアゲた痕跡が伺われる。白磁碗 (107~116) のうち、107~114・116は太宰府編年のⅣ⁵にあてはまる。115は同Ⅴの底部である。青磁碗 (117) は、内面に花文の線刻がある。竜泉窯の産品であろう。青白磁 (118) は、内面に花文の線刻をもつ。

d 鉄製品 (119~123)

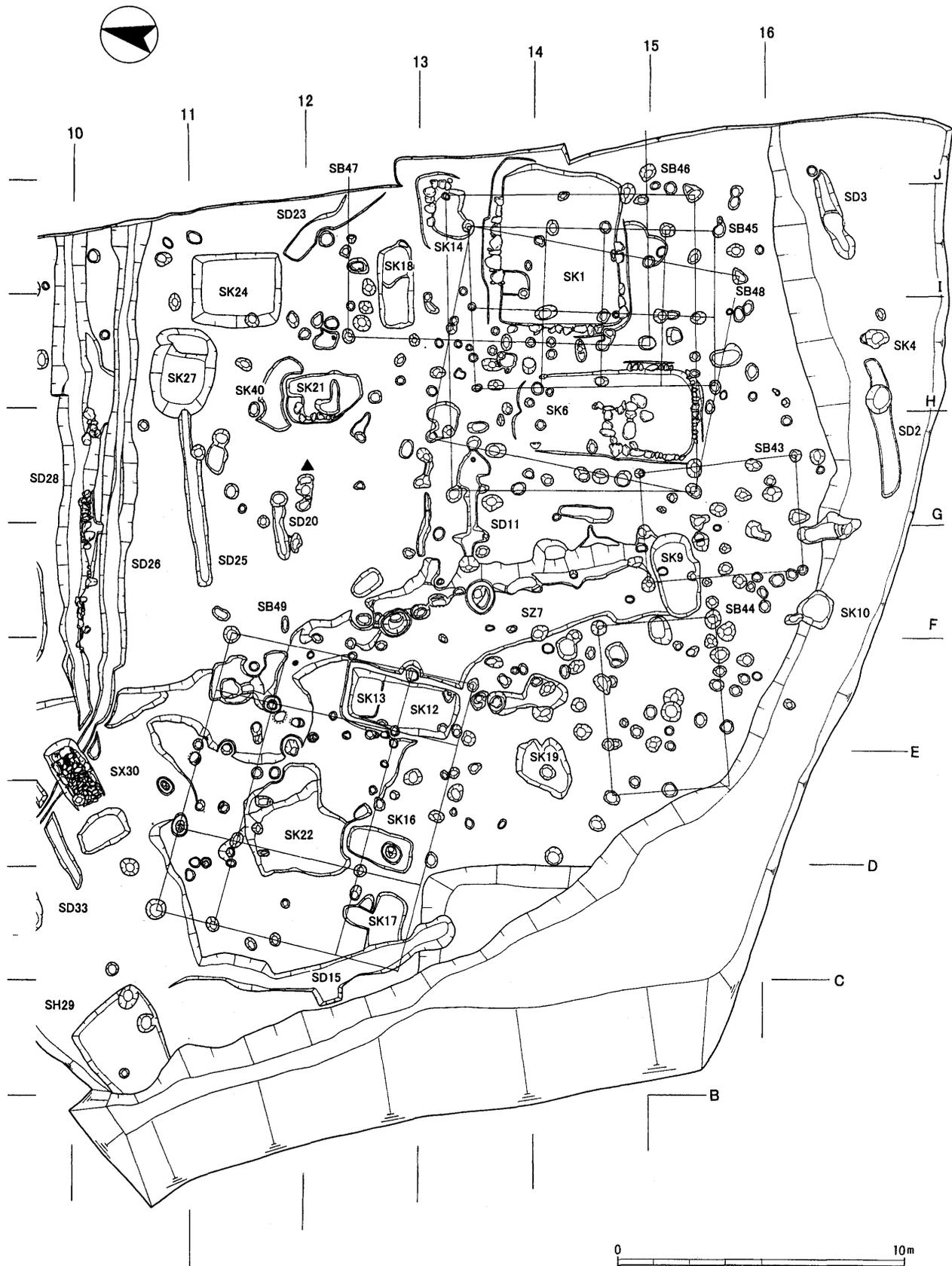
SZ7付近の包含層から出土している。中世のものであろうか。鉄鎌 (119・120) は、両者共に鍛造と考えられる。119は両刃のもの。茎が途中で折れている。120はほぼ完形と考えられる。鉄鍋 (121) は、小片のため口縁径は不明である。口縁端部は内面に折り返されていると考えられる。鉄釘 (122・123) は、錆のためか、中が空洞になっている。1枚の鉄板を丸めて作ったものか。(野口)

〔註〕

- 1 『古代の土器1 都城の土器集成』及び『古代の土器2 都城の土器集成』(1992年、古代の土器研究会)等を参考とした。
- 2 田辺昭三『須恵器大成』(1981年、角川書店)
- 3 鎌柄俊夫「畿内における古代から中世の土器一模倣系土器生産の展開一」(1988年、『中近世土器の基礎的研究Ⅳ』日本中世土器研究会羽釜)
- 4 後藤健一「渥美・湖西中世窯跡群」(1987年、『マージナルNo.7』愛知考古学談話会)
- 5 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心にして一」(1978年、『北九州歴史資料館研究論集4』)



第Ⅲ-13 図 北側調査遺構平面図(1:200)



第三-14 図 南側調査区遺構平面図(1:200)

(2) 遺構

検出した遺構の時期は、大きく分けて奈良時代と鎌倉時代以降の二時期に分かれる。このうち後者は16世紀代を中心とする遺構が多く検出されている。

なお、縄文時代の遺物も出土しているが、明確な遺構は検出できなかった。

①奈良時代の遺構

(ア) 竪穴住居SH29 調査区西北部あり、遺構検出面は表土から約1.5mと非常に深い。深さは0.3mで、東辺長2.9m、西端は壊されているが西側の南北の長さは2.2m、東西の長さは3.2m以上といびつな台形を呈している。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器碗が少量出土した。时期的には奈良時代でも後半のものである。

(イ) 溝SD41 後世のSZ7が調査区中央南側から南から北に延びおり、SH29の東側10mの位置にある幅の狭まる所をSD41として掘削した。幅1.4m、深さ0.2mである。

須恵器杯蓋2点、壺1点を出土したほか、耳環1点を出土した。杯蓋は摘みを打ち欠いたもので、転用した可能性が高い。

②13世紀前半の遺構

(ア) 掘立柱建物

SB48 (第Ⅲ-16図) 調査区東南隅にある3間×2間の南北棟である。桁行柱間は、南側の2柱穴間が3.0mであるが、北側のみ2.0mと不揃いである。梁行柱間は3.0m等間で、柱掘形は径0.3~0.5mの円形で、深さは0.2~0.4mである。棟方向は北で東

に3度振れている。

柱穴内からは、遺物は出土していない。このため、他の掘立柱建物の方向が北で西に振れるのに対して、後述するSB49が東に振れていること、SB49の方位に近いため当概期とした。

SB49 (第Ⅲ-16図) SB48の西側8mの位置にある4間×4間の東西棟建物で、中央の柱穴はSK22によって壊されており未検出であるが、総柱建物になると考えられる。東南隅にSK12・13があり、いわゆる南東隅土坑をもつ掘立柱建物である。

桁行柱間は東側から2.0m、2.4m、2.4m、3.0m、梁行柱間は北側2柱穴間が2.1mであるのに対して南側2柱穴間は2.2mといずれも不揃いである。柱掘形は径0.4~0.7mの円形で、深さは0.2~0.5mである。棟方向は北で東に5度振れている。

柱穴内から出土した遺物は少なく、時期決定が困難なため、南東隅土坑の出土した遺物から掘立柱建物の時期を決定した。

(イ) 土坑

SK12・13 掘立柱建物SB49の東南隅土坑である。長さ3.9m、幅1.7m、深さ0.2mの長方形を呈し、北側は深さ0.25mと一段深くなっており、SK13として掘り下げた。

SK12から出土した遺物は、土師器皿、瓦器碗・皿、白磁などがある。遺物から見て13世紀前半のものである。

なお、SK13とした一段深い場所からも土師器甕、瓦器碗などが出土しており、一連の土坑と見て間違いないものである。

SK17 調査区西側にある。土坑の西側はSD15に壊されており、東西の長さは2.0m以上、幅1.1m、深さ0.3mの長方形土坑になるものと考えられる。

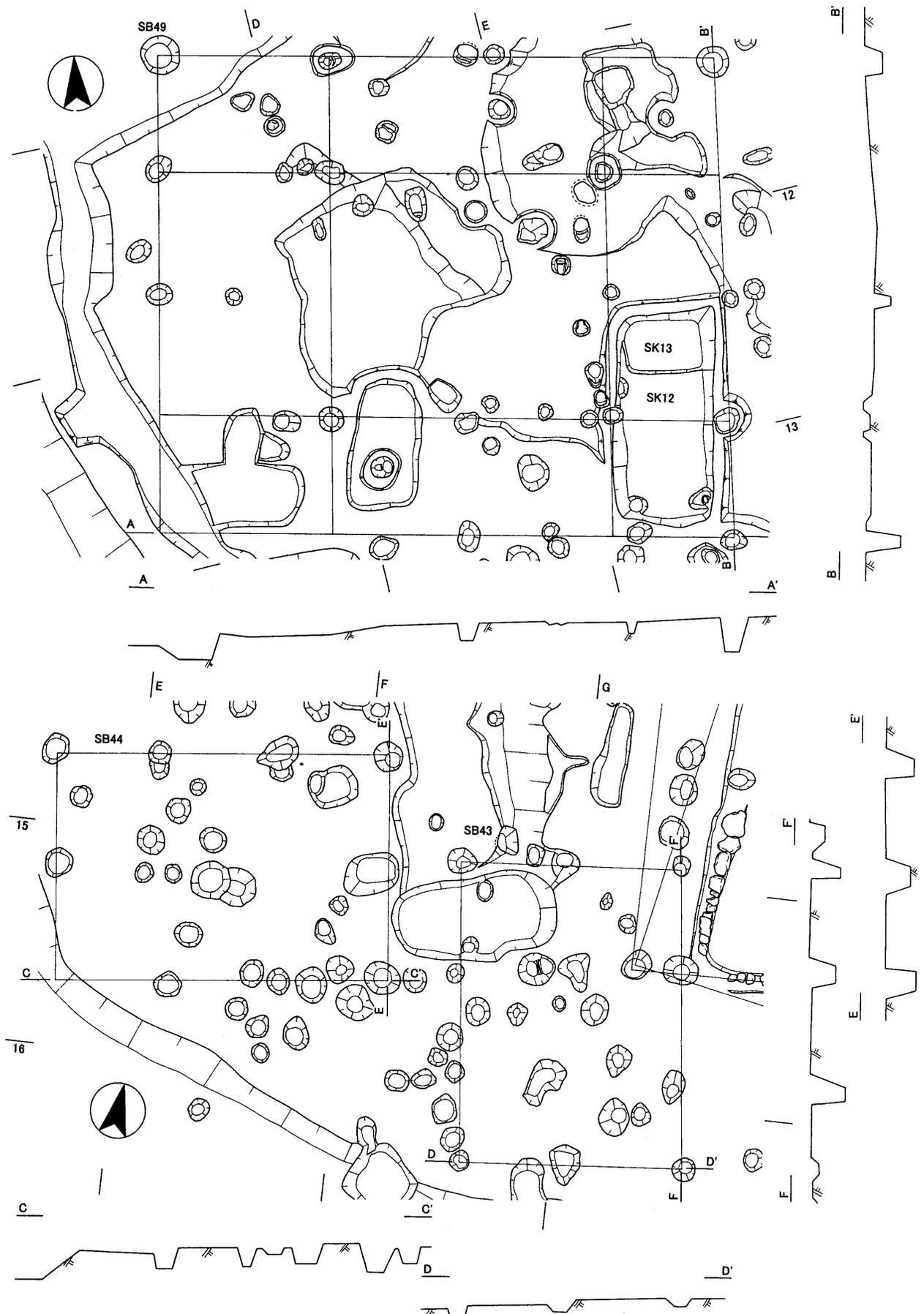
東側では、拳大から0.3mまでの礫に潰された状況で瓦器碗が上面から出土した。このほかの遺物には、土師器皿・羽釜などがある。

SK39 調査区北端にある北側に向かって深くなる土坑で、南肩のみ確認した。調査区外に延びるため、規模は不明であるが、深さは0.4mである。SK37より古いことが確認した。

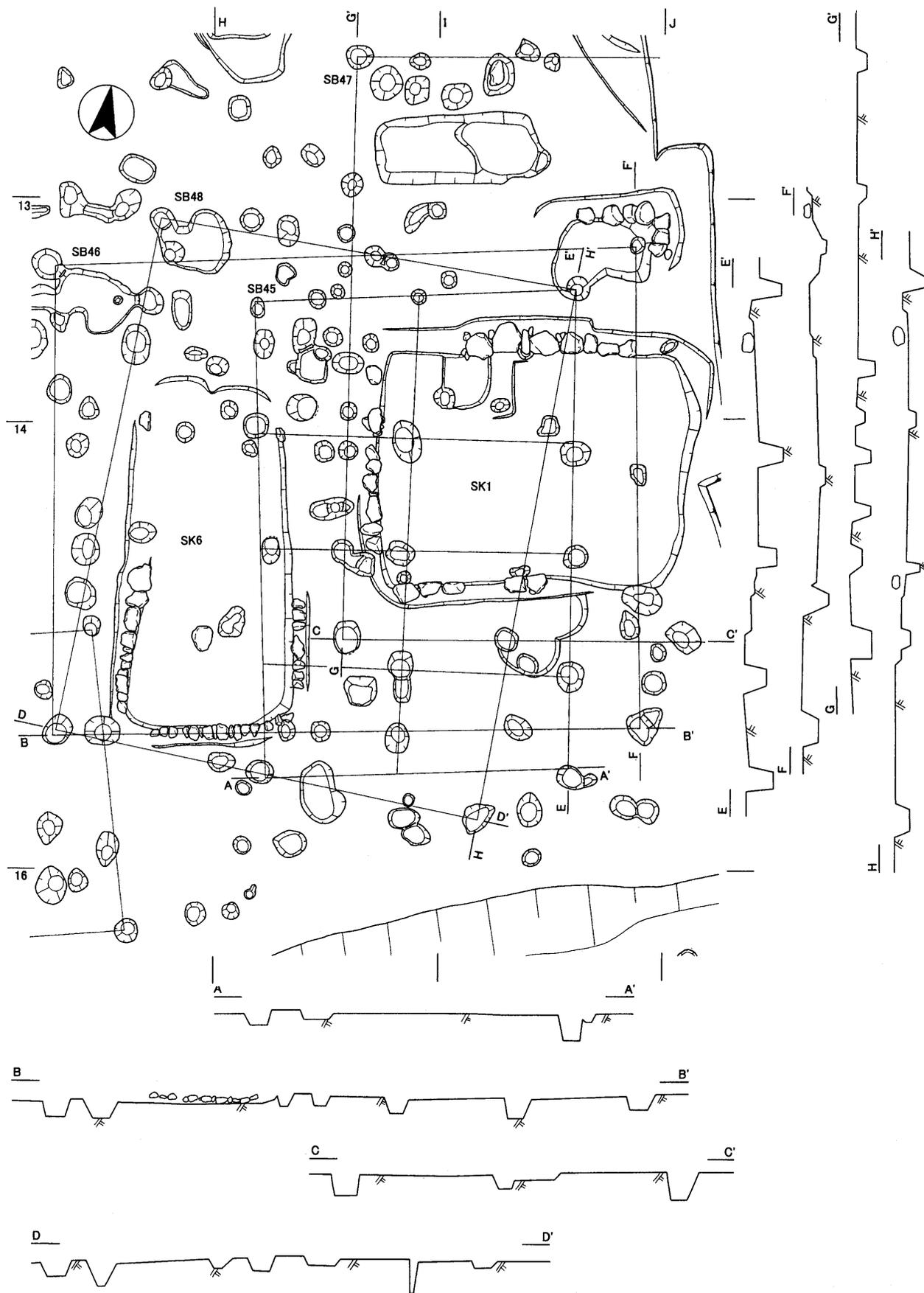
遺物は、土師器皿・鍋・羽釜、瓦器碗・皿、山茶碗、青磁碗等が出土している。

時代	遺構		
	主要遺構	土坑	溝
奈良	SH29		41
13C前半	SB48・49	12・13・17・39	
14・15C代	SZ42	22	15・32
16C前半	SB46	6・18・24	25・28
16C後半	SB47・SZ7	1・9・34	26・36
16C代	SB43・44・45 SX30	14・21・27 ・35・37・	
不明		16・38・40	

第Ⅲ-1表 時期別遺構一覧表



第Ⅲ-15図 S B 43・44、49 遺構平面図(1:100) レベル高は 224.2 m



第Ⅲ-16図 調査区東南部 S B 45 ~ 48 (1:100) レベル高は 224.2 m

③14～15世紀の遺構

(ア) 土坑等

SK22 調査区西側中央にある南北3.7m、東西3.8m、深さ0.25mの逆L字形を呈する土坑である。

遺物には、土師器皿、瓦器椀、須恵器杯、陶器鉢など混入品と思われるものが多く出土し、信楽焼のすり鉢が15世紀前半～中頃にかけてのものである。

SZ42 (第Ⅲ-20図) 調査区東南にあるSK21とSD20の中間近く(第Ⅲ-14図▲印)で、遺構検出中に横に倒れた鉄軸小壺1点を確認した。精査した結果、土器は地山面に8cmほど食い込んでいた。大きな掘形は確認できないため、土器の大きさと同じ径0.1mの円形の掘形に土器のみを埋めたものと判断するしかなかった。内部からは貨幣や鉄製品が出土しているが、性格については不明である。

(ウ) 溝

SD15 SK22の西側にある幅0.6～1.1m、深さ0.6mの南北溝で、長さ10mほど確認した。

遺物は、土師器皿・羽釜、山茶椀、瓦器椀などが出土しており、瓦器椀から見て14世紀初頭の年代を与えることができる。

SD32 SD28の北側にある幅0.6m、深さ0.3mの東西溝である。調査区東側に延びるが、西側は遺構面が低い中央で途切れている。

遺物は、土師器皿・鍋、瓦器椀、瓦質土器火鉢、陶器椀・鉢などが出土した。このうちの天目茶碗、灰釉平椀などが、15世紀前半のものである。

16世紀の遺構

この時期の遺構が最も多いが、出土した遺物から、時期的に16世紀前半と後半に細分できるものと16世紀代としか判断できないものがある。このため、この時期の遺構については、16世紀前半の遺構・後半の遺構と記述して、最後に16世紀代の遺構について記述する。

④16世紀前半の遺構

(ア) 掘立柱建物

SB46 (第Ⅲ-16図) 調査区東南にある東西5間×南北4間の東西棟建物で、西南隅に後述するSK6が伴うものと考えられる。

桁行は全長10.5mで柱間は2.1m等間、梁行は全長8.4mで柱間2.1m等間で、柱掘形は径0.3～0.5m

の円形で、深さは0.4mである。棟方向は北で西に9度振れている。

柱穴から出土した遺物は少なく、時期決定が困難であるが、SK6が建物に伴う付属施設と考えられることから、土坑の時期で判断した。

(イ) 土坑

SK6 (第Ⅲ-18図) 掘立柱建物SB46うちの西南隅にある長さ6.5m、幅3.5m、深さ0.2mの長方形土坑である。南面にも石が並べられており、南側から中央付近まで両壁面に沿って0.2～0.5m大の石が並べられていた。土坑中央にも西側から東側に続くように石が残っていたため、土坑の周囲に巡らされていたのではなく、南側半分のみ石が巡らされた可能性が高い。

遺物は、土師器皿・鍋、瓦器椀、瓦質土器風炉、陶器椀・鉢、小刀などが出土しており、16世紀前半の年代が与えられる。

この土坑は、これまで言われている南東隅土坑のように掘立柱建物に付属する施設の可能性がある。建物方向と土坑の方向がほぼ揃うSB46は、当土坑の位置が掘立柱建物内部の西南隅にあたるが、ここではSB46の付属施設と考えておく。

SK18 SK6の東北にある長さ3.0m、幅1.2m、深さは0.25mで、東側が0.3mと一段深くなっている長方形土坑である。

遺物は、土師器皿・鍋、瓦器椀、陶器鉢、青磁椀、不明鉄製品などが出土した。

SK24 SK18の北側にある長さ3.0m、幅2.6m、深さは0.3mの長方形土坑である。

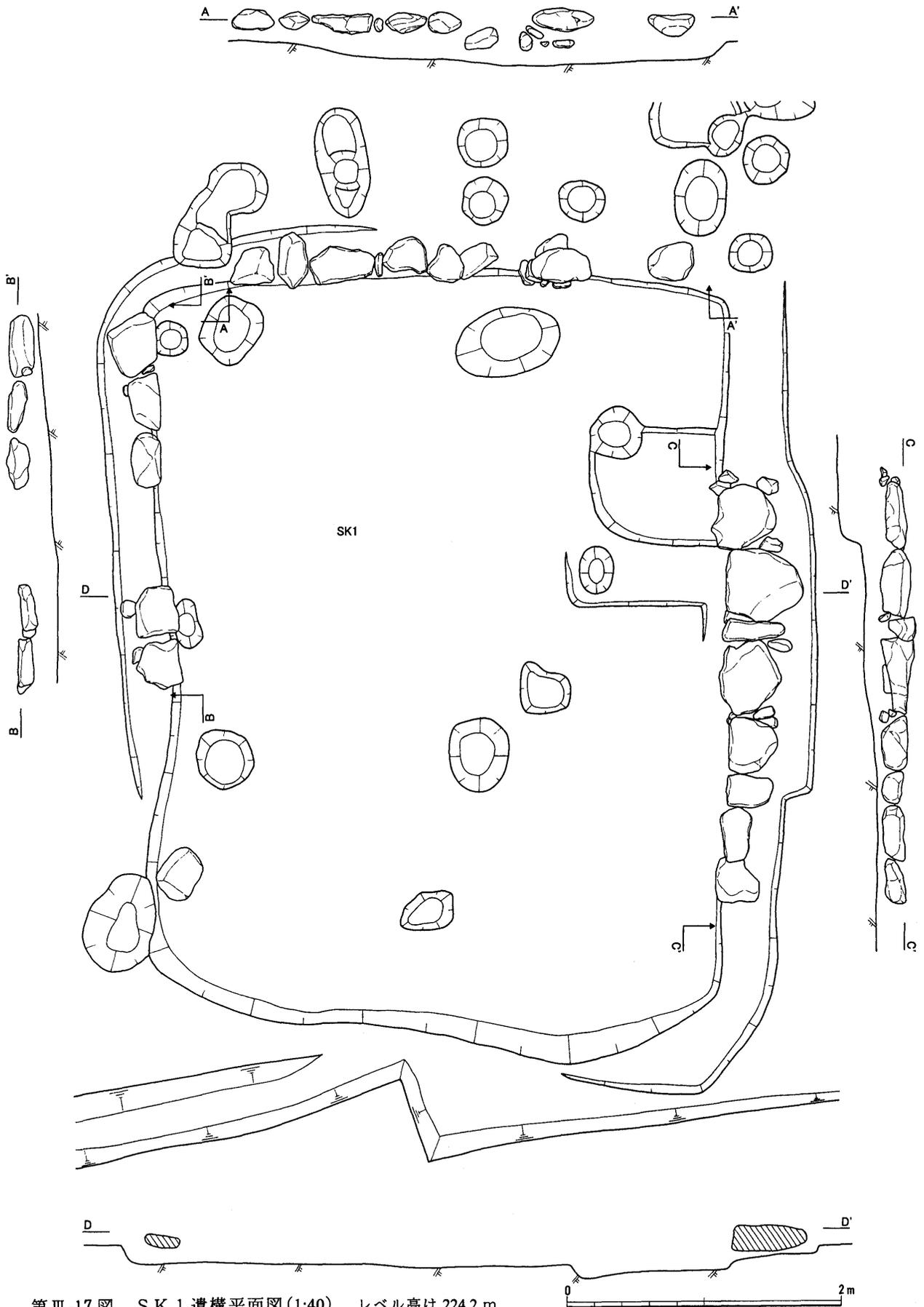
遺物は、土師器皿・鍋・羽釜、瓦器椀、瓦質土器羽釜、陶器椀・鉢、青磁椀が出土した。陶器には信楽のすり鉢や、天目茶碗、瀬戸の平椀などがある。

(ウ) 溝

SD25 SK24の西側にある幅0.6m、深さ0.15mの東西溝で、長さ6mにわたり検出した。東側でSK27と重複し、土坑よりも古いことを遺構検出時に確認した。

遺物は、土師器皿・鍋、瓦器椀、瓦質土器火鉢、陶器椀・鉢などが出土した。

SD28 (第Ⅲ-20図) 調査区中央に位置する幅1.3m、深さ0.5mの東側調査区外に延びる東西溝で



第Ⅲ-17図 SK 1 遺構平面図(1:40) レベル高は 224.2 m

ある。溝の南側中央では、0.2～0.5m大の礫が2段積み上げられている状況が3カ所で確認できた。北側は残っていないものの、石で護岸した溝と考えられる。最も石の残りの良いものは扁平な石を上側に使用しており、最上段になると考えることもできる。

護岸の石の残りの良い所では、掘形埋土から土師器皿・鍋、瓦器碗、陶器碗・鉢などが出土している。このうち陶器には、信楽のすり鉢や瀬戸の平碗があり、15世紀後半には造られ始めていたようである。溝の方向が掘立柱建物SB46と揃うことから、同時期に存在した可能性が高い。

⑤16世紀後半の遺構

(ア) 掘立柱建物

SB47 (第Ⅲ-16図) SB46と重複する南北4間で、調査区東側に延びるために東西は2間以上である。SB46同様に西南隅に後述するSK1を伴うと考えられるため、東西棟建物と考えた。

桁行柱間は3.0m等間、梁行は全長10.4mで柱間は南から2.4m・2.4m・3.2m・2.4mと不揃いである。棟方向は、北で西に7度振れている。柱掘形は、径0.4～0.6mの円形で、深さは0.2mである。

柱穴から出土した遺物は少なく、時期決定が困難であるが、SK1が建物に伴う付属施設と考えたため、当概期の遺構とした。

(イ) 土坑

SK1 (第Ⅲ-17図) 掘立柱建物SB47の西南隅にある南北5.1m、東西5.8m、深さ0.25mの長方形土坑である。北・西・南側の三面に0.3～0.5m、厚さ0.2mほどの扁平な礫が置かれており、SB46のSK6同様に壁面に沿って礫が置かれていたものと考えられる。

出土した遺物は、土師器皿・鍋、瓦質土器鍋、陶器すり鉢、碗、甕、青磁碗などがあり、信楽焼すり鉢、瀬戸美濃の天目茶碗から当概期の遺構とした。

SK9 SK6の西側にある長3.0m、東西1.5m、深さ0.3mの長方形土坑である。

遺物は、土師器鍋、陶器や炭化物が出土しており、土師器鍋から当概期の遺物とした。

SK34 調査区中央東側にあり、土坑の幅は東側が調査区外に延びるために東西幅は不明である。南北長3.4m、深さ0.4mで、SD22より新しい。

遺物は、土師器皿・鍋、瓦器碗陶器碗、瓦質土器壺・すり鉢などと共に炭や鉄屑が出土した。

(ウ) 溝等

SZ7 調査区中央南側にある幅3m前後の南北溝で、長さは約15mにわたり確認した。西側の遺構検出面は向かって深くなっており、東側の遺構検出面からの深さは0.3mの流路である。

出土した遺物は、縄文時代から16世紀のものと同様幅が大きい。縄文土器、土師器皿・鍋・羽釜、瓦器碗、瓦質土器火鉢、陶器皿・すり鉢・壺、青磁碗、瓦、鉄製品などがある。

SD26 調査区中央にある幅1.2m、深さ0.5mの素掘りの東西溝で、西端は北に向かって曲がっている。SD28より新しい。

遺物は、土師器皿・鍋・羽釜、瓦質土器火舎、陶器皿・すり鉢・甕、青磁碗、鉄製品などが出土した。

SD36 SD26の北側にある幅4.2～5.0m、深さは1.1mと規模の大きな東西溝である。底には巨石が多数散乱していた。

出土した遺物には、土師器皿・鍋・羽釜、瓦器碗、陶器すり鉢・甕、青磁碗、貨幣などがある。

⑥16世紀代の遺構

(ア) 掘立柱建物

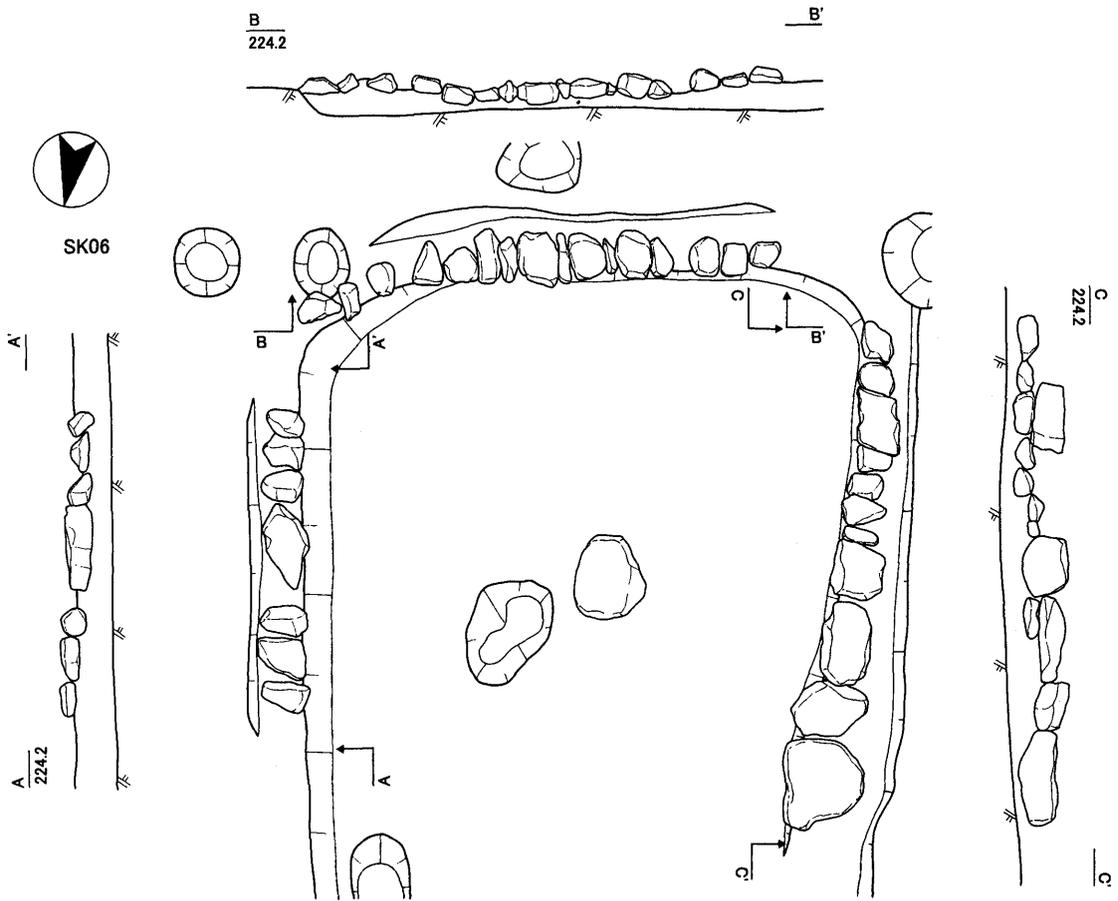
SB43 (第Ⅲ-15図) 調査区東南にある3間×2間の南北棟である。柱間は、桁行が北から2.0m・2.0m・1.5mと不揃いで、梁行は1.9m等間である。柱掘形は径0.3～0.5mの円形で、深さは0.3～0.5mある。棟方向は北で西に16度振れている。

SB44 (第Ⅲ-15図) SB43の西にある3間×2間の東西棟で、柱間は、桁行・梁行ともに2.0m等間である。柱掘形は径0.4～0.6mの円形で、深さ0.5m、棟方向は北で西に14度振れている。

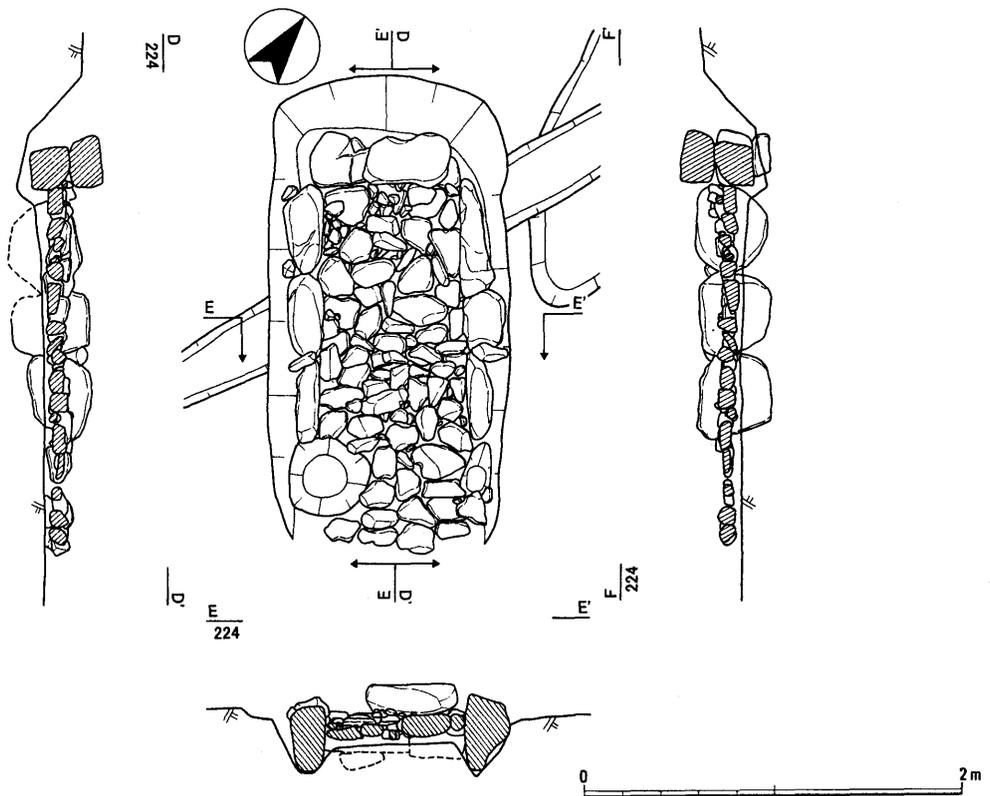
SB45 (第Ⅲ-16図) SB43の東にある4間×2間の南北棟である。柱間は、桁行が北から2.4m・2.0m・2.0m・1.8mと不揃いで、梁行は2.8m等間である。柱掘形は径0.5mの円形で、深さは0.4mである。棟方向は北で西に8度振れている。

(イ) 土坑等

SK14 調査区東南部にあるSK1の北側にある長さ1.8m、幅1.2m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。土坑外側の北側と東側に列石が3～5



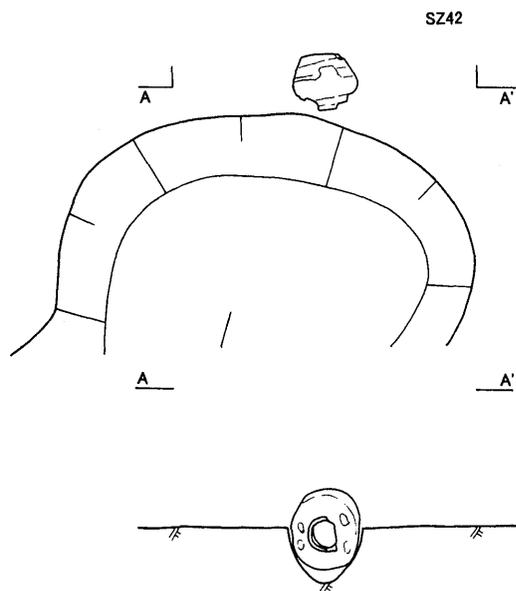
SX30



第Ⅲ-18图 SK 6、SX 30 遺構平面図(1:40)

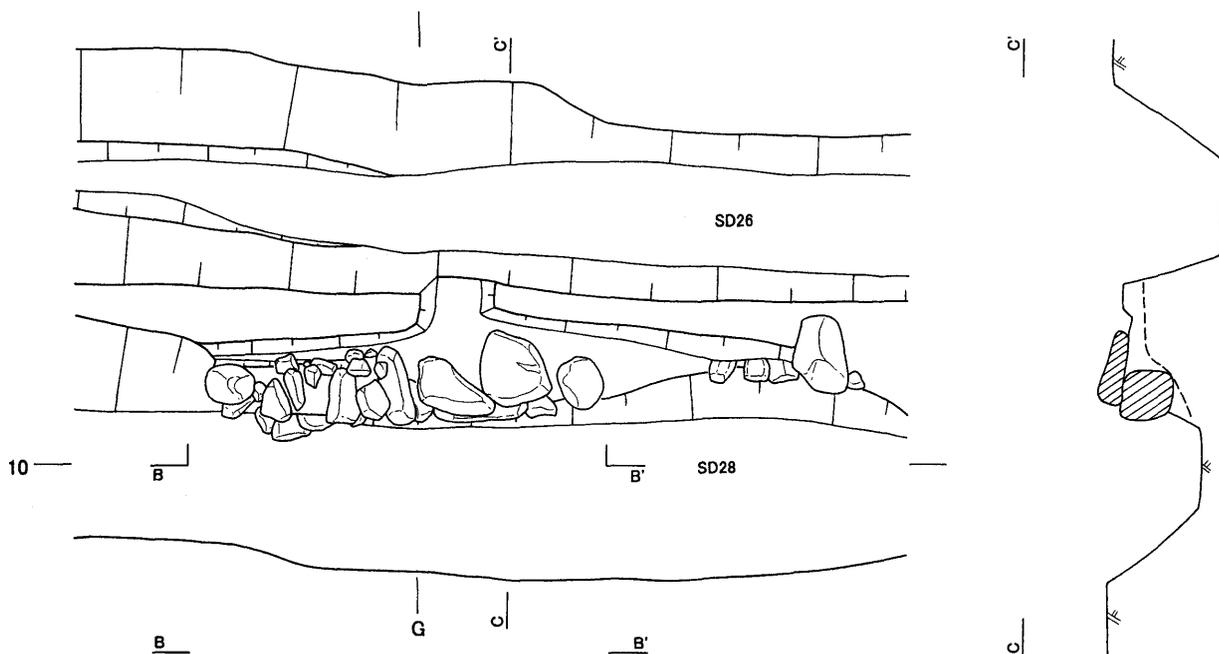


12



Gラインから
東へ2m

第Ⅲ-19図 S Z 42 遺構平面図(1:10) レベル高は 224.4 m



第Ⅲ-20図 S D 28 遺構平面図(1:40) レベル高は 224.4 m

石確認できているが、南側と西側は側石が壊されており、掘形も不明なため、東西の長さは2.2m以上、南北の幅1.7m以上となる。側石を伴うSK1の様な土坑と考えられるが、SK1などよりも小規模なものであり、付属していたと考えられる建物については確認できていない。

遺物は、土師器片と信楽焼のすり鉢が出土しているだけで時期は明確ではないが、形状がSK1と類似するが時期の細分ができないため16c代とする。

SK21 調査区東南部にあるSK14の西北にある長さ2.7m、幅1.7m、深さ0.2mの楕円形を呈する。北・西北部に側石が検出でき、建物に伴う土坑の可能性が高いが、SK14同様不明である。

遺物には土師器皿、信楽焼すり鉢、天目茶碗などのほかに壁土も出土した。SK14同様に形状が類似するため当概期にした。

SK27 調査区中央東側にある長さ3.2m、幅2.3m、深さ0.3mの楕円形を呈する。東側が深さ0.1mと浅い。

土師器皿・鍋・羽釜、瓦器碗、陶器碗・すり鉢・甕などがあり、15～16世紀の遺物が混在していた。

SK35 調査区中央SD36の南側にある長さ3.2m、幅3.0m、深さ0.1～0.2mと凹凸があり、平面形態から見て複数の土坑が重複していた可能性が高い。

遺物は少なく、瓦器碗、信楽のすり鉢片が出土しており、16世紀以降の遺構と考えられる。

SK37 調査区北端にある南北長約13m、幅2.4m、深さ0.2～0.7m楕円形を呈する。複数の土坑の連なったものと考えていたが、埋土に差がなかったため、一つの土坑として遺物を取り上げた。北側からは瓦器碗が多数の石に潰された状況で出土したほか、中央付近からは骨片が出土した。

出土した遺物には、土師器皿・鍋・羽釜、瓦質土器碗、瓦質土器火鉢、黒色土器碗、青磁碗、陶器碗・すり鉢・甕などのほか、砥石や不明鉄製品がある。

SX30 (第Ⅲ-18図) 中央西側に位置する長さ2.5m、幅1.2mの長方形土坑である。東側が0.3mと深く、西側に向かって浅くなっているため、西端は削平されている可能性が高い。

東側には長さ0.4m、厚さ0.2mの石が2段積み、北・南側面には長さ0.5m、厚さ0.2mの扁平な石が

3石立てられていた。底面にも0.2mほどの礫が敷き詰められている。SD26より遺構検出面では古いと判断したが、礫のある部分は溝の掘り下げが浅くなっているため、遺構図面では溝より一見新しく見え、調査時点で遺構の重複関係を混乱させた。

遺物は、土師器皿、鍋、瓦器碗などが出土しており、ここでは遺物から見て中世の遺構としておく。しかしながら、遺構の形態を見ると古墳の石室とも考えられ、後世の遺物が混入している可能性も残っているが判断がつかない。いずれにしても、SX30は、調査区東側にある石室が残る六地藏1号墳との関係から興味深い遺構と言える。

⑦時期不明の遺構

(ア) 土坑

SK16 調査区西側にある長さ2.4m、幅1.2m、深さ0.6mの長方形土坑である。SK22より新しいが、遺物は土師器皿・甕、瓦器碗、不明鉄製品がわずかに出土しただけである。時期的には16世紀の遺構とすべきものかもしれない。

SK38 調査区北側にあるSK37の西側にある長さ2.8m、幅1.5m、深さ0.1mで一定の形を取らないものである。

遺物は、時期不明な土師器片と瓦片しかない。

SK40 前述した16世紀代の遺構としたSK21より古い。東西2.6m、南北はSK21に壊されているが1.5m程度、深さ0.15mの楕円形を呈する。

遺物は、瓦片を1点出土しただけで、重複関係から、SK21より古い16世紀以前としか判断できない。(泉)

(3) 遺物

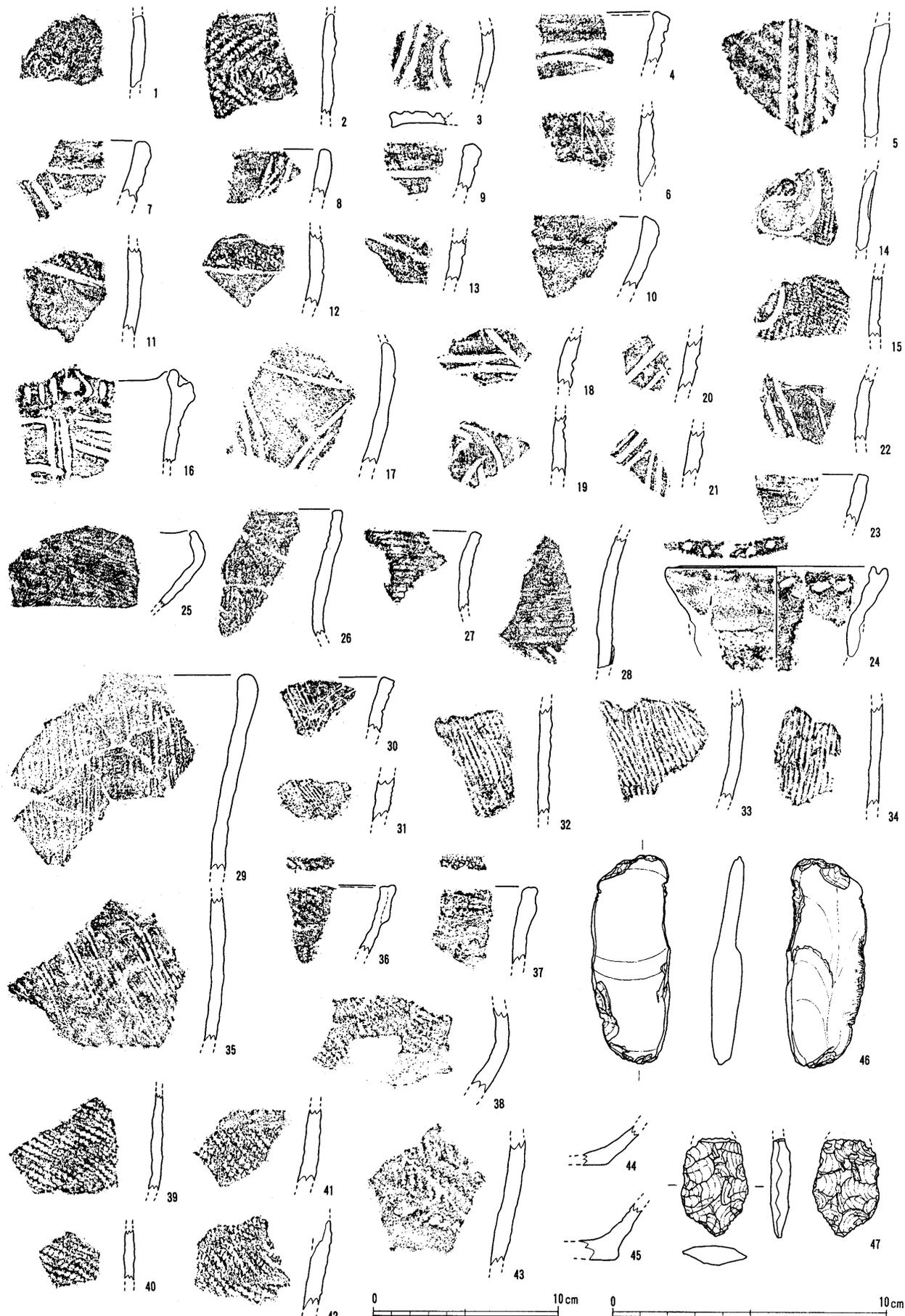
調査で出土した遺物はコンテナで19箱と少ない。奈良時代以前の遺物が若干あるが中心は、中世のものである。

①縄文時代の遺物

遺構出土として取り上げたものもあるが、遺構としての安定性に欠け、全て包含層遺物として扱う。

a 縄文土器

1は、人爪状の痕跡の残るもので、前期の北白川下層式系の土器と思われる。2も、羽状縄文の頂点部分にループ上の圧痕があり、1同様、北白川下層式系の土器と思われる。



第Ⅲ-21図 出土遺物 (1) (1:3, 46・47は1:2)

3～6は、中期末葉に比定できる土器で、沈線文による文様表出を行う。3は富士山形の山形口縁を呈するもの、4は平縁口縁、5～6は胴部片で縦沈線内に矢羽状文を施す。

7～15は、有文と無文を含むが、口縁形態や文様などから概ね後期初頭の中津式を中心とした時期に比定できよう。磨消縄文をもつ土器は、11～13は沈線内に縄文を充填するのに対し、14～15は沈線内を無文とする。

16～24は、後期前葉に比定しうる土器で、沈線で文様を表出する。このうち口縁部の残る16は、口縁部に縁帯文をもち、頸部にも太沈線によるクラック的な文様を充填しており、広瀬土坑40段階から北白川上層式にかけての時期と思われる。

25～26は、口縁部の特徴から後期中葉～後葉に比定でき、条痕調整の27～28も同時期であろう。

29～35は、条痕ないしは条線をもつ粗製土器で、詳細な時期限定は難しいが概ね後期に属しよう。このうち、口縁部から原体が細い条線が施される30は後期前葉に属するものと推定される。

36～43は、縄文を施した土器である。肥厚した口縁部に帯状の縄文を施す36や37は、中期末葉に類例があるが、他は時期限定の難しいものが多い。

44～45は縄文土器の底部である。底部外面に網代等は見られない。

b 石器・石製品

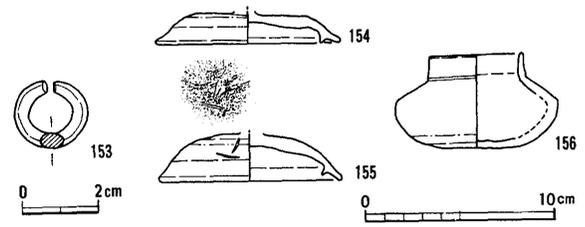
46は、全体（特に図上左面）に擦痕があり、使用痕と推定されるが、用途はよくわからない。

47は、サヌカイト製の有茎尖頭器の基部である。茎部の形成はやや不明瞭である。（穂積裕昌）

② 奈良時代の遺物

SH29出土遺物（48～51） 48・51はカマド部出土の土器である。48は胎土が均質で所謂都城で出土する土器と類似する。49は須恵器杯である。概ねTK46型式併行期の所産と考えられる。

SD41出土遺物（153～156） 153は中実の金銅製耳環である。154・155は須恵器杯蓋である。欠損しているが、いずれも宝珠形つまみがつくと思われ、TK217型式併行期の所産と考えられる。155の頂部にはヘラ記号が見られる。156は須恵器短頸壺である。



第Ⅲ-22図 出土遺物(2) SD41

③ 平安時代末～鎌倉時代の遺物

SK12出土遺物（52～56） 52は白磁皿である。53は土師器皿、54は瓦器皿、55・56は瓦器碗である。いずれも13世紀前半代の所産と考えられる。

SK17出土遺物（57～59） 57は土師器皿である。58・59は13世紀前半代の瓦器碗である。

④ 鎌倉時代末～室町時代前期の遺物

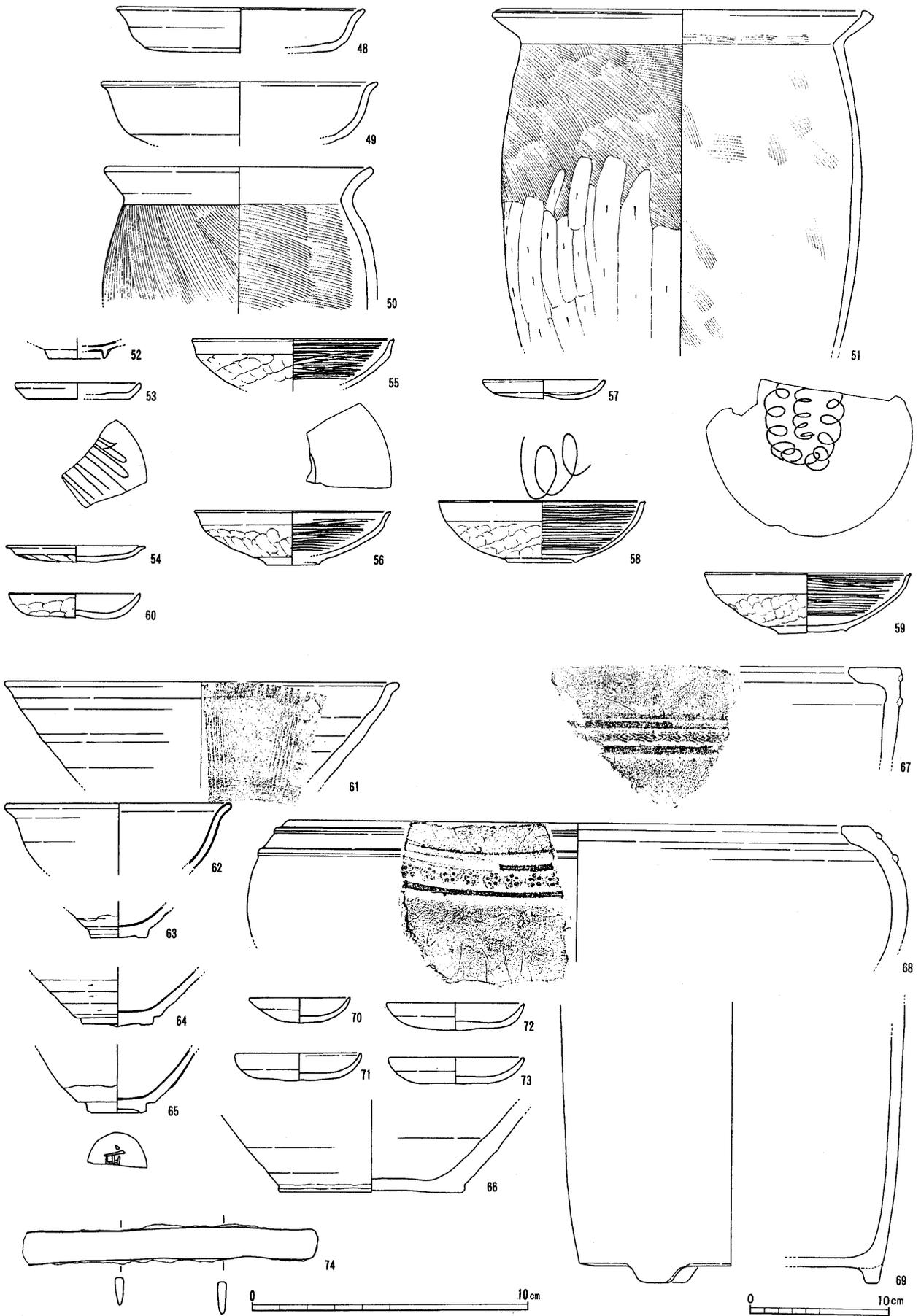
SK22出土遺物（60～61） 60は土師器皿である。61は信楽産陶器插鉢である。挿り目は5本である。

SD32出土遺物（62～73） 62は青磁碗である。63・65は天目茶碗である。63は古瀬戸編年後期Ⅰ段階の所産である。65は後Ⅳ古段階である。底部外面に「廣」と思われる墨書が施される。64は陶器平碗と思われる。後Ⅳ古段階の所産である。66は陶器鉢である。内面は使用のため磨耗している。信楽産と思われる。67～69は瓦質土器である。67・68は奈良火鉢の浅鉢、69は同じく奈良火鉢の深鉢である。70～73は土師器小皿である。口縁端部にヨコナデを施すなど同様の造りである。

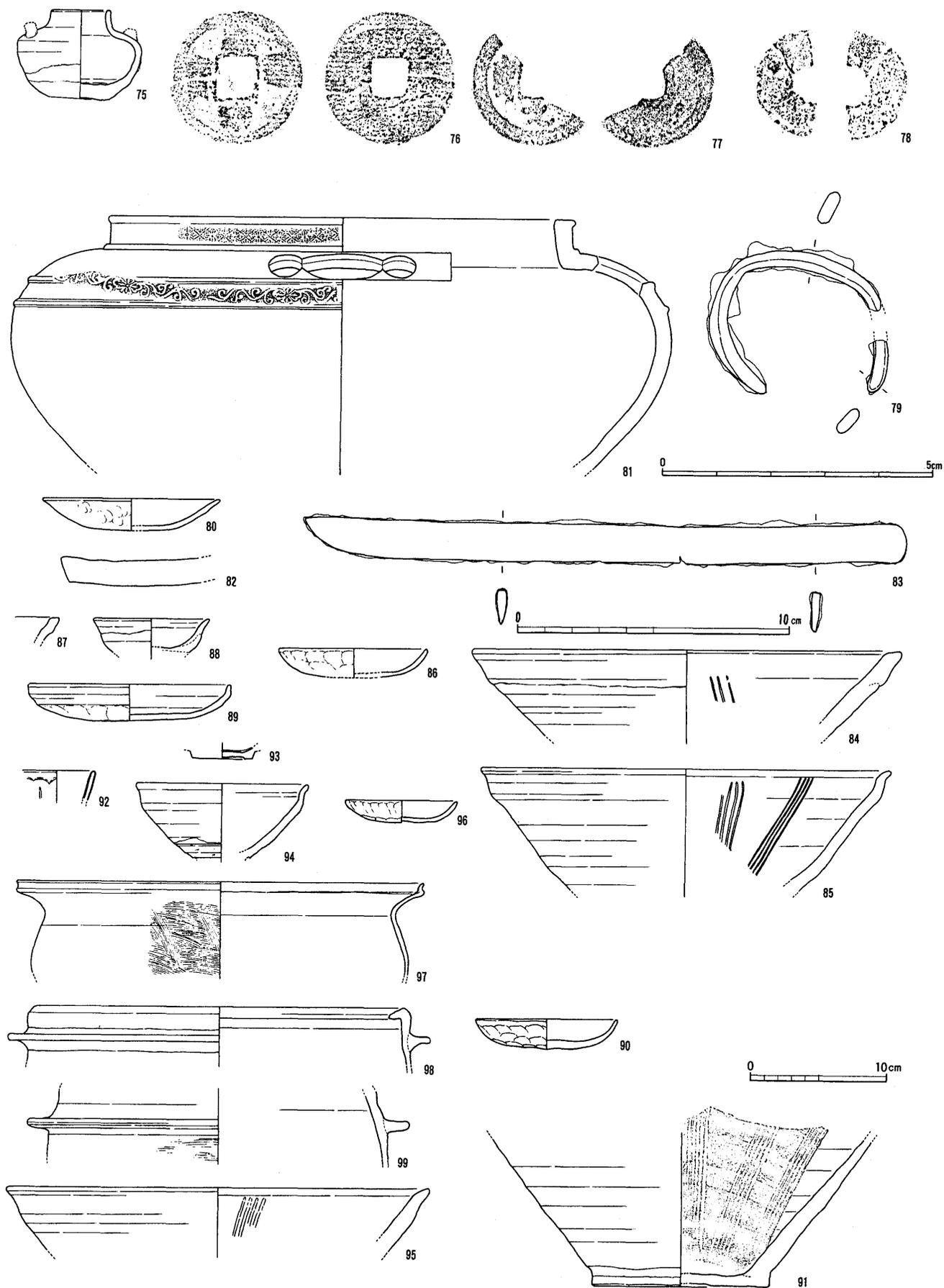
SZ42出土遺物（75～79） 75は瀬戸産陶器壺である。両側肩に把手が取り付け。後期後半～末の所産と考えられる。内部から76～79が出土した。76は皇宗通宝である。77は前の2字は欠損しているため不明であるが□□元宝と読める。78は内外面に文字は見られず、厚み1.0mmと薄いことから、私鑄銭と考えられる。79は環状鉄製品である。端部は丸く造り、断面は隅丸長方形である。

⑤ 室町時代後期の遺物

SK6出土遺物（80～83） 80は土師器皿である。81は瓦質土器風炉である。肩部・頸部に施されるスタンプ文には切れ目は見られない。82は平瓦である。表面には2次的な被熱の痕跡が見られる。83は鉄製



第Ⅲ-23図 出土遺物 (3) (1:4, 74は1:2)



第Ⅲ-24図 出土遺物(4) (1:4, 76~79は原寸・83は1:2)

小刀である。柄部にあたるどころも断面はやや刃を作り出すように見られる。目釘穴は確認できないことから、未製品の可能性がある。

SK27出土遺物(84~86) 84・85は信楽産挿鉢で、84は全体的に摩滅激しい。86は土師器皿である。

SK37出土遺物(87~89) 87は瓦質土器鍋もしくは鉢である。88は土師器皿もしくはミニチュア製品である。粘土接合痕が明瞭に観察できる。89の土師器皿は口縁端部にヨコナデを強く施し段をなす。

SK18出土遺物(90・91) 90は土師器皿である。91は信楽産と思われる陶器挿鉢である。挿り目は5本を1単位とする。

SK24出土遺物(92~99) 92は青磁碗口縁端部である。外面に蓮弁状花文を施す。93・94は天目茶碗である。94は古瀬戸後期Ⅳ古段階の所産である。95は信楽産陶器挿鉢である。全体的に磨耗激しい。97は土師器南伊勢系鍋である。98・99は土師器羽釜である。大和地方で見られる形態と類似する。

SD20出土遺物(100~102) 100は瀬戸産陶器皿である。端反皿の可能性はある。101は土師器南伊勢系鍋口縁部である。102は鉄釘である。図の正面が釘頭の屈曲部分である。

SD25出土遺物(103) 土師器南伊勢系鍋口縁部である。

SD28出土遺物(104~118) 104は青磁碗、105は天目茶碗である。106は瀬戸産陶器平碗である。後期Ⅳ新段階の所産と思われる。107~116は土師器小皿である。内外面ともユビオサエ・ナデで成形・調整し、底部外面に特にユビオサエが顕著に見られるという調整方法が共通する。109・115は口縁部内面に油煙痕が見られ、灯明皿として利用されたものと思われる。113の内面には板状ナデの痕跡が明瞭に観察できる。117は土師器脚付皿である。118は信楽産陶器挿鉢である。挿り目は4本を1単位とする。

SX30出土遺物(119) 土師器皿である。内面はナデ成形・調整、外面はユビオサエが顕著である。

SZ7出土遺物(120~131) 120は瀬戸産陶器平碗である。後期Ⅳ古段階の所産である。121は信楽産陶器挿鉢である。挿り目は5本1単位が基本であるが、4本の部分もある。122は常滑産陶器甕口縁部

である。中野氏編年の11段階の所産と考えられる。123は陶器である。匣鉢の可能性はある。124は瓦質土器火鉢のスタンプ文部分である。125は土師器南伊勢系鍋である。126~128は鉄釘である。126・127は方形頭を叩きかして固定する。128は脚部である。129は鉄製刀子である。関部は鈍角に開く形状を呈す。130・131はⅡ層出土の青磁碗である。

SK1出土遺物(132~138) 132・133は信楽産陶器挿鉢で、132は残存部で6本1単位、133は4本1単位の挿り目を施す。134は124と同様の瓦質土器火鉢スタンプ文部分である。135は土師器皿である。136は土師器三足壺か。137は鉄釘で方形頭を叩きかして固定する。138は緑泥片岩製砥石である。1面にのみ研磨面が見られる。金属製品用の砥石か。

SK8出土遺物(139) 陶器片口鉢で、信楽産か。

SK34出土遺物(140・141) 140は瀬戸産陶器平碗片である。141は同じく瀬戸産陶器壺である。卵腰の形状を呈し、12世紀代のものと思われる。

SD26出土遺物(142~151) 142は瀬戸産陶器蓮弁文写しの丸碗である。143・144は瀬戸産陶器端反皿である。大窯Ⅰ段階の所産である。145は瀬戸産陶器浅鉢と思われる破片である。146は瀬戸産陶器直縁大皿である。147は信楽産陶器挿鉢である。全体に磨耗が激しいため挿り目についてははっきり言えないが、3本1単位か。148~150は土師器皿である。148・149は全体にユビオサエ痕が明瞭に見られる。151は土師器南伊勢系鍋である。

SD36出土遺物(152) 青磁碗である。

⑥ 時期不明の遺構出土遺物

SD11出土遺物(74) 鉄製工具である。両端部は隅丸方形に造り、図の下部に刃部を造る。目釘穴等は見られない。工具もしくは刀子等の未製品の可能性がある。

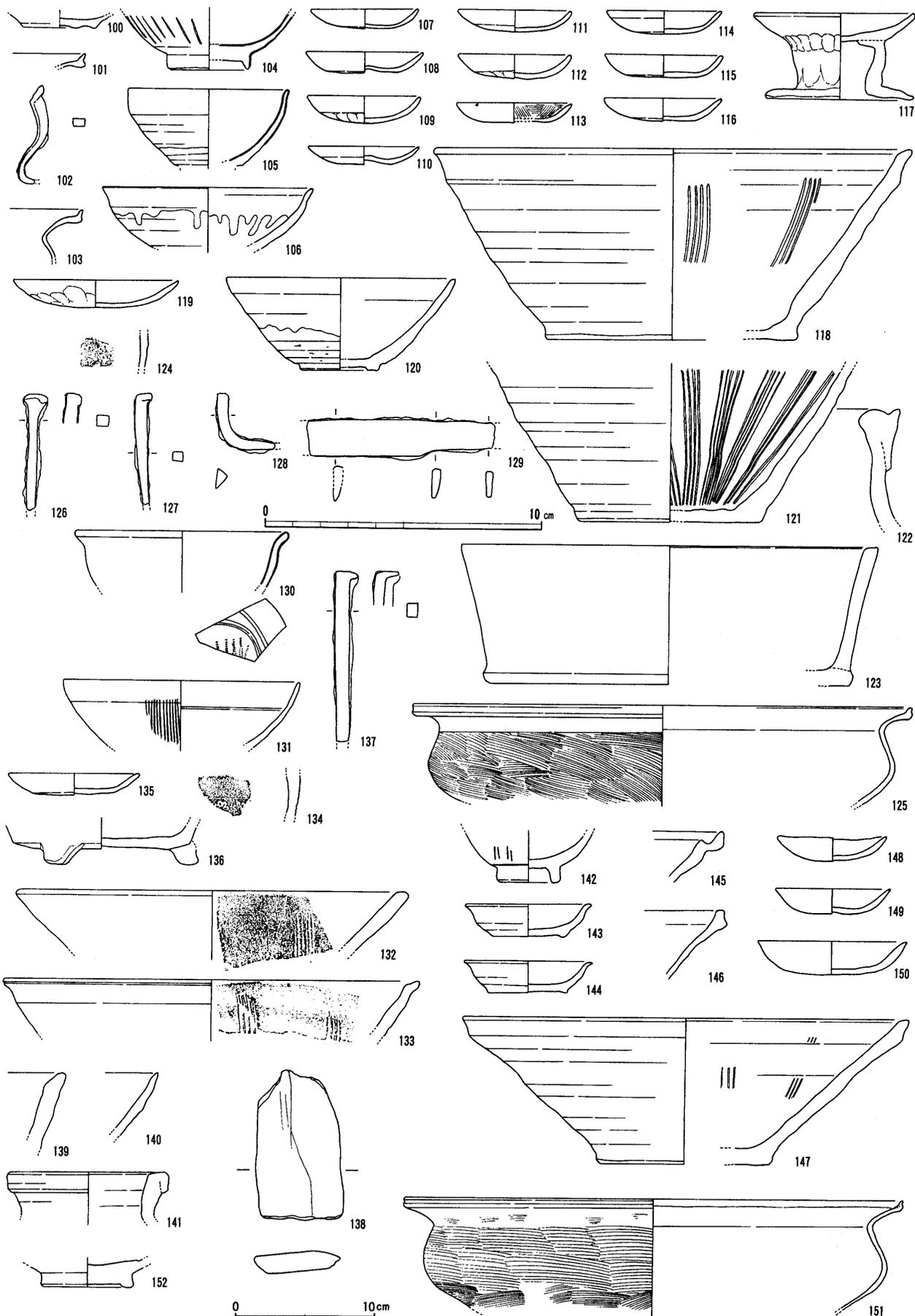
(泉)

註

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

以下、古瀬戸製品の編年については、藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X 1991)、藤澤良祐『瀬戸市史陶磁史篇』四 1993を参照した。

赤羽一郎・中野晴久「生産地における編年について」(『中世常滑焼をおって』資料集 1994)



第Ⅲ-25 図 出土遺物 (5) (1:4, 126~129・137は1:2)

4. 調査のまとめ

(1) 縄文時代の遺物

高寺遺跡及び六地藏B遺跡からは、縄文時代の遺構は確認できなかったが、前期・中期・後期の遺物が出土し、当地で縄文時代から生活が営まれていた可能性をうかがうことができた。

高寺遺跡出土の新保・新崎式系統の土器は北陸地方中期前葉のもで、粟津湖底遺跡など近江地方にももたらされ、上野市の源鳥C遺跡¹でも出土している。北陸から近江、そして伊賀地方へと、当時の土器分布圏を知る貴重な資料を今回の調査で得ることができた。

(2) まとめ

高寺遺跡及び六地藏B遺跡の調査により、縄文時代から高寺遺跡及び六地藏B遺跡では、飛鳥から奈良時代、平安時代末期から室町時代後半の遺構を確認した。両遺跡が位置する伊勢路は、大和と伊勢を結ぶ交通の要衝であり、これに望む地域として、連綿と生活が営まれていた繁栄していた様子を伺うことができた。

(野口)

[註]

- 1 上野市教育委員会『上野新都市開発整備区域埋蔵文化財発掘調査報告書―第1分冊』1993年



高寺遺跡調査区全景(東から)



SB26・27 (北から)



SH22 (南西から)



SH24 (南西から)



調査区全景（北から）



調査区南側（東側中央で南西から）



SK 1 (東から)



SK 6 (北から)



S X 3 0 (北から)



S X 3 0 (西から)



SD26・28 (東から)



SD28 (北東から)

平成 7(1995) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 3 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 125-2-1

井戸地遺跡 高寺遺跡 六地藏B遺跡

1995年3月発行

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社
